ディケンズの文学

広島大学助教授
田辺昌美著

東京 南雲堂 神田

父母に捧ぐ

はしがき

最後の未完小説を加えるとディケンズは三十六年余の作家生活を通じて十六篇の長篇を書いた事になる。これにクリスマス物も加えてそれらの作品についての作品研究を主体とした考察をまとめようとしたのが本書である。今日まで個別に雑誌その他に載せて頂いたものも多少利用したが，ほとんど全部を新しく書きおろしてみた。少しでも一貫性ができればと希ったからである。作品研究とは言いながら，究極する所は人間ディケンズの問題に帰着せざるを得なかった。菲才の上に人生経験も浅い著者にとっては，方法論，或はその内容的な面での忌憚のない御叱正を諸賢に御願いしてやまない。

書き終えて痛感させられる事は，この様な研究とも呼べぬ研究を今日まで続けさせて頂いた事はひとえに研究室はじめ諸先生，諸先輩に負う以外のものでないという事である。とりわけ山本忠雄，小川二郎両先生には英語の読み方の手ほどきから今日まで一々の指導をして頂いたが，ようやくまとめてみると却って両先生の名を汚すものしかできなかったのではないかと忸怩たるものがある。お詫びして将来に俟って頂く以外にない。

最後に出版に関して御好意を与えられた南雲堂に対し，及び索引作製の労を惜しまれなかった原田東雄氏に対して深甚の謝意を表したい。

—— 1959 年夏

目　　次

はしがき…… 3

Ⅰ　天才の誕生…… 7
　—*Sketches by Boz*

Ⅱ　伝統と Boz の世界 ……24

Ⅲ　Pickwick の出現……45
　—*Pickwick Papers*

Ⅳ　貧困と悲惨の文学……64
　—*Oliver Twist*

Ⅴ　征服と芸術……83
　—*Nicholas Nickleby*
　—*The Old Curiosity Shop*

Ⅵ　恐怖と悪の問題…… 115
　—*Barnaby Rudge*
　—*Martin Chuzzlewit*

Ⅶ　芸術の完成…… 137
　—*Christmas Books*
　—*Dombey and Son*
　—*David Copperfield*

Ⅷ　ヒューマニズムと社会悪…… 166
　—*Bleak House*
　—*Little Dorrit*
　—*Great Expectations*

Ⅸ　抵抗，勝利，敗北…… 196
　—*Hard Times*

— *A Tale of Two Cities*
— *Our Mutual Friend*
— *The Mystery of Edwin Drood*

研究書誌…… 220

索　　引…… 224

I 天才の誕生

—*Sketches by Boz*

どの様にして *Sketches by Boz*[1] の様に精力的な文学，それまでに人類が見た事もない全く新しい文学が生れたのか，その天才の秘密は知る由もないが，機械文明と共に勃興した新しい庶民階級の精力と清新さをになって Dickens の文学も出発した事が指摘できるであろう。百年前 Defoe が封建社会に代るものとしての，新興階級の生命力を背景にして生れたのと同じ現象と言えよう。それまでの知識階級や上流社会には軽蔑されたであろうが，たしかに彼等には全くなかった逞しい生命力を持った別個の文学であった。大衆の生命力を代表する文学である。文学史的に跡づけると必然的に生れるべくして生れたのだと解釈できる面を持つと同時に，全く意外に爆発的に生れたものと解釈できる面も強い。誠に神秘に溢れた作品である。

「バルーンだ！」

だれかが空に浮いた気球を見つけて叫ぶ。さあ大変，店員も子供も，コックも番頭も，紳士も淑女も，そこら中の老若男女が道に飛び出ると，魅せられた様に空を見上げ，気の早い者は現場に向って走りだす。眠った様なけだるい真昼の街路に急に一本の生命の筋が通って騒然と躍動して来る。

これは Dickens の処女作 *Sketches by Boz* の一場面[2]であるが，考えてみれば，誠に他愛ない素朴な世界でもあ

(1) 単行本としてまとめられたのは1836年であったが，雑誌に投稿して印刷され始めたのは1833年，Dickens 二十一才の時であった。

(2) *S. B.*, Scenes : XIV

る。原子兵器はおろか，電気も汽車もまだなかった世界である。手工業が蒸気機関の発明によってやっと機械工業に脱皮しようとしていた頃のことであった。大空への夢を実現する手がかりを気球によって漸く摑んで，人類を興奮のるつぼに追いやった頃のむしろほほ笑ましい情景である。

この気球が象徴するものの一つは，これが人類の夢をになったロマンティシズムの象徴であるという事である。吸いこまれる様に，そして遂には首の骨がはずれそうになるまで(... till they almost dislocated their necks)[1] 飽かず見上げる態度の中に見られる，純真なよろこび，忘我恍惚，憧憬，驚嘆，等は最も素朴な浪漫精神の表現であろう。たしかに散文的ではあるが，虹に心躍らせる Wordsworth の魂にも通じるものが感じられる。その様な健康な精神に支えられた世界では，その夢がそのまま人類の幸福へつながる事も可能なものとして考えられた筈であり，その夢に動かされてこそ人類は気球をも含めて科学技術と取組むようになったのでもあろう。恐るべき人間対科学の非情な対立関係の塵埃も未だ予見されなかった素朴健康な世界であった。

しかし同時にこの気球が象徴する科学は，やがては人類の手ではどうにも扱い様のなくなる恐るべき現代科学につながる。魅せられて見とれているのはよいが，あれよあれよという間に，その恐るべき素性を暴露してはばからない一種の怪物でもあった訳である。

Dickens の文学を考える上でこのバルーンは恰好の材料を提供してくれる。Dickens が描こうとしたのはこの気球に恍惚と見とれ，憧れ，走り寄る民衆であったと極言することもできよう。気球に対して批判的な眼や反抗的な態度を取る知識人ではなかった。

単純に感激し，単純に泣き，人前もはばからず嬉しければ

(1) *S. B.*, ibid.

相好を崩して笑い，珍しければ気球めがけて走り寄る嬰児の如き人間である。その意味で Dickens は社会的な拘束や規正を受けた人間を逆にもう一度原始のままの真裸の人間に還元して見せてくれた作家とも云えよう。素朴単純で他愛ないとも云えようが，真実の人間性はあらゆる社会的な拘束や規正を取除いてはじめて見られる筈である。そして万古不易の人間の真実は Dickens が描いて見せてくれたように案外単純至極なものでもあろう。「子供は大人の父」という諺の真実もこの意味で考える事ができる。少くとも Dickens にとってはその様な古くはあるが不易の生命への愛情信仰がその作家生活のバック・ボーンとなっている事は事実である。そしてその愛情，信仰の強度が L. Cazamian(1) の様に Dickens を Wordsworth に劣らぬロマンティストと判断させる基準となっているのろう。

そのことは同時に気球の象徴する悪い意味での科学世界，物質世界，ひいてはそれらの先棒となった非人間，等が醸す諸悪に対する攻撃ともなって現われて，Dickens 文学特に後半生のそれの大きな課題となって展開されて来ているのも当然と云えよう 。

しかし，Dickens が人間の生命力を真裸の姿で把握表現し得た天才的な作家であり，同時に悪に対する抵抗闘争に徹して生涯を貫き得た意志の作家であるとする考え方は三十七年近い作家生活から綜合し得る一つの結論であって，個々の作品にすべてその二つの面が理想的な調和の形を保って表現されている訳ではない。特に最初の *Sketches* にはその名にふさわしくデッサン的な習作も多く，他の作家やその他の要素からの影響も強く残されて，純粋に Dickens 的と云うより雑多の要素が含まれているとしても，兎も角もこれが今迄に人類の知らなかった全く新しい文学の芽生えである事は疑う

(1) *A History of English Literature*; Pt. II, Bk. V, III

余地がない。まさにバルーンの如く忽然と現れ，バルーンの如く世の驚嘆と喝采を集めたと云ってよい。

単行本初版 (1836) の frontispiece は Cruickshank (1) の手になり，バルーンの下に群った紳士淑女がシルク・ハットやハンカチを手に手に気球を仰いで万才を唱えている印象的な絵であるが，内容的にはその様な群衆を描くと同時にこの作品はその様な熱狂を以て迎えられたという意味でも印象深い。しかもその序文に Dickens 自身はこの書を世に送る気持はまさに 'pilot-balloon' をあげる時の気持である事を洩らしているのも印象的である。

貧困につまされ，時には靴墨工場で働かねばならなかった事さえあるほどの少年時代の屈辱を経て，法律事務所の見習をしながら速記術を独習して，*True Sun* 誌の編集員として採用されたのは若冠二十才の時であった。主として下院の Reporters' Gallery 詰めの記者として国会議事その他の速記の仕事に携ったが，速記能力は抜群で *True Sun* 誌の名声を高くする上で Dickens の速記は非常に大きな役割を演じたと云われるほどである。有名人や政治家が地方に回れば Dickens も行を共にして取材することもあれば，翌日の締切時間に間に合わす為に夜を徹してのロンドンへの車中で原稿整理を強いられるほどの忙しさも珍しくなかったと云われる。

その様な多忙煩雑な生活の中で偶々 1833 年暮 *Monthly Magazine* 誌に Boz の名で投稿した小品が採用されて活字となり次々に書くものが採用され，次第に注目を浴びはじめ，やがては喝采をさえ拍し始めたのである。恐らく本人も意外で，無我夢中で書き続けたものであろうが，書きなぐる様な勢で発表したものを訂正加筆して単行本にしたのが，二十四才の時であるから，まだ作家として生涯を貫き得る自信や抱

(1) G. Cruickshank〔krúkʃæŋk〕(1792–1878) Grimm, Dickens, Thackeray 等の挿絵画家として Hogarth の画風を伝えた。

負を固めるには余りにも若すぎる。ただ幼少の時から胸中にヒタヒタと沸る「成功」への情熱のままに，書きなぐって，一か八か，期待と恐怖との入りまじった奇妙な焦燥にかられながらまさに‘pilot-balloon’を放つ時の乾坤一擲のせっぱつまった気持は，この大作家の運命を決した瞬間であるだけに殊に印象深く回想されるのである。

素知らぬ風を装って買って開いた雑誌にはじめての作品 *A Dinner at Poplar Walk*（後に *Mr. Minns and his Cousin* と改題）が載っているのを見た Dickens は喜びの余り涙が出て仕方がなく，半時間も暗がりに人目を避けていた(1)というエピソードは，Dickens の運命を決定する上では非常に感銘的な事実であるとしても，作品としては必ずしも立派なものではなかった。人づき合いの嫌いな Minns 氏という金持ちの独身男が，たった一人の甥に遺産目当てにつかまって招待され，嫌応なしにパーティに引張り出されて散々失敗や嫌な目に遇わされる物語りを滑稽な筆致でまとめた小品である。

しかしこの作品を手がかりにする事によって後に Dickens 的な特長となるものの一部に触れることは可能である。

先ず何よりも明瞭な事は，登場人物が既に何等かの性癖を持っているという事である。Minns 氏は立派な紳士であるが，犬と子供に対しては病的な恐怖を抱く奇人である。相手の Budden 夫妻は子供を金持にしたいという欲望の虜になっている。パーティでの司会役をつとめる赤鬚の小男は，自分が持っている唯一の文学知識，Sheridan についての知識を披露する機会はないものかと，それのみをねらってパーティの最初から虎視眈々としている。

だから Minns 氏は顔を出すあらゆる場所で子供と犬に散々な目に会って読者を笑わすし，自分の子供をこの世で一番偉い子供であると他人に思わせようとする両親は滑稽をふり

(1) Preface to *Pickwick Papers*

まくし，赤鬚の男は Sheridan を口にすると その都度遮られ，ここを最後とばかり意気ごむと，パーティが終るのである。その様な喜劇的な笑いの数々はヒューモアとは程遠いが，少くともそれを生むものとして性格 (character) とまでは行かなくともはっきりした一つの性癖 (idiosyncrasy, propensity) を材料としてこの物語が構成されている訳で，やがて人間の性格が基礎となる為の前段階である事は明かである。

同じ様な面白さは，その witticism (wordplay) にも端的に現れている。

"... I really thought it was a cut above me."(1) 最近買入れた邸は立派ではじめて見た時は立派すぎると考えたほどだと Budden が自慢話をしているのである。ところがそう話しながらも力まかせにハムを乱暴に切りまくる Budden 氏の無作法を見かねて Minns 氏が上の言葉を受けてたしなめる。

"Don't you think you'd like the ham better if you cut it the other way?"

次の文章も同種の酒落と共に若さに溢れた直截さを見せる好例と云えよう。

"Amelia and I were talking about you the other night, and Amelia said —— another lump of sugar, please ; thank ye —— she said, don't you think you could contrive, my dear, to say to Mr. Minns, in a friendly way —— come down, sir —— damn the dog! he's spoiling your curtains, Minns —— ha! —— ha! —— ha!" Minns leaped from his seat as though he had received the discharge from a galvanic battery.

(1) It is a cut above me.「身分不相応な開きがある」の意の colloquialism

Budden 氏が Minns 氏に招待の誘いをかけている会話であるが，途中で砂糖を貰い，奥さんの言葉に外れ（don't you think...），to come down と続くべき所を犬がカーテンを噛んでいるのに気がついて，こら，やめないか（come down, sir）と犬をたしなめる言葉に急転して，それでも Minns 氏をいい気味よとばかり笑い飛ばす。清潔で綺麗好みの Minns 氏にしてみれば，カーテンが破られたとあってはまさに青天の霹靂，電撃に打たれたかの如く飛びあがるというのである。

come down にかけた駄酒落をはじめ Ha—ha—ha と勢のよい下司な哄笑と云い，電池（galvanic battery）の放電にあったかの様に飛び出す Minns 氏の驚きと云い，何れも風雅の境地とは対蹠的に，直截で精力的で力に溢れている。何かを浮彫りにしてみせる客観化の態度とは逆に，生命力のまま体当りの生き方をしようとする貪欲な生活力がそのまま行間に溢れている。年令的な若さと同時に，Dickens 独自の生命力を暗示させるものと云えよう。その表現が持つ力強さ集中力は，後に，よい意味でも悪い意味でも誇張の文学，戯画の文学というレッテルで特長づけられるものへ発展する筈のものである。

パーティがはじまって一同が食欲を満足させる事に熱中している最中も一方では Budden 夫人によって 'by-play' が演じられる。

... a great deal of by-play took place between Mrs. B. and the servants, respecting the removal of the dishes, during which her countenance assumed all the variations of a weather-glass, from "stormy" to "set fair."

目で召使に合図しても思う様に動いてくれない時の「嵐」を思わす表情から，御満悦の「晴」に到るまでのあらゆる表

情がパントマイムとなって捕えられたこの例などは後の神技を思わす鮮かな表現力を既に予告していると云えよう。

大嫌いなパーティへ出席する事をしぶしぶ承諾させられてその約束の日曜を待つ悄げた Minns 氏を描いて次の様に云う。

... looking forward to his visit on the following Sunday, with the feelings of a penniless poet to the weekly visit of his Scotch landlady.

表現の深味はないにしても簡明な鮮かさは初期の特長の一つである。

次の引用文は，愈々約束の日，遅れそうになって馬車に乗り込んでからの描写である。

... a coach was waiting at the Flower-pot, into which Mr. Augustus Minns got, on the solemn assurance of the cad that the vehicle would start in three minutes—that being the very utmost extremity of time it was allowed to wait by Act of Parliament. A quarter of an hour elapsed, and there were no signs of moving. Minns looked at his watch for the sixth time.

"Coachman, are you going or not?" bawled Mr. Minns, with his head and half his body out of the coach window.

"Di—rectly, sir," said the coachman, with his hands in his pockets, looking as much unlike a man in a hurry as possible.

"Bill, take them cloths off." Five minutes more elapsed: at the end of which time the coachman mounted the box, from whence he looked down the street, and up the street, and hailed all the pedestrians for another five minutes.

これは既に *Pickwick Papers* の世界である。

Minns 氏は礼儀正しくおとなしい人の筈であるが待ち切れず大声で叫ぶ (bawl) 等というのはその性格と齟齬するが，その様な前後の不調和を考えないでこの描写だけを取り上げると完全に Pickwick 氏の世界である。馬車と御者とその雑役夫は Pickwick の世界の象徴でもある。Bill という名のその雑役夫に Minns 氏がすぐ発つかと聞くと返答が立派である。「三分間と待たせないよ，国会の法令でそれ以上は待てないことになっているのだからね」と。そんな法令などありうる筈はないが，それを笠に着て威厳を保つ所ロンドン児の面目躍如と言ってよい。Minns 氏が急げば急ぐだけ，御者はわざと挺子でも動かぬとばかり落着いて来る。御者台に掛けた布を取除かせてからでも乗るまでに五分，更に客集めに五分と，心理的な時間と実際の時間が奇妙に調和して Minns 氏を苛立たせて "desperation" に追い込む。人間がそんなに簡単に "desperation" に追い込まれてなるものかと読者は反撥することもできようが，Dickens の世界では，とりわけ Pickwick の世界ではその住人のすべてはその様な人種で構成されているのである。Bill のふり撒く洒落にひと度つまずくと不知不識の間に読者は Minns 氏の "desperation" にまで誘い込まれているという魔術の片鱗をうかがう事ができる。

荒削りではあるがこの精力的な力というのは若い Dickens 自身のはち切れそうで持てあますほどの生命力によることも考えられるが，これが時流に合って大歓迎された事実から考え合わせると，結果的には当時の一般大衆の生命力に他ならなかったという面も考慮に入れなければならない。Dickens 自身もその生命力を十二分に発散させるし，大衆自体が同じ生命力を持てあましていたと言ってもよいであろう。

十八世紀の散文々学は封建的な勢力を破ったブルジョワという新興階級の溢れる様なエネルギーの表現である事は疑うべくもない。

Dr. Johnson が 'patron' に 'Commonly a wretch who supports with insolence, and is paid with flattery.' (Johnson's *Dictionary*) という定義を与えて文学をその庇護から独立させた功績は非常に大きいとしても，実はその裏には貴族から完全に独立したブルジョワが文学を充分支えるだけの実力を持ち得る様になっていたという事実が存在する事も認めなければならない。封建時代の莫大な土地所有者として実権を持っていた貴族に代って商工業を手段に着々経済力を手中に収めて行った新興階級が，貴族に対抗できるだけの実力を備えていたという事実である。成上り者としての彼等はそれだけに子弟の教育に関しても熱心で，貴族に対する紳士がはっきりした階級的意識を以て形成された時代である。Dr. Johnson をはじめ十八世紀の文学はその様にして形成され独立して来た紳士の文学と呼び得よう。

この紳士という観念の形成過程から考えると *Tatler*(1) *Spectator*(2) その他で随筆を通して活躍した Addison, Steele の文学は専ら新しいブルジョワに，教養，礼儀作法を教えるものとして教化的な役割を果している。その模範となるものは Sir Rodger 等貴族階級に属する風流人である。Richardson の小説や L. Sterne の *Sentimental Journey* (1768) 等も同じ様な教化的な範疇に入れて考えることも出来る。

これら十八世紀作家全般に言えることは，大地主としての貴族にせよ，選ばれた紳士にせよ，少くとも社会の上層部に属する少数が中心であるという点では共通している。その意味では Fielding, Smollett はもとより，Bunyan, Swift 等も例外ではない。下層階級の逞しい生活力をありのまま写そ

(1) 1709-11 (2) 1711-14

うとした Defoe にあっても念願とする人間像は紳士のそれであった。

Dickens と対蹠的な意味で彼等教養人がロンドンを見る眼は次の描写にも明瞭である。

The Cries of London may be divided into Vocal and Instrumental. As for the latter, they are at present under a very great Disorder. A Freeman of London has the Privilege of disturbing a whole Street for an Hour together, with the Twancking of a brass Kettle or a Frying-pan. The Watch-man's Thump at Midnight startles us in our Beds, as much as the breaking in of a Thief. ... Vocal Cries are of a much larger Extent, and indeed so full of Incongruities and Barbarisms, that we appear a distracted City to Foreigners, who do not comprehend the Meaning of such enormous Outcries. Milk is generally sold in a Note above *Elah*,(1) and in Sounds so exceeding Shrill, that it often sets our Teeth on edge. The Chimney-sweeper is ...(2)

書き出しから既にフランス好みの分析的な知性が見られる。そして，特権であるかの様に釜やフライパンをならす商人や，眠る人に遠慮会釈なしに音高く歩く夜番を諷刺し或はたしなめながら，ヒューモアを生む。ロンドンを高くから見下ろし，自分に恰好の材料を選んでお手盛の材料を見せてくれる訳である。その様な風雅繊細な風流人にとっては不調和(incongruity) と野蛮 (barbarism) は最大の敵で，夜は完全に静かでなければ眠れず，甲高い声を耳にしては歯の浮く人種である。

Dickens はこれとは全く対蹠的に健啖としている。あらゆ

(1) Elah＝Ela, Eela (長音階の最高音でソプラノE音に当る)

(2) *Spectator*, No. 251 (Addison) (1711)

るロンドンの現象を併せ呑む気慨とでも言おうか。それはそのまま庶民の生活力にもつながるものであろう。

Covent Garden market, and the avenues leading to it, are thronged with carts of all sorts, sizes, and descriptions, from the heavy lumbering waggon, with its four stout horses, to the jingling costermonger's cart, with its consumptive donkey. The pavement is already strewed with decayed cabbage-leaves, broken hay-bands, and all the indescribable litter of a vegetable market ; men are shouting, carts backing, horses neighing, boys fighting, basket-women talking, piemen expatiating on the excellence of their pastry, and donkeys braying. These and a hundred other sounds form a compound discordant enough to a Londoner's ears, and remarkably disagreeable to those of country gentlemen who are sleeping at the Hummums (1) for the first time.(2)

Addison に反応するかの様に ロンドン児にさえ このごっちゃな不協和音 (compound discordant) はもう沢山なので Hummums に逗留している田舎紳士には さぞかし聞き苦しいだろうとつけ加えている。しかし Dickens にはその不協和音こそ唯一の現実なのである。批判や諷刺の対象となる前に，Dickens は完全にこの雑沓の中に踏みこんでいるのである。ありのままのロンドンとまともに対し，これをありのままに呑み込んでそのまま文字に移したと言えよう。庶民の生活力の象徴と言ったのもその健啖さを指摘するにすぎない。或は Dickens が眼だけの人間になっていると言ってよいかも知れない。射ぬく鋭い眼光であらゆるものを眺め，眺めた

(1) Covent Garden に 1631 年建てられた東洋風の hotel
(2) *S. B.*, Scenes, I

ままのものをスケッチの形で読者に見せてくれる，それが *Sketches* の正体と言ってよい。

現在 *Sketches by Boz* の形でまとめられているものはその内容によって，1. Our Parish （七篇） 2. Scenes（二十五篇） 3. Characters（十二篇） 4. Tales（十二篇）という四つに区分されているが，このうち第一，第二の全部，及び第三の一部では，この射ぬく目でロンドンを眺めた情景が支柱となっている。健啖たるロンドン風物詩と呼んでもよいであろう。Dickens 自身が完全に大衆と同じレベルに置かれ，大衆と同じ眼と生活力を持ち合わせていたという意味からは，十九世紀初期のロンドンが自ら *Sketches* となって現れたと呼ぶ事も可能であろう。Dickens によってロンドンは永遠の生命力を賦与されたと言う事もできるが，同時にロンドンの生命力が *Sketches* という不滅の文学を生んだと呼ぶ事も決して不自然ではない。その様な全く新しい型の文学となっているのである。

伝統的な見方から言えば，Addison, Steele の流れをはじめ Fielding, Smollett 等十八世紀作家からの影響は強いが最も近いという意味では歴史的にも O. Goldsmith があげられなければならない。以下は Goldsmith の *The Bee* (1) からのロンドンの夜景の引用である。

What a gloom hangs all around ! The dying lamp feebly emits a yellow gleam, no sound is heard but of the chiming clock, or the distant watch-dog. All the bustle of human pride is forgotten, and this hour may well display the emptiness of human vanity... But who are those who make the streets their couch, and find a short repose from wretchedness at the doors of the opulent? These are strangers, wander-

(1) 1759

ers, and orphans, whose circumstances are too humble to expect redress, and their distresses too great even for pity. Some are without the covering even of rags, and others emaciated with disease; the world seems to have disclaimed them; society turns its back upon their distress, and has given them up to nakedness and hunger...

Why, why was I born a man, and yet see the sufferings of wretches I cannot relieve! Poor houseless creatures! the world will give you reproaches, but will not give you relief.(1)

風流に澄ました知的な Addison の文章と比較すると，僅か五十年の才月を経ただけでもよほど変貌している事がうかがわれる。これは二人の個性の差違にもよるものであろうが，現実に対して知的な反応を示す態度から情的に現実を把握しようとする態度に変っている。その意味では Goldsmith と Dickens は質的には同じ地盤に立っていると言ってよい。その上 Goldsmith にはその現実をできるだけ忠実に把握しようとする態度も明かで，謂わば Addison から Dickens への中間的な位置を占めていると言えよう。現実のさ中に立って描写に徹しようとする Dickens の態度とはっきり区別できることは，Goldsmith の場合，できるだけ具体的に現実を情的な面から把握すると同時に感情移入によってこれを詩的な表現にまで高めようという芸術的意識が明かに看取できる事である。何故人と生れ，救済することのできない世の苦しみを目にしなければならぬのだろうかと嘆く態度は，そのまま逃避の文学につながる。逃避の文学という言葉が不適当であれば，遊びの文学と呼んでもよいし，詩と言い直してもよい。それが少くともそれまでの文学一般に通ずる概念でもあ

(1) *A City Night-Piece*

ったであろう。

ロンドン夜景を描いた Dickens の文章と比較してみよう。

The crowds which have been passing to and fro during the whole day, are rapidly dwindling away; and the noise of shouting and quarrelling which issues from the public-houses, is almost the only sound that breaks the melancholy stillness of the night.

There was another, but it has ceased. That wretched woman with the infant in her arms, round whose meagre form the remnant of her own scanty shawl is carefully wrapped, has been attempting to sing some popular ballad, in the hope of wringing a few pence from the compassionate passer-by. A brutal laugh at her weak voice is all she has gained. The tears fall thick and fast down her own pale face; the child is cold and hungry, and its low half-stifled wailing adds to the misery of its wretched mother, as she moans aloud, and sinks despairingly down, on a cold damp door-step.

Singing! How few of those who pass such a miserable creature as this, think of the anguish of heart, the sinking of soul and spirit, which the very effort of singing produces. Bitter mockery! Disease, neglect, and starvation, faintly articulating the words of joyous ditty, that has enlivened your hours of feasting and merriment, God knows how often! It is no subject of jeering. The weak tremulous voice tells a fearful tale of want and famishing; and the feeble singer of this roaring song may turn away,

only to die of cold and hunger.[1]

Goldsmith のそれと比較して最も明瞭な事は，Goldsmith 以上に現実に密着し，あらゆる現実を雑然たるまま取入れ，それでいて Goldsmith 以上に何かの力を持っているという事である。 Goldsmith の詠嘆に対して Dickens はぢかに訴えて来る迫力を持っている。前者の美に対して後者では力が著しい。前者の抒情性に対して，後者を感傷的と呼んでもよいであろう。自らなる感情の流露に対して Dickens には肩を張った技巧的なポーズがうかがわれる。

「夜が更けるにつれて暗澹たる静寂を破るものとては時折居酒屋から聞える呼び声や喧嘩の音だけとなった。——いやも一つだけ聞えていたものがあった。だがそれも今では消えた。嬰児を抱く物乞いの女が道行く人に声をしぼって歌う哀れな歌声……」と畳みかけて行く技巧は戯曲的な展開によって強く読者の関心を惹く事をねらった手法である。この方法は生涯 Dickens の得意の一つとして守り通され，特に後半の小説にあっては文体の上でも大きな役割を果す技巧となっているものである。

それと同時に，その様にして巧みに読者の関心を掻き立てた上で，その事実に潜む真実をえぐり出す事によって，たとえば悲惨や悪の根元等を読者に示し，或は訴えようとする態度も明かである。「……歌うとは言え，歌うという言葉は何たる欺瞞（mockery）であろう。歌うとは愉しい時のものであり，この様な病んで見捨てられ餓えた者にとっては楽しい小歌（ditty）の歌詞さえ聞き取り難い。あざけり（jeering）の対象となるどころか，そのふるえ声自体が，貧困と飢餓の物語である……」云々という言葉には，この物乞い女に代ってその惨状を切に訴えようとする Dickens の意図が余りにも明瞭と言ってよい。

(1) *S. B.*, Scenes, Ⅱ

貧しい者，悲惨に泣く人，弱い人の代弁者となり，やがては虐げる者，強い者を相手に堂々たる抵抗と挑戦を始める態度もDickensの中期以降特に顕著になって来るが，*Sketches*の中では上例は稀な例の一つである。批判的な態度，批判を通して読者を教えようとする意識を二十一才の青年Dickensに求める事自体も無理であろう。憑かれたかの様に眼だけの男となってロンドンを描きなぐったというのが真実であろう。又それ故にこそ，そのまま Dickens の若い生命力が真裸のままで投げ出された文学となっている所以でもあろう。意識以前の問題として，眼だけとなった Dickens が本能的に強いられた純粋無垢の同情，憐憫がこの様な表現をとったとも言えよう。事実後述する様に，やがて批判意識，抵抗意識が強められるに従って，文学的には却てマイナスになる面も少くなかったからである。

Goldsmith の詠嘆の態度の中に，逃避の文学への可能性がある事を指摘したが，事実歴史的には Goldsmith と Dickens とを結ぶ中間はその様な傾向のもので埋められているのである。

II 伝統と Boz の世界

理性を重んじ，古典を重視した十八世紀から当然予想できる事は，この世紀が歴史研究を重視したという事である。哲学者 Hume の *History of Great Britain* 四巻 (1754-61), Gibbon の *History of the Decline and Fall of the Roman Empire* 六巻 (1776-88), W. Robertson の *History of Scotland* (1759), *History of Charles V* (1769) 等々の名前をあげればその盛況が，想像できるであろう。Dr. Johnson が辞典を編集 (1755) し *Lives of the Poets* (1779-81) を書き，Boswell が *The Life of Samuel Johnson* (1791) を書いたのも同じ精神によるものであろう。

この風潮が H. Walpole の *The Castle of Otranto* (1764) 等の怪奇派小説 (gothic romance) と合流して十八世紀末から十九世紀初頭にかけていわゆる恐怖派 (school of terror) の名で呼ばれる主潮，遠く時代を距った異国に舞台を置く，奇怪で神秘をひめたロマンスの流行となった。A. Radcliffe の *The Romance of the Forest* (1791), *The Mysteries of Udolpho* (1794), *A Sicilian Romance* (1790), *The Italian* (1797) 等を代表とする M. G. Lewis の *The Monk* (1795), C.R. Maturin の *The Fatal Revenge, or the Family of Montorio* (1807), *The Wild Irish Boy* (1808), *The Milesian Chief* (1812), *Melmoth the Wanderer* (1820) 等の一派である。Shelley の二度目の妻 Mary Wollstonecraft Shelley の書いた空想的科学小説 *Frankenstein, or the Modern Prometheus* (1818) も同じ流派のもので，その流れは今日の映画にまで尾を引いている。

この傾向の小説は好奇心，自然美，憂愁，改革意図などの

浪漫的要素がないではないが，未だ明瞭にそれを意識せず，怪奇の為の怪奇，残忍の為の残忍を目指すのみで，荒唐無稽の作為に終って居り，健全な意味での芸術美の追求を忘れているという欠点(1)が全体を通して指摘できよう。

この様な蕪雑荒唐の怪奇小説に，確実な写実と，浪漫精神を吹き込んで Waverley Novels 三十六篇の超大作に集大成したのが Walter Scott(2) であった。この空想的ロマンスの世界は Dickens と殆んど時を同じくしながら全く異質の文学として無関係に Scott によって完成された訳である。

何れにしても 'mystery novel' にせよ 'terror novel' にせよ，或はこれを芸術的な完成の域にまで高めた Scott の歴史小説にせよ，結局は遊びの文学，或は逃避の文学として，又選ばれた人々の文学であった訳であり，たとえば Dickens の，切れば血の出る様な文学，生命力がそのまま表現となって結晶している文学，庶民の文学とは全く次元を異にする文学であった。

その間にあって J. Austen (3) は文学史的な流れからはみ出て孤立した印象を与える。とぎ澄ました知性と女性的な繊細さを以て小さなサークルを形成する善男善女の様々に起伏する感情や心理のあやを，丹念にゴシック模様に織りあげて完璧とも言うべき作品を残している。

Dickens が生れたのは 1812 年であるが *Sense and Sensibility* はその前年に *Pride and Prejudice* はその翌年に夫々出版されている。Austen が死んだのは1817年，四十二才，Dickens が五才の時であるが，そのままこの二人の作家は触れ合う機会もなく無関係のまま終った様である。結局は Goldsmith あたりまでの十八世紀散文作家がその背景になり，それ以後の半世紀は Dickens にとっては空白無意味で

(1)　小川二郎「英国の社会と文学」(1943)
(2)　(1771-1832)　　(3)　(1775-1817)

あった訳であるが，その文学的背景を明かにする意味でも幼少時の読書或は学校教育をここで一瞥する必要があろう。

父が海軍省の経理事務員（paymaster）であったのでその任地が屢々変った。ポーツマス近郊 Portsea に生れたが二才でロンドンへ，五才で Chatham[1] へ，十才で再びロンドンへと転住している。学校へ通いはじめたのは Chatham の地で，最初は或る婦人の経営する私塾に，後には Mr. Giles という Oxford 出身の青年の経営する Giles's School に籍を置いた。

病弱であった Dickens が文学好きな父が流行の廉価版 (cheap series) で買い溜めた古典を読んだのも，この Giles's School に通学して勉学する傍らであった。

Roderick Random, Peregrine Pickle, Humphry Clinker, Tom Jones, The Vicar of Wakefield, Don Quixote, Gil Blas, Robinson Crusoe, Arabian Nights, Tales of the Genii 等々の名前は自伝小説 *David Copperfield* にも見られるが，その他にも，どの程度まで理解できたかは別としても前述の Addison, Steele の *Tatler, Spectator*, Dr. Johnson の *Idler*, Goldsmith の *The Citizen of the World*, Mrs. Inchbald の *Collections of Farces* 等[2] が二階の書斎にやはりあった。私塾では Oxford 出身の Mr. Giles に古典語を教わった事も当然予想されるがそれ以上に文学好きの Dickens に既に才能を認めて余程打込んでいた事が想像される。一年八ケ月で学校生活を中断してロンドンに移らねばならなくなった十才の少年 Dickens に記念として Goldsmith の *The Bee* を贈っているからである。Dickens はいたく感謝したらしいが[3] *Sketches* に出て来るロンドンの叙景その他の中にそのまま *The Bee* の面影が

(1) [tʃǽtem] ロンドンの約四十キロ東 Rochester に隣接する当時の軍港　(2), (3) Forster, vol I

にじみ出ているのも当然と言えよう。

平和な田舎町 Chatham でのその様な学校生活と読書生活を境に，ロンドンに出てからの Dickens は忽ち悲惨な現実生活の渦中に巻きこまれねばならなかった。

ロンドンに出た時，父は三十七才，母は三十三才であったが既に七人の子供があった。尤も弟一人，妹一人は既に他界していたので，二年々長の姉を筆頭に長男の Dickens と妹一人，弟二人の五人兄弟であった。生活はそれだけでも決して楽ではなかった筈であるが，父は気前がよい事と，非常識な浪費癖があって，既に Chatham でも可なりの借財を残していた。その借金の取立人がロンドンまでも押しかけて来る状態の中であれよあれよという間に借財は増す一方で，母が私塾を開いても生徒は集らず，Chatham から持って来た家財道具や書物なども売払ってみたが焼石に水であった。質屋通いするのは Dickens の役目であったが，訳も分らぬままにいきなりうらぶれた人生の裏街道に直面させられた訳である。父の知人の口利きで靴墨工場へ働きに出る様になったのも家計をたすける為の万策尽きての手段であったらしい。十二回目の誕生日を迎えて二日後，即ち1824年二月九日の事でロンドンに転勤後一年二ケ月余で一家は窮乏のどん底まで突き落されていた訳である。勿論学校へも通わず殆んどを家事の手伝いやら使い走りなど慌しくとりとめのない事に費して内容的には空白の時期と言ってよい。よし空白ではなかったとしても，これに続く靴墨工場での屈辱が余りにも激しく，これが心理的には空白の印象を与える理由となっているのかも知れない。

父も Dickens が工場へ働きに出されてから十余日にして支払不能の理由で逮捕されて Marshalsea に投獄された。偶然遺産が舞込んで父の牢獄生活は三ケ月余で済み，その後間もなく Dickens の工場生活も終った筈で，長くても五ケ月

以上働いたとは考えられない。六月には新しく学校へ入っているからである。

楽天的な父の浪費癖，少年時代の屈辱，牢獄，等々その後の Dickens の文学とは切っても切れない重要なテーマとなるべきものの内容は既に十二才の少年 Dickens の心の底の底に烙印の様に焼きつけられていたのである。殆どあらゆる小説がこれら三つの主題と結びつける事なしには考えられぬほど，強く，痛々しい経験となって Dickens の生涯を動かし続けるモティーフとなっているのである。

ともあれ同年六月に入った Wellington House Academy では曲りなりにでもその後二年半の学校生活が許された。ラテン語の勉強をはじめ，劇の演出，上演に打興じ，脚本も書くなど生来好きな方面の事に熱中する時間にも恵まれたらしい。一ペニイの週刊紙 *The Terrific Register*(1) など恐怖派小説風の物語にも耽溺した様である。

しかし家計の方は一向に向上した形跡はない。父は出獄の翌年には，官吏で Insolvent Debtors' Act の対象となった事の咎で退職のやむなきに到った。Chatham 時代そこであった大火災の報告記事を *London Times* に送ってそれが採用されて二段組で掲載された事もあるほどで，父も元来文筆の才には恵まれていた。退職後はその方向に志し，速記術を一気呵成に練習したおかげで退職後一年余で *British Press* の議会記事記者に採用された。国会の会期中は週十五ギニーというから収入としては申分なかったとしても，定収入でないのと，相も変らぬ浪費癖の為に家計は決して楽にはならなかった。家賃も不払の為遂には間借り生活を強いられている。Dickens が Wellington House Academy をやめなければならなくなった理由の一つもそこにあったのであろう。

(1) Forster: Vol. Ⅰ, Ⅱ

1827年の五月 Gray's Inn に事務所を持つ Ellis and Blackmore という法律事務所の書記として，週給十五シリングで採用された。ここでは翌1828年の九月までの約一年半足らずを方向違いの法律事務の書記として働いたが，この期間も生涯に大きな影響を留めている。表面にこそ見えないが裏に廻れば世はからくり，欺瞞，奸計に溢れている事，併せてそれらを裁く法律に携る者の愚鈍さや非情さ(1)を見せつけられて，之亦 *Pickwick Papers* 以降の作品に無類の材料を提供する資源となっている。それまで主として古典作品の登場人物の眼を通して世情人心を眺めていた浪漫的な青年が，法律を通して眺める事によってその広さや客観的な現実性を加えて行った事が想像される。

書記時代の生活でその他に目ぼしい事は，ロンドンをくまなく歩き廻って裏街を知り庶民を知り尽した事，劇場に足しげく通った事，速記術をマスターした事，等があげられる。

Covent Garden, Drury Lane, Haymarket 等 *Sketches* を通しても何回となく紹介されるこれらの場所にあるいわゆる 'major theaters' の他に，庶民の抬頭と共に，続々と劇場がふえ，正統の劇以外に笑劇 (farce) やメロドラマ等も番組に加えられて新しい観衆を盛んに吸収すると同時に 'private theater'(2) も方々で開かれた。劇好きの人々が溢れて，観劇だけでは満足できず，自らも上演してみなければ納得できないほどの演劇熱が風靡した時代であった。普通一シリングあれば劇が見られるし，九時以降はその半額であったので生来劇を熱愛した Dickens には週給十五シリングの収入から考えても恰好の娯楽であった。

本来弁護士や裁判官などの仕事が不向きな事は明かである。よしその方向に志すとしても一人立ちできるまでには余

(1) *S.B.*, Scenes: VIII (*Doctors' Commons*), XXIV (*Criminal Courts*) (2) *S.B.*, Scenes: XIII (*Private Theatres*)

程の年月が必要であった。Dickensが求めてやまない事は具体的には貧乏から足を洗う事であり，成功する事であった。父の週給十五ギニーは自分の十五シリングと比較にならぬ収入であった。書記生の何時頃からか Dickens 自身も速記術の独習を始めていた。そしてこの速記術のマスターは，彼がひと度決心して志したからにはいかなる事をも完全にやり遂げる異常なまでの意志力と精力を持ち合わせた人間である事をはじめて現実に証拠立てた最初の事実でもあった。恋人の問題，小説の問題，版権問題，政治問題，等々今後彼が直面しなければならぬ筈の問題は山積して居り，生涯一日だに安閑と傍観する余裕もないほどの多忙の生活を強いられたが，すべての問題に関して，これを焼きつくさずんばやまない勢で，不撓不屈の精神を以て貫き通したのが Dickens の生涯であったと言ってもよいであろう。あらゆる問題を征服し尽さねば納得できない不敵の魂の所有者でもあった。女性が屈服し，文学が屈服し，版権問題を通してはアメリカが屈服したが，それだけに，この不敵の魂がその征服と同時に必然的に伴う避け難い悲劇の深さも大きい。それが Dickens の生涯が結論的に意味している勝利の意味でもあり，同時に悲劇の意味でもあろう。その問題は後にゆずらねばならないが，兎も角，十六才の青年 Dickens は速記術に関して凡人の真似のできない驚嘆すべき征服を見せた。1828年の十一月にはその法律事務所をやめて，勇敢にも速記々者 (shorthand writer) として踏み切ったのである。

最初は思わしい定職も見つからぬままに，Doctors' Common の宗教法廷 (Consistory Court) の速記者席にフリー・ランサー記者 (free-lance reporter) として詰めていて，代訴人の依頼を受けては審議判決などの速記を取って糊口の資を得る仕事から始めた。そして結局はそれからの三年半を自由な記者として過すことになるが，不安定な生活の中にも内

容的には意義深い事件を経験している。読書生活と観劇生活である。

記者としての生活に一応馴れたと思われる1830年二月七日即ち十八才の誕生日に British Museum の読者票の登録[1]をしている。仕事も暇な時間が多く，爾後三年或は四年間 British Museum の読書室で多くの時間を費した様である。Addison, Shakespeare, Goldsmith その他多方面に亘る読書が指摘されて居るし,[2] Dickens 自身もその読書がその後の生涯に最も役立ったと回想[3]しているのも当然である。Chatham で一年八ケ月，ロンドンで二年半と，夫々半端な学校生活しか送って居らず，その広範囲に亘る該博な読書歴を跡づけるものとしてはこの時期の British Museum での読書生活は決定的な要素となっていることが考えられる。*Sketches* には Richardson[4] や A.Radcliffe[5] の内容の紹介も見られるがこの時代の読書なしには考えられない事実である。作家としての準備は結果的にはここで仕上げられたと云ってよい。

一方観劇の方も，ほとんど毎夜の様に通ったと伝えられ，子供の時から一つの念願でもあった舞台俳優に対する憧れはこの時期にも捨てて居らず，本職が暇な事も手伝ってか，所作の練習に励んだり本職の指導を受けることさえあった。初恋の人 Maria Beadnell に容れられなかったのは Dickens の職業に将来性が認められなかった事が大きな理由となっていたが，自らもそれを認めて一時本気に舞台俳優になる事を考えて試験を受けようとした事さえあったほどである。

不安や焦燥や失恋の絶望などで大きく動揺している最中に愈々本物の運命らしいものが道を拓いて来た。叔父が経営し，父が記者として働いている出版社の臨時雇いになった事

(1) Forster: Vol. Ⅰ, Ⅲ　(2) E. Johnson: Vol. Ⅰ, p. 59
(3) Forster: Vol. Ⅰ, Ⅱ　(4) Tales; Ⅹ　(5) Tales; Ⅺ

もあるが，1832 年の五月発足した一部七ペンスの夕刊紙 *True Sun* 紙に能力を認められて記者として採用された。そして，当時国会に詰める記者は八，九十人にものぼったと言われるが，その間にあって若冠二十才の Dickens は速記術によって忽ち抜群の能力を発揮したのである。

1832年と言えば政治史上忘れる事のできない Reform Bill 通過の年である。貴族に特権を認めた古い選挙法を改めて，今日の公平な議会政治を実現したこの法案をめぐって国会が未曾有の暗転をした事は言うまでもなく，首相の更迭その他を中心に全国民の眼が国会の成行きに集中されている檜舞台で，Dickens は忽ち頭角を現して衆目を惹いたのである。Dickens より若い記者もいなかったが，その若輩にまさる速記能力を具えた記者もいなかったらしい。*True Sun* 紙が経済的な行詰まりで倒れてからは *Mirror of Parliament* 紙に迎えられ，二十一才でその副主筆となって，人事問題にも関与するほどの要職に抜擢された。

その様な多忙な生活の中から生れたのが前述の *Mr. Minns and his Cousin* であった。人気がよいので *Monthly Magazine* の編集長 Captain Holland はもっと原稿を送ってくれる様折返し頼んで来た。二回目は *Mrs. Joseph Porter Over the Way* (Jan. 1834) (後に *Mrs. Joseph Porter* と改題) (*Sketches.* Tales, IX)，第三回 *Horatio Sparkins* (Feb. '34) (*ibid.* Tales, V)，第四回 *The Bloomsbury Christening* (April, '34) (*ibid.* Tales, XI)，第五回目 *The Boarding House* (Ⅰ. May, Ⅱ. Aug. '34) (*ibid.* Tales, Ⅰ) と矢継早やに Dickens は書き続けている。多忙な生活と併せて有頂天になって書きなぐった様子が容易に想像される。

Mrs. Joseph Porter は芝居好き (the mania for Private Theatricals) の好人物一家に配するに，これをねたみ嘲るこ

とを心掛ける向いの Mrs. J. Porter を置いて，'*Othello*' 演出の失敗を茶化して面白い。上演時間が来ても肝心の Iago が現れず，一時間も待たされてやっと始まると Othello の科白は無茶苦茶，これを Shakespeare なら全部暗誦できる事を唯一の自慢の種にする紳士が Mrs. Porter にそそのかされて客席から一々訂正するに及んで爆笑やら混雑やら興奮のうちに 'a complete failure' として午前四時ようやく終るという滑稽なドタバタ物語である。

Horatio Sparkins も全く同種で，成上り者夫婦が娘に立派な男を折角探しあぐねて発見した相手が実は雑貨屋の店員にすぎなかったという人情譚である。

Mrs. Minns and his Cousin も含めてこれら物語は笑劇の域を出ず，泣き笑いの人生を過不足ない性格描写によって裏づけた，謂わば習作的な作品と云えよう。物語は夫々に面白くまとまり，洒落やユーモアも時に散見できて決して失敗作と決定させる様な条件はない。その上 Goldsmith などと比較して言える事は，描写が既に vivid であり，動きが具体的に把握され，性格というより，その人の極端に偏った性癖や頑固な主義が筋金として入っている為に喜劇性が強くなっている。そのためにほのぼのとしたヒューモアの世界からは離れ，それだけに文学自体の品位も下司っぽく見えるが，同時に大衆のものとなっている面も強い。謂わば長短相半ばするというのが適当ではないであろうか。

ところが驚くべきことに，次の *The Bloomsbury Christening* になると忽ち Dickens 的なひらめきが光を放ち，その表現の力強さを如実に示してくれる。そしてこれが次の *The Boarding House* では更に円熟した形で一つの完成を見て，僅かこれら五篇の中に，*Sketches by Boz* の発端から完成までを圧縮した形で展開させてくれている観を呈している。書き始めて一年を経ぬうちに既に天才的な一つの頂点

を見せてくれていると言ってよいであろう。

以下は *The Bloomsbury Christening* の冒頭からの引用である。

Mr. Nicodemus Dumps, or, as his acquaintance called him, "long Dumps," was a bachelor, six feet high, and fifty years old: cross, cadaverous, odd, and ill-natured. He was never happy but when he was miserable; and always miserable when he had the best reason to be happy. The only real comfort of his existence was to make everybody about him wretched —— then he might be truly said to enjoy life. He was afflicted with a situation in the Bank worth five hundred a year, and he rented a "first-floor furnished," at Pentonville, which he originally took because it commanded a dismal prospect of an adjacent churchyard. He was familiar with the face of every tombstone, and the burial service seemed to excite his strongest sympathy. His friends said he was surly —— he insisted he was nervous; they thought him a lucky dog, but he protested that he was "the most unfortunate man in the world." Cold as he was, and wretched as he declared himself to be, he was not wholly unsusceptible of attachments. He revered the memory of Hoyle, as he was himself an admirable and imperturbable whist-player, and he chuckled with delight at a fretful and impatient adversary. He adored King Herod for his massacre of the innocents; and if he hated one thing more than another, it was a child. However, he could hardly be said to hate anything in particular, because he disliked everything in general; but perhaps his greatest antipathies were cabs, old

women, doors that would not shut, musical amateurs, and omnibus cads. (1)

ニコディーマス・ダムプス氏，通称「ノッポのダムプス」独身で背丈六フィート，年令五十才。気むづかしく，顔色のさえぬ，風変りで根性曲りの男。みぢめな時以外は幸福でないという御仁で，幸福であって然るべき時に常に惨めであった。

人生ただ一つの真の楽しみは周囲の誰彼なしに不快を催させることで，その時こそこの男が真の生甲斐を感じている時である。年収五百ポンドのイングランド銀行員の身分を（他人なら喜ぶ筈なのに）苦にして，ペントンヴィルで「家具つき一階」の間借りをしていたが，借りた動機は隣りの墓地の陰気な眺めが見わたせるから。どの墓石のおもても熟知していて，埋葬式はとりわけ共感を呼び起すようであった。友人達は彼を無愛想だと言ったが，自分では神経質なのだと主張した。友達は運のいい男だと思っていたが，自分では「世にも不運な男」だと抗議していた。

事実冷淡であったし，自分でも惨めだと公言してはいたが，こと愛着心にかけては万更絶無の訳でもなかった。自分でもすぐれた沈着なトランプ勝負師で，敵をかんかんにぢらせては一人悦に入った男で，故ホイル氏を厚く尊敬し，罪のない幼児を虐殺したかどでヘロデ王を礼拝した。というのもとりわけ強く憎むものがあるとすれば，それは子供だったからである。しかし万事が嫌いだったので，とりわけ憎むなどというのはふさわしくない。だが恐らく最も反感を覚えるものは馬車，年寄女，閉まらぬ戸，音楽愛好家，馬車の雑役夫……

Dickens がここで目を据えて見つめているのは人間の性格である。既に述べた様に *Sketches* はその内容から Tales 十二篇，牧師，Beadle，校長等近所に住む人達の生活描写を中心とした Our Parish 七篇，ロンドン百景とでも呼べる二十五篇からなる Scenes，ロンドン百景に対して人間百景とでも呼べる Characters 十二篇，にまとめられているが，その人間描写という意味では二大別して，一定の環境の中に

(1) Tales, XI

於ける人間描写と，性格を中心とした人間描写とに区別して考える事ができよう。言うまでもなく前者はほとんど Tales 全篇についても言える現象で，いわゆる人違い，間違い続きのドタバタや pantomime (1) を通して人間の性格が浮彫りにされる可能性もあるが，それは個性というよりむしろ人間性格一般と呼ぶにふさわしい。これに対して後者は出発点から個性を明確にする事が主眼となっている。その何れが文学的に優っているかは別問題としても，*Sketches* 全般について前者の色彩が濃い傾向であるのに対して，性格を凝視する傾向も同時に見られる。性格の追求，個性の確立という問題はヒューマニズムを形成する根本であり，Dickens の文学が築いた一つの理念でもあり，その意味で現代につながる意義も考えられるが，その包芽は既に *Sketches* に現れ始めているのである。

Dickens がここで目を据えて見つめようとしているのは人間の性格である。勿論最初の *Mr. Minns and his Cousin* にも子供嫌いという性癖，広く言えば性格が問題となっている。しかし物語の主調はその様な性格が或る環境の中でどの様な制裁を受け失敗を喫しどの様な反逆を実行し得たか，その事実の羅列集積が主眼となっていた。潔癖で子供嫌いという性格がどの様な環境に置かれるかが問題となっている訳である。しかし *The Bloomsbury Christening* ではその冒頭からも判る様に，環境は二の次となって性格が先ず前面に押出されている。Mr. Minns の潔癖や子供嫌い犬嫌いという性格は凡人にも通じるが Mr. Dumps (2) の自虐性，一種のサディズムには徹底性が見られる。既にそれ自身が興味の対象となり得る。その様な性格は嘘だと片附ける事もできるが，同時に真実であると主張する事もできる訳で，ここに一

(1) Tales, IV, V, VIII

(2) dumps, (n. pl.) Depression, melancholy (C. O. D)

種の創造過程も考えられる。つっけんどん (surly) かと思うと小心翼々 (nervous) でもある。さりとて意気地ない事は我慢ならぬのか，運のいい奴 (dog) と呼ばれると俺ほど不幸な男は，とむきに反撥する。冷酷非情かと思うと時に脆さがない訳でもない。神など薬にもしたくない男かと思うと，やはり畏敬崇拝の対象はある。トラムプ遊びの祖 E. Hoyle (1) と悪魔の如きユダヤ王 Herod (2) である。Minns 氏も 'desperate' にさせられ 'distract' されたが，これは性格というより環境を主体とした変化と言える。Dumps 氏の場合はその 'misery-creating powers' は悪魔のそれに似て 'the hypochondriacal Dumps,' 'the misanthropical Dumps,' 'the archtraitor' 等の名称が具現する性格は現実的な迫真力を持っている。神に反逆を決行する Satan 同様，人類を相手に叛逆者ぶりを振りかざしてはばからない。環境を無視して性格人として独歩する。この物語は Minns 氏の場合と同様，失敗や報復が生む滑稽さと同時に，Satan の如き複雑不可解な超人であり乍らふと人間的な弱さを暴露するヒューモアをさえ持っている。憂鬱症で人間嫌いの Dumps 氏は親戚の洗礼のお祝いに嫌々引出されての道すがら「気分は標準強度以下五十度」(... his spirits fifty degrees below proof) (3) といった低気圧であったが，酔漢に衝突されて打のめされそうになり，折よく通りがかった紳士に助けて貰う。"There are at least some well-disposed men in the world." という人間的な認識がふと頭をかすめる。非情な男に人間的温情を甦らせるこの方法は後に *A Christmas Carol* の主題となって徹底して発展されるが，その方法は既にこの物語にも明かである。愛情 (attachment) の痕跡が万更ないでもない事は冒頭でも触れられたが，愈々パーティで女性と相会す

(1) (1672-1769)　(2) (73?-4 B.C.)

(3) proof は酒の標準強度，spirits を気分と酒とにかけた洒落。

ると人間嫌いが消散して途端にいんぎんになる。不動の主義があやしくなって来るのである。その事の中にヒューモアも発見できる訳であるが，結局は時折その様な弱点を垣間見せながらも，結局は徹底した人間嫌い，悪魔の根性は守り通される。誕生を祝う愉しそうな来客を前にして Dumps 氏の打萎れる様は痛々しいほどであったが遂に本性を発揮して一計を案じ，最後の祝辞で逆に一同を暗澹たる気分に陥れるのである。

生れた子供が病気にならねばよいが，早死にしなければよいがといかにも親切げに子供を持つ事にまつわる心配や苦労を列べ立てて一同をしんみりさせる。最後には '... how sharper than a serpent's tooth it is to have a thankless child.' と末恐るべき子供の将来を呪いさえする。たのしい筈のパーティが彼の祝辞で忽ち葬式気分に突き落されてその危惧や恐怖に涙ぐむ女性さえある。遂に悪魔としての性格人 Dumps 氏が高らかに凱歌を奏する時である。

これに続く *The Boarding House* にも様々の性格人が現われると同時にドタバタ騒ぎの滑稽さも過不足なく混ぜ合わされているという意味では若い Dickens の二つの傾向を最も調和よく整えた作品として Tales の代表作として指摘できようが，性格人を確立してこれを中心に物語を進めたという意味では *The Bloomsbury Christening* の方が徹底して居り，切れ味のよい鋭い作品となっている。十八世紀小説が発生して以来百年余にしてようやく性格を中心とする小説の方法がここらあたりで確立され始めたと言ってよい。様々の新しさの中でも特筆すべき新しさである。

性格を大胆に浮彫りにして見せた功績と併せて，或はその様な性格描写を生む前段階として考えられねばならぬ問題として，Dickens が見るという事，凝視するという事に終始し

た作家であるという事，言いかえれば「眼の作家」であるという事が取上げられなければならない。そしてその様に凝視した対象が真実であった事は当然であるが，その真実の一つは「古きもの」の中にあったという事実である。

Sketches の中のとりわけ Scenes 二十五篇と Characters 十二篇，たとえば *The Streets, Shops and their Tenants, Scotland-yard, Seven Dials, Monmouth-street, Hackney-coach Stands, Doctors' Commons, The River,* 等々の題名からも想像がつく様にこれらの描写は Dickens がじっと街角に佇み，或はバルーン目がけて大はしゃぎに走り寄る群衆と共に右往左往，夫々の場所や情景の特長を印象深く物語ってくれる作品である。その意味ではロンドンの街々が Dickens を生んだという表現が正しいと同様に，Dickens の眼を通す事によって永遠の姿としてロンドンが伝えられているという表現も正しい。Dickens ほどロンドンを愛し，そこに住む人々をこよなく愛した人はいない事，又それと同じ様に，Dickens がロンドンの街々と住人に永遠の生命を鼓吹したという事ほど多くの評者が口を揃えて指摘する事実はない。元々 Dickens 自身の成長過程からも上流階級の人々は無縁であったし，事実彼等はまだ地方の大地主として夫々本拠を地方に持っていたので，生粋のロンドン児とは縁のない存在であった。

二十年来同じ道を通勤しているので会う人はほとんどが顔見知りなのだが，それでも一度だって会釈した事もなく黙りこくって歩く通勤者(1)は大抵が 'Shabby-genteel People'(2) でもはや街の煤煙や汚れた煉瓦と見分けのつかぬまでに定着してロンドンになり切った存在である。もっと生活に困る労働者と言えば，酒飲みで妻や子供を殴る(3)者が多く，そんな

(1) Scenes, I; Characters, I (2) Characters, X
(3) Scenes, V, VI, XXII, XXIII

労働者の妻にかぎって胸を病み飢えた子供をあやしている。元気な女共は，隣同志でも摑み合いの喧嘩さえ馴れたもので，男もかなわず，とりわけヒステリーは激しい。貧に迫られてなけなしの宝石を Pawnbroker's Shop[1] に売りに行かねばならない母親や売春婦も少くない。

その様な‘poverty’と‘misery’の溢れる町であると同時に温い町でもある。胸の病に死んで行きながら，酒飲みの夫を恨む事を知らない妻[2]も多く，寒い冬の夜更けマフィン売り[3]の‘Muffins!’という呼び声に，あの窓からもこの窓からも顔がのぞいて，身をこごえさせて帰って来る夫の為に買って待ってやろうと示し合わせた様にみんないそいそと買いに出る。今日のいがみ合いも忘れてつい互にやさしい言葉 (a few neighbourly words) もかわしたくなる温い共感の世界である。物こそ言わないが人間同志が an echo of the sentiments[4] によって強く結び合わされ，感情的な伝染性 (contagiousness)[5] で結ばれている世界である。

だからバルーンを見つけた一人が走ればみんなが走り，金持の子供がさらわれて煙突掃除夫 (sweep)[6] になっている所を助けられたという誠しやかな噂が巷に拡ると急に掃除夫が畏怖の眼で見られ大切にされて来る世界である。人の集る所では大道賭博師が，さあさあやらぬが損，死後七年たっても笑いが止まらぬ勝負 (the sort o' game to make you laugh seven years arter you're dead)[7] と客を集め，旅回りの芝居小屋 (itinerant theatres)[8] では復讐物，幽霊物，涙物等あやしい芝居が客を集める。流行の coffee-shop の壁には‘To prevent mistakes please to pay on delivery.’[9] の文句が掲げられてある。恐らくこれは Dr. Johnson 等の

(1) Scenes, XXIII
(2) Our Parish, V, Tales, XII, Characters, VI
(3) Scenes, II (4) *ibid.*, IV (5) *ibid.*, XXII
(6) *ibid.*, XX (7) *ibid.*, XII (8) *ibid.*, XII (9) *ibid.*, V

通った coffee-shop ではない。知識人上流社会人の享楽物を我が物にしようとする強欲な新興大衆が取澄ました貴族的な高みから引きずり落して我が物の一つとした享楽物である。

その様な大衆の逞しい生活力が，喜びも悲しみも含めてそのまま Dickens の眼を通して再現されている訳であるが，その眼というのは，たとえばカメラの眼の様な機械的なものでは決してなかった。Dickens の眼を通すと単なる静物も異様な生命力を帯びて来るのである。'Shabby-genteel People' はロンドンの町に同化されて煤煙となり煉瓦と見きわめができなくなると言ったが，これが逆に，煤煙も煉瓦も Dickens の眼を通すと住民同然の生命力を持つものとして生きて動いて来るというのも事実である。人間の才智をしのぐ馬[1]が登場して独自の自由意志で行動するので散々人間共を手こずらせる描写はその代表的なものであるが，*Sketches* に於ても馬は人間と同格に生きたものとして描かれている。相手の馬の耳許に口をやって御者を殺してやりたい (...he should like to assassinate the coachman)[2] と空恐ろしい事を口にする馬である。

凝視するという事は Dickens の場合 'pedestrian' である事と同義語であると解される。生涯歩き続けた作家で，ヴェートーヴェンの肖像画等に見られる様に，創作にともなう懊悩その他に際しては，十数哩も速歩する事が習慣となって解毒の役目をした様である。晩年になって左脚に激しい疼痛を持ちやがては下半身が不随状態に近くなったのもこの習慣と無関係ではなかった筈である。馬車に愛着を持ち，後には度々汽車に乗る事もあったが，少くとも *Sketches* 等に見られる風景の描写には車上の人，車中の人として見られた情景は一切ない。'pedestrian' の眼で貫かれていると言えよう。本来人間の眼は歩き乍ら見る様にできているというのが真実

(1) *The Pickwick Papers*, V (2) Scenes, VII

であろう。

その‘pedestrian’の眼で見るロンドンは無限の思考材料(inexhaustible food for speculation)[1]を与えてくれるものであった。歩きながら立列ぶ家々の恰好から「そこに住む人の人となり(character)や職業に思いをめぐらすのが好きである。とりわけドアはその空想に役立つ・・・」[2]とも言っているし，逆に「ドアに取つけた半ばライオン，半ば猿の様な丸ぽっちゃいノッカー(叩き金)を思い出さずに彼の顔を見る事はできない」[3]とも，又これらの表情の類似が「性格や話し振り」にまで及ぼされるとも言っている。家のたたずまいが既に人間性格を持ったものとして眺められ，同時に人間の表情や性格や話し振りがドアのノッカーからも類推できるというのである。自然を人間化し，人間を自然化するその様な想像力に溢れた眼が Dickens の眼と言えるであろう。

この眼に映る現実の変化はすべて軽薄で無意味であった。とりわけ物質文明の繁栄にうつつをぬかしてこれを喜び，新しいものに何の見境もなく飛びついて古いものを顧みない当時の風潮は Dickens にとっては歎かわしいものであったに違いない。I don't know where this here science is to stop, mind you; that's what bothers me.[4]という科学に対する暗澹たる懐疑的な予言も既に見られる。

> ... it is the times that have changed, not Monmouth Street. Through every alteration and every change, Monmouth Street has still remained the burial-place of the fashions; and such, to judge from all present appearances, it will remain until there are no more fashions to bury.[5]

変化しうつろうのは時流であり流行である。不変のままた

(1) Scenes, III (2) Our Parish, VII (3) Tales, I
(4) Scenes, XIV (5) *ibid.*, VI

たずむ町はよくなるとも悪くはならない。Astley's has altered for the better—we have changed for the worse.[1] とも言っている。あらゆる流行を併呑し悠然と生き続ける生命力を持つからこそ町は尊い。自然はあらゆる余滓，腐敗物をも健啖に吸収して土と化す意味で尊いのと同じ意味で街路も又尊いのである。変らないもの，古いものはその中核に夫々の生命力を認めるから尊いのである。単なる懐古趣味などとは凡そ無縁である。

Dickens が旧式の 'hackney-coach'[2] に愛着を持つのは，たとえば時勢を反映して不穏な労働運動が起き，これに対処して警察権が確立されて来るせち辛い時代では 'romance' の世界や 'pastoral simplicity'[3] が地上から抹殺され，惹いては人間から幸福と愛を奪うおそれがあるのを憂えるのと同じ精神である。たしかに最近姿を見せはじめた 'cab' や 'omnibus' など新式の乗物はスピードもあり運賃も安くて便利である。併しその事は本質的な人間の幸福の問題とは無関係である事を既に知り尽しているのである。見かけも新式のものは遙かに美しい。併し内容は見かけの美醜とは無関係である。それにも拘らず外面的なものに目をくらまされ，すべての新奇 (innovation) を進歩 (improvement) と早合点する現代的な不安の兆候 (signs of the restlessness)[4] が嘆かわしいのである。'hackney-coach' と言えばでっかく不恰好で，汚れて，車輪は左右不動なのが当然 (ought to be) である。王様や市長が乗り始めた十六世紀からロンドンを走り続けているのが 'hackney-coach' なのだ。汚れているのも当然で，Our ancestors found them dirty, and left them so. というのである。それほど古く永い生命力を担って来た乗物を大切にすることを忘れ，弊履の如く捨てて顧みない当世

(1) Scenes, XI　(2) Scenes, VII　(3) *ibid.*, XX
(4) *ibid.*, VII

人が憂わしいのである。We marked the advance of civilization, and beheld it with a sigh.[1] という溜息も自然のものであろう。

その様な古い物への愛着を通して考えられる事は究極的には生命の尊重という事実に帰一できるという事である。ロンドンの町が担って来た古い生命力，'hackney-coach' の担って来た古い生命力を夫々に尊重してやまない精神と言えよう。二十二，三才の青年が老人じみた懐古趣味などを持とう筈がない。自然を人間化し，人間を自然化する事のできる異様な能力に恵まれた Dickens の眼があらゆる現象の中に見ぬいたものは普遍的な生命力に他ならなかった。はかない人間の生命力がこの上なく大切なものであると同様，凡そすべてのものの生命力は尊ばれねばならない。'hackney-coach' への愛情は，根元的にはその様なヒューマニズムに支えられて以後の文学活動に発展して行くものであろう。

(1) Scenes, IV

Ⅲ Pickwick の出現

—— *The Pickwick Papers*

Sketches by Boz が今日の形にまとめられたのは序文の日附によると第一冊が1836年二月，第二冊が同年十二月，合冊の単行本は1839年五月となって居り，原型に対して可なりの加筆訂正を経ている事は当然予想され，又一冊にまとめる際新に加えられた作品も二，三あり，実際には1833年十二月発表の *Mr. Minns and his Cousin* から完成までには六年を経ている訳である。そして作品の発表を年代順に調べてみると，1834年に発表したものは，Scenes（二十五篇中）四篇，Characters（十二篇中）一篇，Tales（十二篇中）七篇，計十二篇に対して，1835年中に発表したものは Our Parish 七篇，Scenes 二十篇，Characters 十篇，Tates 二篇，計三十九篇となっている。

つまり1834年と翌1835年との間には創作上にも大きな転機が考えられるという事である。作品が掲載されて世人の注目を浴び始めると批評の対象にもなり，又明かに真似た類似の作品さえ現れる事もあった。34年の春速記術を買われて採用された *Morning Chronicle* の編集室で働く Dickens に，七年先輩の流行作家 W. H. Ainsworth (1) が早くも目をつけて大いに激励してくれるし，又多くの知名の氏にも自然紹介され始めた。社運の興った *Morning Chronicle* 紙は兄弟紙 *Evening Chronicle* を1835年早々発刊し始め，それに Street Sketches 風の原稿を依頼されたため，五ギニーの週給が七ギニーに昇給され，二十三才になるかならぬかで既に父が海軍省で受けていた給料を追い越して経済的にも余

(1) (1805-82) 歴史小説 *The Tower of London* (1840) は漱石の「倫敦塔」と関係深い。

裕ができ，文筆に携る時間に恵まれる様になった。*Morning Chronicle* に Dickens が採用される三ケ月前に採用されていた George Hogarth (1) からも可愛がられ，1835年の春にはその長女 Catherine と婚約した。その様な物心両面に亘る充実が彼の創作生活を強固に推進し，それにともなって，名声のあがった事も当然であった。

愈々1836年は，その二月七日二十四回目の誕生日に *Sketches by Boz* の第一分冊が出版され，はじめて纒った形でその真価を問い得た年でもあり，その三日後には不朽の名作 *The Pickwick Papers* (2) の原案が Dickens の所へ持ち込まれて三月三十一日には早や月刊の形で実行され始めた年でもあった。それを記念するかの様に，四月二日 Dickens は Catherine との結婚式を挙げている。同年クリスマスには生涯の友となるべき J. Forster(3) を Ainsworth に紹介された。そして同年末には Chronicle 社に一方的に辞表を出してやめている。編集長 Easthope を怒らせた事は当然であるが，その他にも Boz を出版してくれた J. Macrone との契約違反で相手を怒らせたり，受取るべき *Sketches* の印税もそのため充分には貰えなかったりの不手際はあったが，*The Pickwick Papers* の売行きは激増するし，Macrone を失った代りに Bentley (4) という新しい出版社を味方に得て *The Pickwick Papers* と並行して次の作品にも着手していた。記者から本格的な作家へ踏み出した第一歩の年である。

---

(1) (1783-1870) Walter Scott とも交際を持ち以前経済的にも援助した間柄であった。音楽批評の専門家として journalism に迎えられていた。

(2) 詳しくは *The Posthumous Papers of the Pickwick Club*

(3) (1812-76) Dickens と同年輩であるが既に C. Lamb, L. Hunt 等とも交際があり，生涯の友として Dickens に尽した。その伝記 *The Life of Charles Dickens* (1872-4) は特に有名である。

(4) (1794-1871) Dickens の協力を得て *Bentley's Miscellany* を出し，後 Standard Novels 百二十七巻を出版した。

話を36年の二月 *The Pickwick Papers* の発端に戻すと，元々は既に戯画家 (comic artist) として名をなしていた Robert Seymour [1] がスポーツを中心としたふざけた戯画を描き，その補足となるべき文章が書ける人をというので候補者を物色中，出版社 Chapman and Hall のあっせんで幸い Dickens が候補にあがった。狩猟に出かけた紳士がふざけて河に落ちたり酔いつぶれたりこの種の絵や記事は当時既に流行していたらしいが，この企画に Dickens は即座に反対した。陳腐である事と，元々徒歩以外にはスポーツを知らない事が理由であった。スポーツに限定せず世上一般の風俗事件などを広く主題にして先づ自分が筆を取り，これに基いて Seymour が挿絵を入れるという原案の主客を入替えた条件なら承認する事を不敵にも申出た。Seymourに較べると Dickens は無名に近かったが，出版者の肝入りもあってか Seymour が Dickens の案に折れた。その上愈々挿絵ができ始めると Dickens からの要求は手きびしく何回も修正させられた。二回目（現在の Chap. III）にのせるべき *The Dying Clown* の不吉な絵を数回描き変えてようやく完成した日に Seymour は猟銃で謎の自殺を遂げた。Dickens が殺したのではないかという疑惑さえ残す迷惑な事件であった。事実 Pickwick 氏の発想は Seymour の原案に負うものだと信ずる側から Dickens に対してなされた非難や臆測は尾を永く引いて Dickens を悩ました。そして結局すべてが無実である事が明かになった今日でも，要するに若冠二十四才の馳け出し文士が一流の画家を征服したという事実だけは疑い得ない事実であろう。対象を征服せずんば止まない不敵な Dickens の負けじ魂と言おうか，あくまで自己の信ずるままを貫徹しようとする逞しい意志力と言おうか，その様なものをまざまざと見せつけられる一例である。

(1) (1800-1836)

Dickens の生涯全体をその様な負けじ魂，岩をも通す意志力の塊りと考える事ができる。記者として一躍注目を浴びる様になった速記に関しても，これをあの短時日にマスターしたという事実もその一例である。今後も出版社との契約違反，或はアメリカでの版権問題，離婚等絶対に屈する事を知らない非情なまでの意志力を見せつけられる事例は多い。これは同時に文学にも及ぶ事実で，執拗なまでの性格描写といい，水も洩さぬ構成といい，激しい追求欲といい，将来の Dickens の文学を特長づける多くの要素を支える背景となっている様である。*The Pickwick Papers, Oliver Twist* (1) にも性格描写を通して断片的には執拗なまでの意志力，追求欲がうかがえるが，やはり明瞭な形では *Nicholas Nickleby* (2) の悪者 Ralph Nickleby, Dotheboy Hall の校長 W.Squeers 等あたりからはっきりと正面に押出されているために，文学の上ではかなり後の問題にされるべき主題であろう。

十才にも到らぬ少年 Dickens は，父に手を引かれてよく Chatham 近郊を歩いたが Falstaff (3) が出没して追剝を働いた由所深い Gad's Hill に立つ豪壮な邸宅 Gad's Hill Place はとりわけ驚異の的であった。はじめてこれを見た時驚く Dickens に「しっかり働けば住める様になるんだよ」(If you were to be very persevering and were to work hard, you might some day come to live in it.) (4) と父が約束してくれた。爾来その夢は常に Dickens の脳裏に灼きついて野望の原動力となったと自らも認めているが，この様な邸宅に住みたいという幼な心の希いはそのまま成功に対する野心となり，生涯を自ら切り拓いて歩一歩駈け上ろうとするすさまじい意志力となって Dickens の生涯を一貫して燃焼する。この大邸宅を買い得たのは1856年既に四十才を越えて

(1) (1837-9) (2) (1838-9) (3) *Henry IV*, Part I, II, ii
(4) Forster, I; *Uncommercial Traveller*

からの事であったが，この事実が証明するものはそのままDickens の意志力のすさまじさ以外のものではないであろう。

有無を言わせず出版社を黙らせ，一流の画家を征服する勢で書き始められた *The Pickwick Papers* は世にも奇妙な文学として完成されている。これを小説ではないと断言する事は容易である。行きあたりばったりの事件の集積で登場人物はデクの棒揃いである。たとえば弥次喜多の三人組（triumvirate）は何か事ある毎にきまって次の様に振舞う——

> The triumvirate were much affected. Mr. Tupman shook his head deploringly; Mr. Snodgrass drew forth his handkerchief, with undisguised emotion; and Mr. Winkle retired to the window and sniffed aloud.(1)

女好きの Tupman 氏，自称詩人 Snodgrass 氏，自称スポーツマン Winkle 氏の行動は夫々に薄っぺらな三文小説の登場人物のそれである。この三人に従われる Pickwick 氏も同列で，お人好しの典型である。口でこそ「人間性格の多様性と機微」（different varieties and shades of human character）(2) を探求した生活記録がこの物語りであり，それが「知力を広め理解力をよくする」(the enlargement of my mind, and the improvement of my understanding)(3) 為の方法である等という結構なお題目は唱えるが，それは口先きばかりで行動と言えば，風に帽子を飛ばされて追いかける(4)かと思うと間違って女室に這い込んで眠り，(5) スケートをすれば池に落ちこみ，(6) 行く先々で恥をさらして笑の対象となる恰好の男である。

(1) *P. P.*, XLIV (2) *ibid.*, LVII (3) *ibid.*
(4) *ibid.*, IV (5) *ibid.*, XXII (6) *ibid.*, XXX

とは言え *The Pickwick Papers* はれっきとした小説であると断言する事もできる。構成こそ散漫で，とりわけ Weller 親子が構成を無視して自由自在の振舞をする為に Pickwick Club の影が薄くなる傾向はあるとしても，形だけは御主人として Pickwick 氏の統率のもと洋式道中膝栗毛を立派に形成しているからである。

ともあれ小説であって小説でなく，小説でなくて小説であるといった一種異様な文学である。*Don Quixote* を，一度読めばあとは拾い読みした方がよい書物だと Coleridge は呼んだが，この流儀で言えば，あとは拾い読みしようにも何処から読み始めても中断できない書物だと呼ぶ事のできる不思議な魅力を持つ作品である。奇妙な生命力が行間に溢れて読者に拾い読みなどを許さない。Chesterton(1)は苦しまぎれに，奇妙でグロテスクでもいいではないか，どうせ凡庸の作家には真似できない作品で，よし Dickens の描く所河馬 (hippopotamus) ができたにしてもその河馬が生きていれば十分ではないか。口惜しければ文句を言う前に河馬でもいい創造して御覧，とばかりに弁護に積極的である。まさしく動物で言えば最もグロテスクな河馬になぞらえる事もできるであろう。 Weller 親子の発散するあのグロテスクな生命力もその一例である。

Club の会長 Pickwick 氏は三人を従えて Club 通信班として処々旅行に出発する。時には直接経験しなくても旅の夜更に聞いた哀れな旅役者の物語や恐るべき復讐物語(2)なども交えて伝えて来る仕組である。 (1) Rochester を訪れた一行はいんちき師 Jingle に会い，うかつな Winkle 氏は危うく

(1) *Charles Dickens*, X

(2) The Stroller's Tale, The Story of the Convict's Return, The Bagman's Story, A Madman's Manuscript, A Queer Client, The Story of the Goblins, The Legend of Prince Bladud, The Story of the Bagman's Uncle の八篇

決闘騒動に巻き込まれそうになる。(2) 親切な金持 Wardle 氏の住む Dingley Dell を訪ねる。同行の Jingle 氏は Wardle 氏の妹を欺いて駈落ちをするが，追跡した Pickwick 氏はその妹を救出すると同時に Weller を従僕に雇う。(3) Eatanswill に出かけると代議士選挙の最中で知名の士を知る。(4) そこに別名を名乗って Jingle 氏が現れるので奸計をあばく為 Bury St. Edmunds に追跡するが，逆に一杯喰わされる。(5) Jingle 氏を追って Ipswich に行き，間違って女の部屋に眠った為決闘事件に発展して逮捕されるが，逆に Jingle 氏の奸計をあばいて釈放される。(6) Dingley Dell でのクリスマス。(7) ロンドンの下宿屋の女将 Bardell 未亡人の聞き間違いに端を発して Pickwick 氏は結婚詐欺の容疑で七百五十ポンドの損害賠償金をかけた裁判事件に巻き込まれる。(8) Bath を訪れ，Winkle 氏が Allen 嬢と恋に落ちる。(9) 無実の罪で Pickwick 氏は投獄されるが，最後は相手の Bardell 夫人も詐欺弁護士の犠牲になって投獄されるので事件は解決する。Pickwick 氏は Weller をつれて隠退，Winkle 氏は Allen 嬢と，Snodgrass 氏は Wardle 氏の娘と夫々結ばれる。

散漫な構成と言ったのはこの梗概からも想像できる様に事件のてん末に必然性が薄く，何処へでも都合のよい所へ気儘に旅行ができ，自由に事件が持上がる仕組みになっているからである。小説の構成としてはマイナスの面も多いが，これが同時に，自由に Dickens の能力を発揮する場を与える契機ともなっている。ありったけの能力を自由奔放に注ぎこむ広さが許されているからである。

既に人間の暗黒面を洞察しこれを鮮明に描きあげる心理描写の鋭さは，たとえば狂っている事を意識していながらこれを世間から糊塗して世を欺く事に狂喜し，妻や肉親を次々に殺さねばならなくなる性格破綻者を描いた *A Madman's*

Manuscript (1) をはじめ挿話のほとんどはその様な傾向のもので，Fleet の監獄に呻吟する哀れな囚人の悲惨さ(2)を描いた暗澹たる情景と共に，Dickens 後半生の暗さを明かに伝えている。

しかしこれと対蹠的に人生の野放図なエネルギー，明るさ，健啖さのありったけを展開して見せる健かさは恐らく世界文学にも比較するものを持たない。悲しみも喜びも，儚さも強さもすべてを飲み込んでケロリ生命力のままの生を生き続ける底ぬけの人間世界である。Weller 親子を頂点に，その様な素朴で健康なありのままの生命力が溢れている。矛盾撞着がそのまま血に消化吸収されて展開される。生命の豊穣とでも呼ぼうか。

開巻早々現われる Jingle 氏もその様な生命力の享受者であろう。人を欺こうとする天才的な彼の情熱が自ら次の様なスタカット調の 'broken sentences' となって流れ出るのである。詐欺などというせせこましい意識を越えて生命のまま詐欺を生きているというのが真実であろう。馬車の停車場の出口には低い archway があってうっかり乗っていようものなら頭をぶっつける。「危いですよ」と隣に坐った見知らぬ男に注意するとそのまま続ける——'Terrible place — dangerous work — other day — five children — mother — tall lady, eating sandwiches — forgot the arch — crash — knock — children look round — mother's head off — sandwich in her hand — no mouth to put it in — head of a family off — shocking, shocking!(3)

詐欺の名人とは嘘の様な真実を告げる人であろう。真実のような嘘ではない。嘘と分っていながらこの名人にかかっては嘘でなくなるのである。「あゝ恐しい事だ，恐しい事だ」と感じ入られると，手にパンを持って，首はなくて，という

(1) *P. P.*, XI (2) *ibid.*, XXI, XLI, XLIV (3) *ibid.*, II

断片的にはあり得べからざる事実が真実であるかの如くつなぎ合わされて来る。とても賢い犬がどうした事かパタリ足を留めて魅せられたかの様に動かなくなったので見ると「柵内の犬は撃たれます」の立札があった等という嘘は Jingle 氏の話法にかかると嘘でなくなるから奇妙である。

'Ah! you should keep dogs — fine animals — sagacious creatures — dog of my own once — Pointer — surprising instinct — out shooting one day — entering enclosure — whistled — dog stopped — whistled again — Ponto — no go; stock still — called him — Ponto, Ponto — wouldn't move — dog transfixed — staring at a board — looked up, saw an inscription — "Gamekeeper has orders to shoot all dogs found in this enclosure" — wouldn't pass it — wonderful dog — valuable dog that — very.'(1)

この Jingle 氏にかかれば中年の Miss Wardle ならずとも Ipswich 市長の娘をはじめすべての女性は運命を共にする気持になるであろう。

酒に酔わせて有無を言わせず馬車に乗せると投票場へ連行して自軍に投票させるという悪辣な選挙運動は *Sketches* (2) にも見られるが Pickwick (3) の世界ではその悪辣さが天真らん漫な為にむしろ健康でさえある。選挙が近づくとラッパや鳴物入りの行列がお祭気分で騒ぎ立て，投票権のない婦人までパラソルや装飾品など貰うのに忙しい。泥酔状態にして何十人も一括馬車置場に監禁したり，女中を買収して酒に麻薬を入れて相手を眠らせてまで投票を妨害する。選挙運動に疲れて夜中うっかり歩いているとポンプの水が飛んで来て倒されたまま翌朝まで昏睡する男も居れば，買収された御者は客を乗せた車を河へ落す事も辞さない。鳴物入りの行列が相

(1) *ibid.* (2) Our Parish, IV (3) *P. P.*, XIII

手側の行列と行き合う事でもあればお祭のみこし同然忽ち旗竿（flag-staff）が入り乱れて修羅場となる。これこそ本当の選挙戦であろう。おっぴらで力ずくである点男性的でむしろ痛快である。

暇さえあれば街路でも車上でも所構わず眠る Joe 少年[1]の映像も面白い。おやっという間に眠り始める。眠りの天才である。精力的に眠るという形容を与えたい少年である。

やがて Winkle 夫人となるべき Arabella の兄 Allen 君と Bob Sawyer は Bristol に開業する酒飲み藪医者の典型である。金さえあれば何日でもたて続けに半酔いと泥酔の生活（wavering between intoxication partial, and intoxication complete）[2]を続ける。御両人の違いは，酔うと Sawyer 君がとても痛快になるのに対して Allen 君がとてつもなく感傷的になる事だけである。だから医療器や薬の補充などできる筈がなく，一番安物の‘calomel’（下剤の一種）しか残っていない。どんな病人が来ても勿体ぶってこれを与える以外に方法がないので患者の病状は大抵悪化する。だからできるだけ何日間でも留守にする事にしている。それが患者を救う所以[3]であるというのが彼等の倫理である。しかし反面宣伝の腕もすばらしい。

He goes up to a house, rings the area bell, pokes a packet of medicine without a direction into the servant's hand, and walks off.[4]

he とは彼等が雇っている少年である。どこの家でもいい，飛び込んでは薬らしきものを女中に渡して来る様に訓練してある。勿論翌日になると間違いなく再びこの少年はその家を訪ねて次の様な科白を残す事を忘れない——

‘Very sorry—my mistake—immense business—great

(1) *P. P.*, IV-IX, LIV, LVI (2) *ibid.*, XXXVIII
(3) *ibid.*, L (4) *ibid.*, XXXVIII

many parcels to deliver—Mr. Sawyer's compliments...'[1]

その効果は期すべきであろう。lamplighter にお金をやって毎晩十分間づつ門のベルを鳴らして貰う事にもしている。来客を象徴するさくらである。教会に Sawyer 君が行っていると静まり返った瞬間を見はからって必ず少年が駆け込んで「先生」と大声で呼び出す仕掛にもなっている。

彼等がまだ医学生であった頃，ロンドンの裏町で，なけなしの金をはたいて催したパーティ[2]は底ぬけで特に印象深い。舞台には何もない。臨時仕立のテーブルと借物のグラス四箇。登場人物は Sawyer, Allen, それに彼の同僚三人と Pickwick Club の面々を合わせて九人。半年近く下宿代を払わぬ Sawyer 君に業を煮やしてヒステリカルにが鳴り立てる女将を階下に控えて，彼等貧しい者同志の自棄的な，底ぬけのどんちゃん騒ぎである。医学生仲間で事もなげに話す手術についての怪談じみた無気味な自慢話，十年間，誰からも大喝采を得て聞いて貰って来たという十八番の物語を話したくてもじもじしていた矢先，やっと話し始める好機を摑んだ瞬間，急に忘れてどうしても思い出せないという男，学生同志のはでな喧嘩，"The King, God bless him" と "Bay of Biscay" と "A Frog he would" の三つの曲が一緒になったドラ声の大コーラス，果てはとうとう宿の女将に叩き出されたが，例の Allen 君は酒で大いに憂うつになったものの，腹を立てたり興奮したりしながらロンドン・ブリッヂまで一同を見送った。涙を流していた眼を帽子で叩くと，再び急ぎ足で引返えし，マーケットの事務所のドアを二回ノックして踏段で眠り，ノックしては眠り，朝まで繰返していた。ここが自分の家で運悪く鍵を忘れて来たのだと堅く信じ込みながら。

酒の場の描写は後に Mr. Swiveller で一つの完成を見る

(1) *ibid.* (2) *ibid.*, XXXII

が[1], 野性的な潑剌さと生気に溢れた点ではこれに及ばない。酒の喜びと悲哀の対照がよほど鮮かに生彩を得て，その何れもが大規模に夫々一つの頂点を突いた感じの印象は Dickens 自身の若い潑剌さと同時に，そのすぐれた想像力と人物の配置などに見られる構成の巧みさと相俟って Dickens 生来の情熱を大胆に表現し得ていると云ってよい。

Ipswich で婦人の寝室に誤って忍び込んだ事に端を発して Pickwick 氏は Tupman と共に官憲に逮捕されて椅子かご (sedan-chair)[2] に乗せて連行される。行末を案じながら Snodgrass, Winkle 両氏は打萎れて行列について行くが，この行列を見て御主人が逮捕された事をはじめて知った Sam Weller はいきなり官憲めがけて殴りこんだ。するとどうだろう，あれほど打萎れていた Winkle 氏はそばの子供めがけて猛襲 (onslaught) を試み，Snodgrass 氏は「さあ行くぞ」と大声一番悠然と上衣を脱ぎにかかる。

この際両氏は Weller を制すべきか，或は無実の子供を殴りつけないで Weller と共に官憲めがけて堂々殴りこみをかけるべきか，等の考察は愚かである。その様な意味からは二人の行動はナンセンスに違いないが，この行動ほど生彩に富んだ形で人間の生命を象徴するものはない。正邪善悪を越えた所で純粋な生命がそのままピチピチ動いているのである。殴りこみは十八世紀の picaresque の世界であるが，既に十九世紀の picaresque には英雄はなく，二人共容易に取押えられて了う。その様な英雄に代って軒昂たる庶民の気慨が，喝采を浴びながら，或は無謀な形ではあるが，遠慮なしに発散している情景である。

ビーズ製ネクレス玉二十五個を飲み込んだ子供[3]の腹は，動く度にガラガラ音を立て，超特許ソーセッヂ製造機 (the

(1) *The Old Curiosity Shop* (1840-41), XXIII
(2) *P.P.*, XXIV (3) *ibid.*, XXXII

patent-never-leavin'-off sassage steam ingine)[1] を発明した男は妻に苛められ，思い余ってその機械に飛び込んで死んだのであろう。後になってソーセッヂからその男のズボンのボタンが出て来る。入獄前に四柱寝台 (four-poster)[2] で眠る習慣であった男は入獄十余年このかたお粗末なテーブルの下にもぐりこんで昔の四本柱を想い出しながら眠る。焼饅頭 (crumpet)[3] は安価で満腹感が得られて健康によいという信念 (principle) を持つ吝嗇は，病気になって医者からその 'crumpets' を禁じられた時，自已の信念を貫く為にありったけの金をはたいて鱈腹たべた挙句脳天を射って死ぬ。

いずれも愚かでかたくなではあるが，遠慮会釈なく人間性を露呈しておかしさと同時に生命のはかなさをにじみ出させて見せる世界である。財産や地位などの枠をかなぐり捨てて真裸になった人間の真実と云えよう。

牢獄で同室の囚人が泥酔して眠ったかと思うと又起きて大声一番歌い始めるので同僚の Smangle 氏が堪りかねてジョッキで頭をゴツンと叩いてたしなめるのを Pickwick 氏はうつらうつら聞いている。当り前の情景にすぎないが次の様な表現をとるとその余裕がヒューモアを生む。

> Mr. Pickwick had been in a state of slumber for sometime, when he had a faint perception of the drunken man bursting out afresh with the comic song, and receiving from Mr. Smangle a gentle intimation, through the medium of the water-jug, that his audience were not musically disposed.[4]

したたか打たれた所が 'gentle' となり，「聞きたくもねえ」と怒鳴る所が音楽を聞く気分になれない聴衆にかわされて笑が生れるのである。

(1) *P. P.*, XXXI (2) *ibid.*, XLIV (3) *ibid.*
(4) *ibid.*, XLI

殴込みの場面からも想像がつく様に Sam Weller はロンドン児の代表である。鼻っぱしが強く機智に富んで Pickwick 氏の影は薄れ，Dickens の最初の計画はやむなく崩れて Weller 親子を中心にこの物語が引掻き回されている観をさえ呈している。蓋し Weller 親子は *The Pickwick Papers* の圧巻であるのみならず，初期の Dickens 文学が達成し得た最高峰と言えるであろう。同種類の人間像としては後に Mr. Micawber が完成されるが，意気と潑剌さ，総じて精力的な面では Weller 親子の方がはるかにすぐれている。

Micawber 氏以上に下賤の身で，世の辛酸を嘗めつくし，明日の運命も分らぬ天涯孤独とも言える御両人である。父親 Tony が十八世紀的な素朴な田舎人であるのに対して，Sam は十九世紀ロンドン児を代表する。I wos a carrier's boy at startin': then a vagginer's, then a helper, then a boots. Now I'm a gen'l'm'n's servant.(1) という言葉からも判る様に，あらゆる賤業を経た上でやっと紳士の下僕になったが，いつかは自分もいっぱしの gen'l'm'n' になるのだという大望に燃えしきる青年である。馭者をしている Tony はこの一人息子をこよなく愛し，あってなきが如き家名を重んじる事を常日頃教え，教育にも極めて熱心である。息子が Pickwick 氏に雇れる様になってはじめて会った時，息子に落度がなければと案じ顔に尋ねた時，申し分ない子供だとほめられると手放しで喜んだ父親は言う。

"Wery glad to hear it, sir," replied the old man; "I took a good deal o' pains with his eddication, sir; let him run in the streets when he was wery young, and shift for his-self. It's the only way to make a boy sharp, sir." (2)

と教育的な信条を披露する。その様な教育も手伝ってか，

(1) *P. P.*, XVI (2) *ibid.*, XX

息子は頭が切れ，気は利き，癖は強く，狡滑な面もあり，あらゆる点から考えても sharp の一語に尽きる。一方主人に対してはあくまでも従順な忠僕であり，その他の者に対してはすべて押しの強さで饒舌をふりまきながら，wit と irony を武器に生きて行く。生命のままを誰れに遠慮会釈もなく恬淡と享楽している。Bath で主人の使者として Bantam 邸に出かけて，軽妙な洒落と押しの強さで相手をへこます離れ業(1)もその代表的なものであるが，たとえば破れた帽子を通風帽(wentilation gossamer)(2)と洒落る機智や，同じく世の不公平を指摘してもその辛辣さにとぼけた皮肉を持たせる。善良勤勉な人が投獄され，悪魔がこの世にはびこる不公平を訴える言葉である。

'It's unekal' as my father used to say wen his grog warn't make half-and-half: 'It's unekal, and that's the fault on it.'(3)

ラム酒を水で割ったグロッグの釣合が取れていない事実を世の不公平に適用して用いる 'unequal' という言葉の持つとぼけた瓢逸は奇抜である。

意気地なロンドン児の知的なひらめきは父親 Tony になると辛酸を嘗めつくした挙句の人生哲学に深められていぶし銀の光彩を放つ。

恋に落ちたらしい息子を見て Tony は真実「結婚してくれるな」と希う。

"... it'll be a wery agonizin' trial to me at my time of life... to see you married, Sammy — to see you a dilluded wictim, and thinkin' in your innocence that it's all wery capital. It's a dreadful trial to a father's feel-

(1) *P.P.*, XXXV (2) wentilation は ventilation のなまり，gossamer は商人が軽い silkhat を gossamer（くもの糸）と呼んだ事から帽子一般をふざけて呼ぶ時にも用いられる様になった語。 (3) *ibid.*, XLI

in's, that 'ere, Sammy." (1)

実は「欺された犠牲者」(deluded victim) であるのも知らず有頂天となっている子供を見るのはこの年になっては痛ましい試練だと訴えるのである。だからもし万が一にも結婚がしたくなったら「首つりは下司っぽいから，すぐ部屋にこもって毒薬を飲め」(...jist you shut yourself up in your own room...and pison yourself off hand.) (2) と心からの忠告を与える。「そうすれば後になってよかったと喜ぶだろう」等というのは無智を露呈した駄洒落とも言えようが，子を想う父の真情には些かの狂いもない。

しかし同時に「夢結婚してくれるな」と希う気持と並列して「結婚しなければならぬ」という厳粛な命題からも逃れる事はできない。直情径行の Sam が，父の後妻がいんちき宗教に熱中していかがわしい男にうつつをぬかしているのを見かねて，何故指をくわえて傍観しているのかとなじると父は深い溜息まじりで返答する。

" 'Cause I'm a married man, Samivel, 'cause I'm a married man. (3)

この言葉には悲喜交々満腔の感情がうかがわれる。結婚すべきでないという命題と結婚は避けられないという命題に挟まれて，右往左往悩み続けた人間運命の極限に立って洩した言葉であろう。結婚してあれほど苦労しながら得る所は結局ないにしても，それは各人の趣味 (taste) (4) の問題であるから兎や角言うべきではないという底をついた達観がこの野人 Weller には浸透している。お前も結婚しなければならぬ血統を引いている (a fatal disposition to get married ran in the family and couldn't be helped) (5) のだからと，その不可避の運命的事実に対しても甚だ率直である。矛盾を矛

(1) *P. P.*, XXXIII (2) *ibid.*, XXIII (3) *ibid.*, XXVII
(4) *ibid.* (5) *ibid.*, XXXIII

盾としてそのまま率直に人生から受取りこれを一身に受入れて生きる姿は，理想主義的人生観とは縁遠いにしても，最も英国的な考え方でもあり，それが野人 Tony に体現されて一層生彩に溢れた形で人間性の尊厳ささえ備えるに到っている。

後に死を扱う場面は *The Old Curiosity Shop*, *David Copperfield*, *Great Expectations* 等々数多いが，死を美化しようとする意識に関しては兎も角，死を慟哭する真情を表現し得た点では，Tony がその後妻 Susan を失ったそれにまさるものがない。葬式を済ませた父をはじめて訪ねた時の描写である。

"I wos a thinkin', Sammy," said Mr. Weller, eyeing his son, with great earnestness, over his pipe; as if to assure him that however extraordinary and incredible the declaration might appear, it was nevertheless calmly and deliberately uttered.

"I wos a thinkin', Sammy, that upon the whole I wos wery sorry she wos gone."

"Vell, and so you ought to be," replied Sam.

Mr. Weller nodded his acquiescence in the sentiment, and again fastening his eyes on the fire, shrouded himself in a cloud, and mused deeply.

"Those wos wery sensible observations as she made, Sammy," said Mr. Weller, driving the smoke away with his hand, after a long silence.

"Wot observations?" inquired Sam.

"Them as she made, arter she was took ill," replied the old gentleman.

"Wot was they?"

"Somethin' to this here effect. 'Veller,' she says, 'I'm afeard I've not done by you quite wot I ought to

have done; you're a wery kind-hearted man, and I might ha' made your home more comfortabler. I begin to see now,' she says, 'ven it's too late, that if a married 'ooman vishes to be religious, she should begin vith dischargin' her dooties at home, and makin' them as is about her cheerful and happy, and that vile she goes to church, or chapel, or wot not, at all proper times, she should be wery careful not to con-wert this sort o' thing into a excuse for idleness or self-indulgence. I *have* done this,' she says, 'and I've vasted time and substance on them as has done it more than me; but I hope ven I'm gone, Veller, that you'll think on me as I wos afore I know'd them people, and as I raly wos by natur'.' 'Susan,' says I,—I wos took up wery short by this, Samivel; I von't deny it, my boy—'Susan,' I says, 'you've been a wery good vife to me, altogether; don't say nothin' at all about it; keep a good heart, my dear; and you'll live to see me punch that 'ere Stiggins's head yet.' She smiled at this, Samivel," said the old gentleman, stifling a sigh with his pipe, "but she died arter all!" (1)

Chesterton(2) も指摘する様に，それこそ *The Pickwick Papers* 中 Dickens が最も真剣になって描いた scene の一つであることは疑う余地がない。死なれてみるとやはり淋しいんだ(upon the whole I wos wery sorry she wos gone)。前非を悔いる Susan に，元気を出しなよ，今度はインチキ牧師 Stiggins の奴にパンチを喰わせて見せてやるからと慰めるとSusan は笑顔を見せながら，結局は死んじゃった！と言葉少なに洩れる言葉には Dickens の満腔の感情がここに

(1) *P.P.*, LII (2) Introduction to *The Pickwick Papers*

凝集してまざまざと Weller 親子の生命を躍動させているからである。

妻を失ってはその悲嘆は徹底して底をつき，逆に馭者としての身上を謳歌する楽天思想(1)に駆られては，その自画自讃の精神も徹底して意気天を突く。一般に‘caricature’という非難の言葉もその徹底さと関連して考え合さねばならぬ面が多い。ともあれここに見られた Weller 親子をはじめ *The Pickwick Papers* に見られる人間探求の徹底さ，執拗さ，凄さは，まさしく天才の名を冠する以外に呼び様のない不気味なまでの資質を証拠立てるものであろう。

(1) *P. P.*, LII

IV　貧困と悲惨の文学

—— *Oliver Twist*

弱い者に憐憫の情をかける事と，その様な弱い者を含めた犠牲者を生む社会を攻撃する事とは Dickens の場合別物ではなかった。同情は同情として一つの感情の問題として処理し，又社会の悪への攻撃はそれなりに政治的な理論として別に掲げる事ができる冷い人間ではなかった。ここに Dickens の文学者としての真面目もうかがう事ができよう。同情や憐憫は凡人を超えて強烈であった。そういう感情移入の強さ，感受性の激しさ，と同時に鉄の如く強靱な意志力，執拗さを併せ持っていたという事実は，人間 Dickens を解釈する上でも見落すことのできない重要な条件であろう。結果的な面から言えば後の *The Old Curiosity Shop* はその前者の傾向が強く表面に押し出された作品であり，*Hard Times* などは後者の傾向を代表する作品と呼んでよい。何れにせよ，相矛盾するこの二つの要素を一身に集めている所に Dickens 文学を形成する大きな要因が含まれている訳であり，この二つのものの兼ね合い或は調和の保たせ様の中に，夫々作品の長所や短所も端的に現れて来ている。*Oliver Twist* には確かに若さは蔽いかくせないが，意識以前の状態でこの二つの要素が過不足なく調和されて非常にすぐれた作品となっている。それまで用いていた筆名 Boz，又時には Goldsmith からやはり借りたであろうと想像される Tibbs(1)等の筆名はやめられてはじめて本名 Dickens を打出した作品である。後半，

(1) *The Citizen of the World*. LII, LIV, LV, etc. に出るホラ吹きの乞食紳士。ちなみに Boz は *The Vicar of Wakefield* に出て来るのん気な少年 Moses を Dickens の弟が誤って Boses と発音していた事から弟のあだ名になって Bose→Boz と変化した。

年齢が進むと共に次第に意識的となり，或は構成に対する周到さも加わって来たが，その事が必ずしも傑作を生む事と結びつく条件とならないのは皮肉であった。

E. Johnson[1] は Shakespeare が劇で表現した陽気 (hilarity) の世界を *The Pickwick Papers* で実現し得た Dickens が *Oliver Twist* では一転して陰惨と暗澹の世界に入ったとその対照を取上げているが，社会批判 (social criticism) の面を強調して，その様な批判的な面が Dickens の意識にはっきりと組織的に現れるのは *Dombey and Son*[2] あたりからである。勿論この *Oliver Twist* にも養育院 (workhouse) の制度に対して，又これに続く *Nicholas Nickleby*[3] では残酷非道な学校制度に対して猛烈な抵抗を試みているが，その様な態度は既に *Sketches* にも明かで，'misery' と 'poverty' を強調しこれを読者に訴えようとする態度[4]は全篇を貫いて居る。*The Pickwick Papers*[5] にも牢獄に呻吟する哀れな囚人の生活は限なく紹介され，同時に獄吏や裁判官に対する呪詛さえ試みながらこれに強い抵抗を見せているのである。

初期のその様な動きについて共通して言える事は，同情の対象を弁護しこれに暖い手をさしのべ様とする態度が強く，その様な憐むべき対象を生んだ原因ともなるべき政治，社会等の持つ非を攻撃しようとする態度はほとんど見られないという事である。Dickens を革命的な Radical[6] だとする考え方は正しく，事実既に 1836 年 *The Pickwick Papers* がやっと緒についたばかりの六月には *Sunday Under Three*

(1) *C. Dickens,* Vol. I. IV, I　(2) 1846-8　(3) 1838-9
(4) Our Parish, II, V, Scenes, II, III, XXII, XXIII, XXV Characters, X, XII Tales, VI, XII　(5) *P. P.*, XLI-XLIV
(6) 党派的には自由党に属するが，なかでも急進的で革命も事態によってはやむを得ぬとする十九世紀の過激派に冠せられる名称。

*Heads*という小冊子を印刷配布して識者の反省を促すほどの勇気と過激性を見せていた。日曜日を神聖なものとする為にあらゆる労働,享楽を禁じようとする Sabbath Bill がその四月国会に提出されるという事を耳にして急遽反対意見を開陳した論文である。しかしこの論文でも明かな事は，*Sketches* に見られる態度(1)と同じ様に，庶民にとって週一度の休日がいかにかけがえのない大切なものか，貧しい労働者は一日の休養を取って郊外に家族と遊び，或は我が家での団欒にどれほどの活力を取戻すか，よし若い稚丁などがこの日に酒に酔う事があったとしても，むしろ喜んで許してやってよいのではないか，と実は抗議を申入れるというより諄々と相手に訴え説き聞かせる態度が明かである。その様な法案をめぐる政治的な動きを攻撃するのではなくて，ヒューマニズムの立場から余りにも極端な清教徒的な傾向に走る事をいましめると言った方がふさわしい抗議論文である。其処に同じ Radical であっても Dickens の立場が考えられるのであるが，二十四才でこれを堂々発表するその勇敢さといい，自己の信念を貫く為の意志力といい，まさしく Radical のそれに違いないとしても，それはあくまでも文学者としての立場に立っての事であり，決して政治的な動きを直接ねらって出発したものではなかった。

同じ事が *Oliver Twist* 等文学作品についても言えよう。勿論前述の様に *Dombey and Son* あたりから社会悪，或は社会の矛盾に対する Dickens の憤懣は激しくなり，それまで断片的に現れていた社会批判が，組織的に，小説の構成自体とない合わされて現れる様になるが，そして *Hard Times* 等ではその批判が文学の枠を破って露骨にむき出しのまま読者に提出されるという，行き過ぎの例も見られるが，やはり全体を通じて言える事は，ヒューマニズムの立場から弁護し，

(1) Scenes, XII

或は訴える事が主眼であって，所謂，政治的な Radical の様に，相手を破壊してまでもと言った過激な手段に訴える事は遂になし得ない人であった。あくまでも文学者としての分を真剣に守りぬいた作家と呼んでよい。

そして本来 Dickens に Radical としての傾向に走る政治性があったと言うより，時代そのものが余りにも混乱し悪化していた為にそのヒューマニズムを居ても立っても居らせない極端にまで追い込んだという事実が文学者 Dickens を Radical に追いやった根本原因と考える方が適当である。時代はそれほど紊乱を極めていたようである。Dickens 以上にこの問題に関しては Carlyle (1) の存在を忘れる事はできないが，人類が物質文明，科学文明をどの様に扱うべきか，或はその文明を担う資本主義経済組織をどの様な方向に導くべきか，少くとも産業革命，フランス革命を経てその方向に走り始めた時流に対して，その長所は認めながらも，それにともなう余りにも大きな犠牲に対して世人を絶えず警告し続けたのが Carlyle であり Dickens であった。それに続くものとしては，M. Arnold 等の功績も一際目立つが，問題は何一つ解決されて居らず，益々混乱を極めたまま今日に持越されているというのが実情であろう。We marked the advance of civilization, and beheld it with a sigh. と青年 Dickens を嘆かせた現実がそのまま今後 *Oliver Twist* 以降の作品の中で具体的な課題となって現れる訳である。

Oliver Twist という子供は行き倒れの女に生れた孤児である。ひどい養育院（workhouse）で育てられ稚丁に雇われるが，人間扱いをしてくれないので逃れてロンドンへ出る。不幸にも Fagin という老ユダヤ人を主魁とする盗賊団に拾われてスリを仕込まれる。一時 Mr. Brownlow という慈悲

(1)　(1795–1881) Dickens より 17 才年長で，11 年永生きしたが Dickens は特に尊敬して「二都物語」を捧げた。

深い紳士に救われて可愛がられるが再びギャングにさらわれてきびしい監視を受ける様になる。Fagin の同僚 Bill Sikes が強盗を働く手助けをする為に或夜引出されてある邸宅に忍び込み，発見され射たれて Oliver だけが取残されたが，幸い Maylie 夫人及び彼女の許に同居する少女 Rose の温い庇護を受けて回復する。Bill Sikes の情婦 Nancy が Rose の所へ姿を現わし，Oliver の家系を知ってその遺産をねらっている義兄の Monks というならず者がいてその生命をねらっている事などを教える。Nancy はその密告が露見して Sikes に殺され，Sikes は逃亡をはかるが時既に遅く自ら無残な死を招き，Fagin も捕えられて処刑される。Monks は国外に逃れて死ぬ。Rose は Oliver の母の妹であった事も分り，Oliver は Mr. Brownlow の養子となる。

最後になってそれまで入り乱れていた人間関係が実は案外近い所で結び合わされていた事が分る仕組になっていて，取ってつけた様なその構成の非は弁護のし様もないほどこの小説の欠点となっている。しかしそれにも拘らず，この小説に露呈されている様々の悪の様相の真実性と，その悪に対する鮮かな勧善懲悪の故に，むしろ奇妙なほどすっきりした作品となっている。

その様な鮮明な清新さは次の様な追跡場面にも充分うかがう事ができる。Oliver は訓練されてはじめて街に出てスリを働くが，それがバレて群衆に追いかけられる場面である—

'Stop thief! Stop thief!' There is a magic in the sound. The tradesman leaves his counter, and the carman his waggon; the butcher throws down his tray; the baker his basket; the milk-man his pail; the errand-boy his parcels; the school-boy his marbles; the paviour his pick-axe; the child his battledore. Away they run, pellmell, helter-skelter, slap-dash: tearing, yelling, screaming, knocking down the passengers as they turn the

corners, rousing up the dogs, and astonishing the fowls: and streets, squares, and courts, re-echo with the sound.

'Stop thief! Stop thief!' The cry is taken up by a hundred voices, and the crowd accumulate at every turning. Away they fly, splashing through the mud, and rattling along the pavements: up go the windows, out run the people, onward bear the mob, a whole audience desert Punch in the very thickest of the plot, and, joining the rushing throng, swell the shout, and lend fresh vigour to the cry, 'Stop thief! Stop thief!'

'Stop thief! Stop thief!' There is a passion *for hunting something* deeply implanted in the human breast. One wretched breathless child, panting with exhaustion; terror in his looks; agony in his eyes; large drops of perspiration streaming down his face; strains every nerve to make head upon his pursuers; and as they follow on his track, and gain upon him every instant, they hail his decreasing strength with still louder shouts, and whoop and scream with joy. 'Stop thief!' Ay, stop him for God's sake, were it only in mercy! (1)

これは'Balloon!'という言葉に容易に動員された群衆と全く同質の群衆の描写である。ただ違うのは，無目的な好奇心に動かされていた群衆が，今度は勧善懲悪に動員されているという事だけで，初期 Dickens の精力に溢れた筆力が端的に集約されている好例である。曰く，メロドラマ的である事，表面的という欠点はまぬがれぬとしても，描写が目に映ずるままに謂わば視覚的に，同時に走る動きのままに捕えられている為に凝視する視覚ではなく，移動する視覚として動く変化がそのまま生かされている事，曰く，誇張はあるにしても，それらが追跡という一つの意識に統一され要領よく安

(1) *O. T.*, X

定した形で配列されている為に追跡場面の典型的な戯画となっている事，而も最後に‘Stop thief!’Ay, stop him for God's sake, were it only in mercy! とつけ加えるあたり，追跡に狂奔する喜びと併せて，そのどさくさのさ中にあり乍ら追われる子供への同情を見失わずその追跡が持つ自己撞着とそれへの反撥をも同時に暗示した諷刺も程よく利いて幅広い表現性を保ち得ている。

いずれにせよ Dickens 自身がこの群衆の先頭に立って追いかけている事は事実である。スリを悪に置き換ればそのまま Dickens の一般的態度となる。世に溢れた様々の悪を追跡し，勧善懲悪を果す事，それがそのまゝ Dickens の作家態度となっているのである。Oliver Twist に関連してそのような悪の様相には目を蔽わしめるものがある。

フランス革命は偶々フランスという国で集約された形で短時日のうちに果されたが，結果的に言えば，あまねく人類のまぬがれ得ない革命であったと言えよう。民族性その他の為に国によって大同小異の過程の変化は見られるが英国にとってもこれは例外ではない。既に産業革命を経てやがて政治に関する様々の革命を強いられている状態であったが，偶々フランス革命を見てこれに触発され或は啓蒙される等の影響を受けて，英国は英国なりの革命を十九世紀前半で経なければならなかった訳である。フランス革命は予期しなかった対内対外関係の下に，Napoleon という之亦予期しなかった英雄を生まねばならなかったが，英国はおかげで十九世紀の最初の十五年間は徹頭徹尾 Napoleon に苦しめられた。結局 Waterloo の戦捷 (1815) によって漸く Napoleon 戦争に終止符は打たれたが，ナポレオン相手に強固な戦時態勢を整えねばならなかった事は，その間に政治的な改革を容易にする面よりも困難にする面が多く，結局は1815年以降に急速な改

革が強いられた訳である。そしてその改革は1832年の選挙法改正案（Reform Bill）の通過を頂点として断行された訳であるが，戦後の混乱と疲弊の中の改革であるだけにその間特に庶民階級の受けた犠牲は目に余るほど大きなものであった。

戦後の問題として最初に明かにされたのは，期待していた繁栄が現れない事であった。物価は下ったが都会人には喜ばれても田舎の地主や農業労働者にとっては死活の問題であった。穀類の暴落によって田園は忽ち悲惨のどん底に突き落され，飢餓者を生み，農業をやめて都会に走る人も多かった。慌てた政府は，海外からの輸入穀類に課税する Corn Law を決定したが，反対や修正などを1846年まで繰返している。田園を守る事は旧勢力に属する地主階級を擁護する事であり一般大衆の利害関係と齟齬して1838年には Anti-Corn-Law Agitation などの不祥事件も起きた。

も一つの問題は貿易産業が頭打ちの状態になった事である。十八世紀の輸出品といえば専ら毛織物に限られていた英国産業は戦争のおかげで綿糸，綿布までもが欧州各地から歓迎されて，むしろ戦争中の英国産業は隆盛を極めていたのに対して，平和の回復と共に各国の産業も復興された為に英国の輸出が急に止まった。既に機械化された企業を縮小する事は労働者の馘首問題と直接つながる重大問題であった。機械化と言えば，紡績機械が発明されたのは，バスティーユ監獄破壊(1789年)に始まるフランス革命を遡る事二十二年，1767年の事である。間もなく工場にこれが使用され始め，1782年には James Watt が蒸気力を利用した紡績機を完成して着々手工業から機械化への過程を辿っていた。それだけの産業革命を経た英国であっただけに，フランス革命，及びそれに続くナポレオン戦争という三十年近い歳月を英国だけで欧州全体の生産を引受けてまかなう事もできた訳であり，又それだけに戦後の輸出不振による打撃もはげしかった訳である。

結局一般大衆は田園で農業に携わろうが，町に出て労働に従事しようが，何れの場合も最も直接的な犠牲者にならなければならなかった訳である。戦争中子供が工場や炭坑で働くことは常識であったが，戦後は別の理由で労働が強いられ，1819年には労働時間の制限を始め，九才以下の子供を労働にかり出す事を法令で禁じたが，名目上の法令にすぎなかった。戦後の疲弊はアイルランドでは特に激しく，アイルランドからの難民が大量に流れ込んだ。生活力が旺盛な為にあらゆる労働に従事できたが，乞食になる者も多く(1)1815年二千人と推定されるロンドンの乞食の中三分の一はアイリッシュといわれ，貧民窟の酒場で彼等同志の自暴自棄の喧嘩(2)も絶えなかったらしい。ユダヤ人も二万人以上がロンドンにいたと云われるが，彼等の生活もアイリッシュ以上のものではなかった筈で，ボロ買い(3) 等の賤業はまだしも *Oliver Twist* の Fagin はじめ貧民窟に強盗スリが横行して汚濁と売春と犯罪の巷となっていた事が想像される。

都会だけでなく田舎にも貧民は溢れてその救済は困難を極めた。貧民救済に関しては既に1601年 Poor Relief Act が制定され，逐次 workhouse が建てられ始めた。この workhouse は貧民の為の収容所，或は授産所であるのみならず，流れ来る貧民の監禁所の役目も果した。戦時中（1795）農業を擁護し，地主の利益を計って Berkshire の Speenhamland の委員会が決定したいわゆる Speenhamland System(4) は，農業労働者の賃金を固定する代りに，不足分を一般人からの税金でまかない，結局は地主も，地主から委任を受けた農場管理人（farmer）も共に腹を痛めないで済ませるという産業擁護政策で中南部イングランドに広く普及した方法であった。この Speenhamland System は農業労働者のみならず

(1) *O. T.*, V (2) *ibid.*, VIII (3) *ibid.*, XIV
(4) G. M. Trevelyan: *History of England*, Bk. V, VII

貧民にも適用されるもので貧民を一般からの税金によって収容管理する建前であった。*Oliver Twist* にも出るが，各教区（parish）が商人その他の一般人から取上げる貧民税（poor's rates）[1] は年々増加する一方であった。働けど働けど楽にならぬ農業労働者は，働くよりこの税による保護を受ける方が好ましいので，却て貧民の増加に拍車をかけた。教区にとっては貧民の問題が頭痛の種で，乞食をすると牢獄に入れ（cf. I begged for her in the streets : and they sent me to prison.）[2] たり，浮浪者を出生地に送り返したり，あれこれの手段を講じなければならなかった。処置のつかぬ時は近い港にでも連れて行って外国船に乗せて地の果てに捨てて貰う方法[3] も，死なれて教区が葬式費用を負担しなければならぬより安上りの時にはとられた。workhouse に収容されて何とか寿命が永らえられればまだしも，充分の食物も与えられない為に死ぬ人も珍しくなかった。*Oliver Twist* でも見られる様に，安惰を求めて workhouse に入る人をこらす為に彼等をじりじり飢えさせて（being starved by a gradual process）[4] 殺す方策さえ考えられる状態であった。特に workhouse で困る事は，ここで子供の生れる事であった。だから workhouse で結婚する男女でもあろうものなら，態々教区は訴訟費用を払ってでも離婚させたり，既に結婚している者は隔離して完全な独身者（bachelor）[5] に還元した。それでも Oliver の様に生れた以上は仕方がないので，教区が週七ペンスの養育費を負担して里子として誰かに引取って貰う（to be "farmed"）[6]。悪質の預り人は教区から貰う食費のピンをはねて子供を飢え死にさせたり，不注意のために火傷で殺したり，池に落ちて死なせたりの不幸事[7] も多

(1) *O. T.*, IV　(2) *ibid.*, V, VIII　(3) *ibid.*, IV, XVII
(4) *ibid.*, II　(5) *ibid.*, II　(6) 農場経営者と同様 farmer には幼児預り人の意味もある。　(7) *ibid.*, II

かった様である。

ところでこの様な貧困と紊乱の極にあってこれを一層悪化させるものに戦後の人的貧困という問題があった。いわゆる人的資源の欠亡で，一番目をひいたのは教会，法律，医学に関する専門家がとぼしくなった事であった。戦争によって夫々の専門家を失った事も多いであろうし，教育が空白状態であった事も想像に難くない。この三種類の知識人は絶えず Dickens の笑の好餌となったもので，*The Pickwick Papers* の Tom Sawyer 君等インチキ藪医者もその好例である。医者と言えば *David Copperfield* の Mr. Chillip(1) がその典型で，何も分らぬ癖に何でも知っている素振りをしたり，いやにへり下ったり，結局は無知をさらけ出して笑の対象となる人物である。法律の専門家に関しては，Dickens 自身がその書生であった経歴も手伝って例証に暇ないほど多数が登場する。*Sketches* にも Doctors' Common(2) で尊大な裁判官が諷刺の対象となるのを手始めに，*Bleak House*(3) を頂点としてほとんどあらゆる作品に顔を見せるといっていゝほど材料に事欠かない。法律を悪用する者，これを笠に着る者等すべて悪い側に立たされて攻撃の槍玉にあげられる。宗教に関してはさすがに Dickens も慎重だったらしく滅多に材料に用いる事はなかったが，たとえば新興宗教的なからくりに関しては *The Pickwick Papers* の Mr. Stiggins(4) を通じて大胆な勧善懲悪を行っている。

ともあれこの様な底をついた人的貧困が都会を廃頽，混乱，悲惨，罪悪の巷に導いた一つの原因にもなったし，又田園では残酷や非道や専横を惹起する原因ともなっていた。*Oliver Twist* に颯爽と登場する Mr. Bumble は教区の吏員である。日本流に言えば村役場の小役人で，雑務万端を処置

(1) Ch. I, II, IX, X, XXII, XXX, LIX (2) Scenes, VIII
(3) 1852–3 (4) *P. P.*, XXVIII, XXXIII, XLV, LII

する‘beadle’という端役である。官吏が末端にゆけばゆくだけ民衆に対して横暴になる事は英国でも同じらしく生意気と横柄さの典型である。ところでこの Bumble 氏の眼を通して見ると，当時田舎には四つの勢力が四つ巴の形で対立していたらしい。教区委員 (parish authority)，教会委員 (churchwarden)，治安判事 (magistrate)，陪審員 (jury) の四者である。教会の委員はお人好しで問題にならぬが，判事や陪審員は無教育，蛮から，下司で，Bumble氏の言葉によると ... juries is ineddicated, vulgar, grovelling wretches(1) だと言う。Bumble 氏自身が無教育，蛮から，下司である点から見て，事実も事実であろうが，余程根強い対立があった事が察せられる。事実，救済児 (pauper children) の取扱いに残酷な事があったり手落ちがあれば訴訟事件(2)となる事もある。その矢表に立って教区側を弁護するのは‘beadle’の役目でもある。里子に出されていても九才になると再び教区に引取られて徒弟奉公 (apprenticeship) に出されるが，その時邪魔するのも判事(3)で，子供に働く意志がない時にはこれを教区に突き返す権限を持っている。小さな教区の中でその様な役人がいがみ合って，貧民をはじめあらゆる住民はそうでなくても食うや食わずの境涯であるのに，益々その難渋を激しくされる訳である。

その様な戦後の恐るべき現実，一歩誤れば餓死し，或は一歩誤れば罪悪の奈落に落ち込むという現実に足をさらわれた人間はどの様に生きたらよいのか。それが Oliver Twist の様な孤児であってみれば罪は一切本人には認められず，すべてが Oliver を取巻く環境，具体的には教区では Mr. Bumble，ロンドンに出ては盗賊団の首魁 Fagin を取巻く個々の人間にあった。勿論究極の問題としては Bumble 氏を生んだ政治機構，或は貧民窟を生んだ政治機構等，個人を越えた更に大

(1) *O. T.*, IV (2) *ibid.*, II (3) *ibid.*

きな背景にその悪の原因は求められねばならぬ筈であるが，少くとも *Oliver Twist* をはじめ初期の作品では個人の問題をほとんど出ていない。Bumble 氏は一つの政治態勢を担う人間と言うより個人として愚かで残酷であった。その様に個人的に見て愚かだった男が偶々 beadle であったから益々事態が悪くなったのであり，Bumble 氏を悪くしたその原因というのは彼の属している政治形態ではなくて，むしろ彼自身にある。だから彼の無智をあばき，弱い者苛めをはばからないその残酷性を暴露さえすれば Bumble 氏を葬る所以となる。Oliver に対する同情心をかき立て，Bumble 氏を憎む精神を確立すること，これが勧善懲悪に他ならないが，同時に文学で言うヒューマニズムの根源でもあろう。しかし文学にとって大事な事は Chesterton(1) も言う様に，こゝで Bumble 氏の愚かさと残酷さを読者に声を大にして説き聞かせる事ではない。何千何万の例をあげてこれを説明しても文学にはならない。貧民の窮状を調査してその実体を把握する事は政治家でも記者でも誰にでも可能である。しかしその実情に対する実感を伝え，そこに自ら発動沸騰せずんばやまないヒューマニズムの息吹きを作家，読者共通の地盤で生むものは文学に外ならない。たとえば国会での報告書に基づいて合理的な処置は理論的に行なわれるが，これは現状を修正変更する事にはなっても根本的な治癒や革命を齊すには到らない。文学の世界ではこの Bumble 氏の生きた姿を舞台にのぼせさえすればよい。ほって置いても観衆は彼を抹殺せよ，と必ず叫び始めるからである。Dickens は *Oliver Twist* を通じてこの奇跡とも呼べる革命を招来し得たし，それが現在でも持ち続けているこの小説の意義と言うべきものであろう。

別の表現で言えば愚かで残酷な Bumble 氏や残酷非道の Sikes をまざまざと生けるがごとく描き上げたという事であ

(1) *Charles Dickens*, XI

る。この事実は更に徹底しては Yorkshire の世にも残酷な校長 Squeers(1)，詐欺弁護士 Brass(2)，高利貸 Quilp(3)，産婆 Mrs. Gamp (4)，偽善者 Pecksniff (5) 等主として初期の作品で Dickens の勧善懲悪の槍玉にあがった人々について言い得る事実である。恨んで余りあるこれらの人物について共通して言える事は，Dickens 自身が悪魔となって悪徳を行うことに狂奔する事によってその悪魔に血肉を与え得たという事である。*The Pickwick Papers* に関連して河馬を創造したと言う比喩を用いたが，これら悪人については，悪魔を創造して現実世界に引降ろして見せたと言えよう。

Bumble 氏がその職責の象徴である三角帽 (cocked-hat) とステッキ (cane) に身を固めて教区の住人に八つ当りし或は横暴を振舞う様は *Oliver Twist* 開巻と同時に鮮かに展開される。三角帽とステッキの往く所常に栄光が輝く。とりわけ workhouse や孤児引受け人 (farmer) の前では権力は絶対でその堂々たる恰幅と威厳(stateliness and gravity)(6) は大臣，国会議員，ロンドン市長にもまさる。併せて雄弁術 (oratorical powers)(7) にかけても beadle といういとも尊厳な役職をけがさぬものである事を得意としている。面倒な仕事にうんざりさせられても三角帽を一目見ればにたり得意の微笑が自ら湧くと言うもの。おまけに「大変ですね」と孤児を預る Mann 未亡人に声を掛けられでもしようものなら忽ち恍惚となる。

'A porochial life is not a bed of roses, Mrs. Mann.'(8)

'parochial' を流暢に間違えて 'porochial' と発音するの

(1) *Nicholas Nickleby* IV-IX, XIII, XXXIV, XXXVIII, XXXIX, XLII, XLV, LVI, LVII, LIX, LX, LXV, etc.
(2) *ibid.* XI-XIII, XXXIII, XXXV, XXXVII, XXXVIII, XLIX, LI, LVI-LX, LXII-LXIV, LXVI, LXVII, LXXXIII
(3) *The Old Curiosity Shop* III-VI, IX, XI-XIII, XXIII, XXVII, XXX, XLI, ...　(4) *Martin Chuzzlewit*
(5) *ibid.*　(6) *O. T.*, XXIII　(7) *ibid.*, II　(8) *ibid.*, XVII

はBumble氏の癖[1]であるが教区役所の仕事とバラの花壇を結び付けるのは流石の詩人と言ってよい。

'A porochial life, ma'am, is a life of worrit, and vexation, and hardihood; but all public characters, as I may say, must suffer prosecution.'

心配と苦労と忍耐とは公職に避け得ない条件で，これらの苦しみ (persecution) も覚悟の上だと一応は立派な言葉であるが，いやしくも beadle たるもの難語を用いるべきで，できるだけむつかしく言回しているとつい得意になって 'persecution' が 'prosecution' となるのも止むを得ない。逃亡した Oliver を慕う孤児が居ると聞いて驚いた Bumble 氏は「同じ手だな」ときめつけて言う。

They're all in one story, Mrs. Mann. That out-dacious Oliver has demogalized them all![2]

怒ったあまり 'audacious'[3] が 'out-dacious' となり，'demoralized' が 'demogalized' と強調されてこそ雄弁家の名にふさわしい。

その様な，人間というより職権の権化となった Bumble 氏にとっては，逃げた友達をなつかしく思う人間感情を持つ子供は堕落 (demoralization) の見本に思えるのであろう。この恐るべき思想は，死んだ母の悪口を言われて激昂した Oliver がその相手を叩きのめした事を聞いた時の Bumble 氏の驚きと怒りに最も端的に表現されている。

Meat, ma'am, meat. You've over-fed him, ma'am. You've raised a artificial soul and spirit in him, ma'am, unbecoming a person of his condition ... What have paupers to do with soul or spirit? It's quite enough

(1) *O. T.*, XVII (2) *ibid.*
(3) cf. owdacious newspapers (XXIII), owdacious fellow (XXVII)

that we let 'em have live bodies. If you had kept the boy on gruel, ma'am, this would never have happened.(1)

身の程も忘れて肉を喰わせたからこんな事になったのだ。孤児に魂や精神は不要だ。体を生かせて置くだけで沢山。粥をやってさえいればこんな事件は起きなかっただろうにと口惜しがるのである。まさに恐るべき思想である。そしてDickensがこの小説で槍玉にあげようとしているのはこの思想に他ならない。そしてこの様な言葉を口にしても何の不思議も感じさせないだけの悪魔的なBumble氏を事実Dickensは描きあげることに成功しているのである。

この恐るべき思想はスリ団の主魁 Fagin の場合は Oliver に向って次の様な言葉となる。

If you go on, in this way, you'll be the greatest man of the time (2)

これは父に手を引かれて Gad's Hill Place を見上げた時に父が約束してくれた言葉と区別できない。しかしこの場合はスリをせっせと働けばやがて最も偉大な男になれるのだよと教えて呉れるのである。勿論教えられる Oliver には正邪の判断はつかない。成功第一主義という当時の偏った思想もさる事ながら，手段を完全に無視し，価値を顚倒してはばからない悪魔的な Fagin が close-up されて来るのである。盗みが悪いなどと言う常識的な倫理観など頭から全然認めていないのである。道徳や価値が完全に顚倒した世界である。

その意味ではBumble氏の世界はまだしも人間的な息吹きが残されている。諷刺の対象となり，笑の源となるのもその故である。絶対的な象徴である三角帽も慌てると逆に冠る事(3)もあれば，時々忘れる事(4)もある。恋をしたり(5)，結婚

(1) *O. T.*, VII (2) *ibid.*, IX cf. He'll be a great man himself, and will make you one too, if you take pattern by him. (*ibid.*) (3) *O. T.*, V, XXIII (4) *ibid.*, VII (5) *ibid.*, XVII, XXIII, XXVII

して失敗したり[1]，やはり人間的な弱さが，いかめしい公職人の仮面のすきからのぞいて来る。その隙間をねらって痛々しい人間関係の極致を表現し得ている例もある。九才になった Oliver を workhouse に連戻す為に出掛ける時，或は徒弟に連出す時等にふと見せる人間味である。

Oliver を引取った Bumble 氏は，コートのカフス（coat cuff）[2] にぶらさがる様にすがりついて小走りについて来る九才の少年 Oliver を連れて，風の強い夕方，無口のまま大股で歩いて行く。時折まだですかと尋ねる Oliver はさすがに Bumble 氏にも哀れなのであろう。短くてぶっきら棒な返事（very brief and snappish replies）[3] しか繰返えし得ない姿も痛ましい。又，引取った子供はたとえ相手を誤魔化してでも誰かに徒弟として雇って貰う以外にない。これを果すのは beadle の使命である。上司の命令で葬儀屋の徒弟に出す事になって，又 Bumble 氏が夕方連出す情景も痛々しい。今晩も再びコートのカフスにすがり着いて小走りに走りながらついて来る Oliver を傍若無人の態で（without notice or remark），大股に堂々と闊歩する。目が見えぬほど目深かに帽子をかむった Oliver は強風にあおられる Bumble 氏のコートの裾に小さな体を巻きつけられながら走り続けるが遂に悲しさの余り棒立ちになって泣き始める。「恩知らずの根性まがりめ」と Bumble 氏らしい毒舌が聞かれるが Oliver は懸命に訴える。

'No, no, sir; I will be good indeed; indeed, indeed I will, sir! I am a very little boy, sir; and it is so—so—'

'So what?' inquired Mr. Bumble in amazement.

'So lonely, sir! So very lonely!' cried the child. 'Everybody hates me, Oh...'[4]

孤独の極限に立つ Oliver にこの様に訴えられるとさすが

(1) *ibid.*, XXXVII, XXXVIII, LI (2) *ibid.*, IV (3), (4) *ibid.*

に Bumble 氏も beadle という公職を忘れてふと人間に立返える。小さなしわがれ声でふんと咳払いして（... hemmed three or four times in a husky manner), この咳の奴めと自分の咳にかこって誤魔化すと, いい子になるんだよ (be a good boy) と言いざま再び歩き始める。極限まで追い詰められると beadle の肩書きが消えて人間がほの見えるその微妙さの中に却ってすっきりした人間像が見受けられる。Oliver も Bumble 氏も夫々の極限に立たされて夫々が悲愴さをさえ湛えて行動していると言えよう。

しかしこれが Fagin 一味の盗賊団になると徹底した悪魔として終始している。そしてこれはまたその徹底さで Dickens の文学が達成している一つの頂点を示すものでもある。たとえば... I'd grind his skull under the iron heel of my boot into as many grains as there are hairs upon his head.(1) という様な言葉を口にする事のできる人間である。髪の数ほど小粒となるまで頭骸骨を踏みにじってじりじりに踏みにじってやると言うが如き言葉は既に人間の言葉とは言えない。Nancy の可憐さもその様な悪魔の中で自然に一層引立てられて来る。Rose 等心の美しい人達にすすめられて Nancy も Sikes の情婦という汚濁の世界から足を洗う様にと情誼を尽してすすめられるが, やはり泣く泣く男の所へ帰って来る。結局はしがない生活ではあっても, 又相手は大盗賊であっても今日までを共に過した男であってみればやはりその生活の中で自分なりの誠実を貫く事が自分にとっては本当の生き方ではないかと考えられるのである。情婦は情婦なりの誠実を貫く以外に, 今となっては方法も立たないのである。それにも拘らず情報の一部を善意の第三者に洩したというだけでその Nancy を忽ち殺害し得るのが Sikes である。その非道非情さは殺害を終えた直後の恐怖にみちた次

(1) *O. T.*, XLVII

の描写にも容易にうかがえる。

Once he threw a rug over it ; but it was worse to fancy the eyes, and imagine them moving towards him, than to see them glaring upward, as if watching the reflection of the pool of gore that quivered and danced in the sunlight on the ceiling.(1)

死骸になった Nancy にそこらのボロをかけてみるが，ボロの下で彼女の目がジロジロと見つめているのではないかと，それを想像する方が，実物をありのまま見る事より苦しいのである。やむなくボロを取除いて見据えるとそこらに溜った血のりに映えた太陽が天井にゆらめくのを死者の眼が見つめているという情景である。恐怖と戦慄に溢れたこの様な迫真力を持つ描写も Dickens の文学が果し得た一つの頂点を示すものであるが，その迫真力を生み得る筆力はそのまま悪魔を創造し得た能力と不可分である。概念としての悪魔ではなく，生きた悪魔のイメジである。

死人に追われる恐怖と焦燥は，Hamlet の墓堀りの場にも比較できる行商人 (vendor)(2) の陽気な場面と鮮かに対置されて強調され，偶然出くわした火事(3)に，わが心まで火事と燃えよとばかり狂奔して恐怖を燃えさからせ，或は無心な犬の恐怖(4)によって益々かき立てられる等， G. Greene 等に見られる冷静な心理分析の微妙さはないにしても，心理と，これに対する行動或は外界の動き等との対照によってその真実を鮮明に，力強く表現する方法は，既にこの小説でも完成されている。そして勧善懲悪はよし幼稚な大衆的方法であるとしても，その中にあってたとえば悪の様相を一つの極限に追いつめてこれを凝視しようとした徹底さは見落す事ができない。一般に単なる大衆小説家にすぎないとする評価が改めて考え直され再評価され始めている最近の傾向は勧善懲悪の面よりも後者を重視する傾向に負う所も多いであろう。

(1) *O. T.*, XLVIII (2) *ibid.* (3) *ibid.*

V　Dickens の征服と芸術

—— *Nicholas Nickleby*
—— *The Old Curiosity Shop*

The Pickwick Papers が終ったのは 1837 年十一月で，既に，*Oliver Twist* が発表され始めてから十ケ月間も並行して執筆された訳であるが，次の *Nicholas Nickleby* も翌 1838 年四月から始められている。*Oliver* は 1839 年三月まで，*Nicholas Nickleby* は十月まで続いているので，少くとも一ケ年は三者が並行して執筆された訳で，その精力的な健筆も驚嘆に値するが，*Nicholas Nickleby* の第一分冊の 15,000 部が忽ち売切れるほどの名声を確立していた事も事実である。第二回目の結婚記念日と Forster の誕生日を併せてこの出版を祝う幸福も持ち得たし，執筆の為に郊外 Twickenham に家を借り，夏には Kent の最東端 Broadstairs に執筆をかねて避暑するだけの経済的余力も持ち得るようになっていた。*The Pickwick Papers* の挿絵画家として志望した事から知った Thackeray とも次第に交りを深めてその小篇を世に問ってやる労も取れるだけの能力を持つに到り，後影響を強く受けた L. Hunt (1) 等とも足繁く交り始めていた。あまつさえ，1838 年七月には Athenaeum Club (2) の会員に推薦された。文人としての大きな光栄であったが，Thackeray が四十才，Browning が五十六才で推薦されている点などから考えても，二十六才の Dickens の有名さが想像できる。

(1) (1784-1859) Dickens より二十八年も年長で，Byron, Shelley, Keats 等の先輩として彼等を世に送り，一方では *The Examiner* その他の雑誌を自ら編集して journalist としても重きをなすと共に詩，戯曲，評論等あらゆる部門で活躍した。

(2) 1824年設立。一流の文人，科学者，芸術家を以て会員とする。

Nicholas Nickleby は *The Pickwick Papers* の陽気さと *Oliver Twist* の暗さを程よくまぜ合わせたという意味で一つの進歩を跡づける事ができる。しかし夫々徹底したすっきりした感じはそれだけに薄れている事も指摘されねばならない。

母と妹以外によるべのない Nicholas Nickleby は，金を儲ける以外に一切の理念を持ち合わせない叔父 Ralph Nickleby から York の Dotheboy Hall の助教の職を世話して貰うが，ここで散々苦労の挙句逃げ出して旅役者の一団に加わる等の苦労を経てロンドンに落着く。叔父は生来この青年を毛嫌いしていたが，York から連れ出した白痴の Smike 少年をかばい，妹の結婚に反対し，不幸な Madeline を恋する等なす事すべてが叔父の金儲けの為の奸計に齟齬するため窮地に追いこまれるが，最後には Nicholas の善意が勝利を占めるというのがその梗概である。

親や世人に見られぬ様に York の寒村に子供を吸収して，教育とは名ばかりで，食べる物も食べさせず，虐待と金儲けに専念する校長 Squeers (1) 氏は Fagin, Sikes と同様金銭の完全な虜で，人間性の微塵も持合わせない極悪人である。Dotheboy Hall (2) という立派な看板よろしく，c-l-e-a-n, clean, verb active, to make bright. w-i-n, win, d-e-r, der, winder (3) と単語を教えては直ちに窓の掃除を実行させる。これが「スペリング (spelling) と哲学 (philosophy)」の授業である。ここに送られた子供はあらん限りの残虐に苛められ餓えさせられる。Smikes 少年の様に白痴になる者もあれば，衰弱の極に達してろくろく歩けない者も珍くない。苛める Squeers と苛められる子供達の醸すその凄愴さは恐

(1) Wackford Squeers : IV–IX, XIII, XXXIV, XXXVIII, XXXIX, XLII, XLV, LVI, LVII, LIX, LX, LXV
(2) Do the boy ! という実行第一主義を理念に掲げたもの。
(3) *N. N.*, VIII

らく Dickens の描いた最も代表的な力強い描写の一つとして残り，その描写だけでもこの小説とは別に独立した存在価値が認められ，学校制度の改善に最も大きな働きを果した文献という史的価値も大きい。

しかしこの極悪人 Squeers 氏を除く他の悪人共は何がしかの意味で *Oliver Twist* より複雑化され深刻化されている。代表的なのは叔父の Ralph Nickleby で，'Riches are the only true sourse of happiness and power.'(1) という信念の上に，人間嫌いという懐疑性や，自分の行動に対する悔恨も持ち合わせ，兄の妻であった未亡人や美しいその娘等には後髪を引かれる思い(2)で次第に反抗的な Nicholas への憎しみに徹底し，悪の道に深入りしなければならなくなるという複雑さと深刻さを持っている。妻に仕立屋を営ませ，自分は頬ひげを自慢に贅沢三昧の生活にふける愉快な Mantalini 氏を見て，早く破綻が起きればよいがと希う Ralph は次の様に思索する。

All love —— bah! that I should use the cant of boys and girls —— is fleeting enough; though that which has its sole root in the admiration of a whiskered face like that of yonder baboon, perhaps lasts the longest, as it originates in the greater blindness and is fed by vanity.(3)

どうせ愛情とははかないもので，あの二人に破綻も遠くはないであろうが，待てよ，二人共愚かで虚栄が強く，相手の頬ひげに参る女であってみれば案外永続きするかも知れぬぞ，等という嫉妬，高慢，邪慳，皮肉等の入組んだ心配である。恋愛の真理を突き，更に人間の盲目さ，虚栄などに鋭い逆説的な諷刺のメスを加えて知識人 Ralph を浮彫りにするのである。

(1) *N. N.*, I (2) *ibid.*, XIX, XXVI (3) *ibid.*, XXXIV

総じて言える事は，その多様性，深刻性によってそれまでの平板な人間描写から次第に写実的な真実さを持たせようと心掛けているという事である。Dickens 自身もその序文で言っている様に主人公 Nicholas は完全無欠の理想人としてではなく，欠点も多く，失敗も繰返すいかにも青年らしい青年として描かれる事が念じられている。Madeline との恋(1)に於ても恋すべきか否かの煩悶が真剣に繰返えされる。叔父 Ralph を中心として展開される奸計もすべてが大規模であり必然性が強化されて，写実性，真実性という問題が強く意識されている事はそれまでの噺の国を脱却する意味で Dickens の小説の発達段階上に一つの転期を劃するものと言えよう。

それでいてこの小説では十八世紀の 'picaresque novel' の傾向が一方では強く押出されている点もその特長の一つとして考えられる。構成上では既に *The Pickwick Papers* 自体がその可能性を多分に持つものであった。'picaresque novel' の特長は予期しない事件が矢継早やに続くその面白さに興味が集中される事で，一般に悪漢小説と呼ばれるが，主人公は必ずしも悪漢でなくても事件が奇怪で意想外のものであれば，Gil Blas(2) の様に医学を修め宰相の秘書にまで栄達してよいし，Roderick Random(3) のように外科医として方々に転戦してよいのである。只大切な事は性格描写が背後に押しやられて事件そのものが前面に押出されて，興味深く続けばよい訳である。悪漢が好んで取材され，旅から旅への連続で終始するのもこのためである。旅行が重要な契機となる意味で *The Pickwick Papers* との関聯も考えられ，事実多分にその傾向もうかがわれるが，やはりこの作品では事件よりも人間という問題が究極的には強い。その意味では十九世紀的ピカレスクと呼ぶ事も不可能ではないが，*Nicholas*

(1) N. N., XL, XLVI (2) Le Sage: *Gil Blas* (1715-35); translated in English by Smollett, 1749
(3) T. G. Smollett: *Roderick Random* (1748)

Nickleby では，これが遡って十八世紀的な傾向を強く持つ面が多い。この小説でも Nicholas はロンドンから York へ，York からロンドンへ，そして Portsmouth へと，北へ南への旅が大規模に展開される。特に Portsmouth に本拠地を置く旅役者 Mr. Crummles (1) 一座に Nicholas が加わってからの生活，二十数名からなるこの田舎巡業の貧乏劇団の泣き笑いは，浮草生活の悲しみと喜びと，恋愛や駈落ちなど交えて人情譚的な絵巻となってピカレスク的な色彩を強く持つ理由となっている。後にロンドンを逃れて祖父と死地に到るまでの Nell (2) のさすらいの旅や Martin Chuzzlewit (3) のアメリカ冒険等，特に Nell が Mrs. Jarley (4) の蠟人形一座に加わってからの遍歴は Nicholas の経験に酷似しているが，前者ではその悲しみを強調する為のものであって，旅を旅として見つめる態度はなく，Martin の場合も旅は彼を賢明にする為の手段で，写実性の強い為にピカレスク的な遊びの余韻はほとんど見られない。

その様な特殊な傾向と同時に，出るべき Dickens の素質はこの作品で全部出揃っている事も否めない。

人生観とも芸術論とも言えるべきものが端的な形で示されている。Nicholas が参加していた Mr. Crummles の一座で，ある劇作家が，現代は既に Shakespeare をしのいでいる事を主張する (Human intellect has progressed since his time, is progressing, will progress.)。(5) 物質的進歩と精神的進歩とを混同する愚かさは後 *The Old Curiosity Shop* の女学校の校長 Miss Monflathers (6) に最も典型的に代表さ

(1) *N. N.*, XXII-XXV, XXIX, XXX, XLVIII
(2) *The Old Curiosity Shop*, XII 以降
(3) *Martin Chuzzlewit*, XII-XVII, XXI-XXIII, XXXIII-XXXV (4) *The Old Curiosity Shop*, XXVI-XXVIII, XXX-XXXII, XLII (5) *N. N.*, XLVIII (6) *The Old Curiosity Shop*, XXXI

れて愉快な諷刺の材料とされるが，本来 Dickens 自身がその様な精神的進歩を認めていない事は事実である。*Sketches by Boz* に於ても触れた様に，物質的進歩に目がくらんで人間精神は置去りにされ，却って後退するのではないかという疑惑や不安が Dickens にとっても将来大きな課題として残る。古いものへの愛着や，生命の尊重や，ありのままの人間性を大切にしようとする精神と別物ではない。だから Shakespeare より進んでいるという言葉を聞いても Nicholas はこれを打消して次の様な意味で Shakespeare を讃える。

... he brought within the magic circle of his genius, traditions peculiarly adapted for his purpose, and turned familiar things into constellations which should enlighten the world for ages...(1)

「伝統をわが薬籠中のものとし，平凡事を星座に高める」事，これが芸術の謂であり，Shakespeare の偉大さもそこに認められるべきであるというのである。今日も作家は多いが，雑多な要素を混然と取入れてこれを雑然と列べるだけで，たとえばそこに星座の秩序を持たせ得ないのでは無価値である事もつけ加えている。人智は進歩しないとする考え方は決して消極的な考え方とは言い得ないのであって，逆にそれ故にこそ進歩する物質世界にどの様な秩序を与えるべきかが問題となり，現実の渾沌を星座の高みにまで秩序づけようとする積極性が芸術の課題となるのである。

画家志望の或る女が The difficulties of Art are great.(2) と印象深い言葉を口にするが，それは恐らくそのまま Dickens 自身の告白でもあった筈で，青年 Nicholas の経験する波瀾万丈の現実にどの様な秩序を打建てる事ができるかが作家 Dickens の課題でもあり，爾後の作家生活を通じても絶えず Dickens を動かし続ける課題であった筈である。そし

(1) *N.N.*, XLVIII (2) *ibid.*, X

てたとえば Nicholas の遍歴を通して現実世界を，或は広くは十九世紀初頭のロンドンの雑沓を，星座の高みに掲げたという決論的な事も言える訳であるが，それとは別にこの芸術論は，やがては *Hard Times*(1) になってようやく展開される芸術論と併せて，数少い例の一つとなっている。

女性像，類型的に言えば，Nell,(2) Dora,(3) その他に結晶すべき天使の様な純粋無垢の乙女という理想像と，その他の女性像，これは総括的に言って大体好ましくない存在で，具体的にはいつまでも靴墨工場で働かせようとした自分の母の印象が最後まで Dickens に残した女性像と考えられるが，そうした対蹠的な二つの女性像もこの小説で明かにされる。前者は Nicholas が結婚すべき Madeline に見られるもので，女性の中に 'the smile of Heaven' を見，'the bright angels of a sinless world'(4) を見ようとする態度は Nell, Dora 等この型に属する女性と全く同様であり，又 Nicholas の母は後者の典型で，一見物分りはよい様で案外愚かで，感情はすべて発作的で，虚栄が強く，物欲が強い等好ましくない面を持つ女性の代表である。辛酸を経てやっと親子三人が水入らずの一家を構える事ができる様になった時，塀の上から隣の狂人がふと顔を出して母への恋情を洩らし,(5) 遂には屋根伝いに煙突を降りて来る(6)が，この狂人を容易に狂人と認める事ができず，真に自分に求愛しているのだと妄信し，又ようやく狂人である事は納得できても彼を発狂させた理由は自分のせいだと自惚れ又同時に親身に同情する様は，この狂人との対照で滑稽であると同時に，女性のかたくなな主観性と虚栄とを最もよく表現した場面の一つとなっている。叔

(1) *Hard Times*, Bk. I, III
(2) *The Old Curiosity Shop*
(3) *David Copperfield*
(4) *N. N.*, XLVI
(5) *ibid.*, XLI
(6) *ibid.*

父が見ぬいた様に，Mrs. Mantalini は夫の頬ひげが立派であると考えられる期間は夫婦関係を持続できるが，その頬ひげに魅力を失うと同時に夫婦関係も消滅する女性である。おのぼりの婆さんが Kingston で降ろしてくれる様御者に頼んで置いたが，何を感違いしたのか一，二哩も先から「あんたは降ろすのを忘れたんだ，もう Kingston は過ぎたのだから」(1) とわめき続けている。その婆さんの頑迷さに代表される女性である。しかしこの場合 Mrs. Nickleby には他の好ましからざる女性を扱う態度に見られない，何か他所々々しい態度，如何にも素材を素材のまま生の形で放り出した白々しい態度が明かである事を指摘しなければならない。つまり Dickens にとっては好ましからざる女性とはいっても二つのタイプが帰納できる訳で，Mrs. Mantalini やおのぼりの婆さんその他に見られる様な，ヒューモァやアイロニの対象となり得る女性，つまり Dickens の芸術論を借りて言えば，愚かであれば愚かなりに夫々芸術的な星座にまで高め得た女性と，Mrs. Nickleby に最も端的に現れている様に，生のままで放り出すだけで精一杯といった印象を残す女性という二種類が考えられる訳である。そして恐らく母をモデルとした女性といえば Mrs. Micawber(2) が最も完成された典型と云えるであろうが，Mrs. Nickleby と比較して言える事は，やはり Dickens の若さを何よりもはっきり暴露している事で，母のイメヂを充分に突離して客観的に眺めようとする態度が薄い事と，又それだけに，余程母のイメヂが Dickens の中で不快なものとして残っていた事が想像できる事である。

Mrs. Nickleby は母でありながら最初から Nicholas の意に添わない存在であり，不思議なほど Nicholas が逆境にあっても遠隔の地にあっても母子の精神的交渉が見られない。それどころか，元々叔父に依存しようとしたのは母の無反省

(1) *N. N.*, XXXII (2) *David Copperfield*

な短慮が原因であり，悪意こそないにしても，兄妹を逆境に陥れたのも母が原因となっている。謂わばこの小説の悲劇の張本人が生みの母であった訳である。従って兄妹は口にこそ出さないが，始終冷い態度でしか母に接し得ず，母は最後まで子供達の世界から孤立して居り，二人が幸福になってもこれと同調できず楯ずきながらその幸福からは取残されて，無知，短気，頑迷のまま終る形となっている。

後期の作品についても言える事であるが，父をモデルにしてたとえば Mr. Micawber や Mr. Dorrit (1) 等々傑物を創造し得たにも拘らず，女性一般特に母の面影を残す女性に関しては不思議なほど脆弱な女性像しか残していない。すぐれた男性は創造し得ながら，女性一般に関しては驚くほど創造力が鈍り，特にこの作品に於ける様に，明かにその背後に不快や怨恨さえも窺う事のできるという弱点を残しているものさえある。

Forster をはじめ多くの伝記についても言える事は，あれほどの浪費癖と借金の故に家族を不幸に陥れ，Dickens が独立してからも借金の為逮捕されたり，子供の顔を利用して出版社から多額の借金を繰返すので *Nicholas Nickleby* の印刷直前（1938年二月）には止むなく両親を英国西南端の Exeter の田舎に追放しなければならなかった程であるが，父を怨んだ形跡は之亦不思議なほどないという事である。Dickens は金銭問題については見苦しいほど几帳面でやかましく，両親の追放についてもその事が考えられるが，たとえば自分の経済力に頼りかかろうとする弟や両親などに対する突放した冷徹さはこの場合見られず，田舎に引込んでからも繰返す借金は払ってやるし，自分でも隠棲生活を見舞ってやったり，避暑地にも招き，最後には日刊新聞 *Daily News*(1846年発刊) を大々的に始めた時は，その職員に加えて原稿の整理等の能

(1) *Little Dorrit* (1855—57)

力を発揮する機会を与えた。

理想の女性像の原型としては，初恋の人 Maria Beadnell と，同居していた妻の妹 Mary Hogarth，その死後は更に妹の Georgina とがあった。Dickens が Beadnell を知ったのは十七才の時で，十八才の時は既に猛烈な恋愛に陥っていた。貧しい駈出しの記者では，高慢で一年々長でもあった Beadnell に容れられる筈がなく，簡単に却けられたが，初恋の想出は純粋な形で残り，晩年になっても，自分に全世界を教えてくれた (represented the whole world)(1) のがこの人であり，それ故にこそよく貧困を克服する力を与え，今日の名声にまで導いてくれる上での 'perpetual idea' となった事実を率直に告白している。その様な初恋の相手に対して，次に現れた Catherine Hogarth の場合は実に簡単に結婚へ進んだ。Catherine の父が自分の働く *Morning Chronicle* 社の先輩であった事も結婚を容易にした理由の一つであったろうが，知合った当初から Maria との恋愛を基準にしては考えられないほど事務的に事態が進展しているのは奇妙である。やがて晩年離婚を強いられる運命にある事を既に予告しているのかも知れないが，或は，身の程も知らず貧乏のどん底で求愛した Dickens の立場は既に一転して，輝かしい将来を約束されて，女性の足下に跪く必要がなくなっていたのであろうか。貧乏と速記術を征服し，画家も出版社も周囲のあらゆるものを完全に征服しなければやまない Dickens が，ここでも既に Catherine を完全に征服していた為に，美しい恋愛感情の跡が見られないのであろうか。結婚と同時に同居する様になった妻の妹 Mary が十七才で死んだのは 1837 年五月七日，*The Pickwick Papers* と *Oliver Twist* を同時に書き進めていた時の事であるが，暫くは筆も取り得ずその死を悼む痛々しいまでの Dickens には，Beadnell へ

(1) *Let.*, II, 628

の慕情が妻を素通りして Mary への愛情へと肩替りされている事実がうかがわれる。

... the light and life of our happy circle is gone—and such a blank created as we can never supply.(1)

I solemnly believe that so perfect a creature never breathed. I knew her inmost heart, and her real worth and values. She had not a fault.(2)

Words cannot describe ... the devoted attachment I bore her.(3)

等々彼女を悼む言葉は後々まで繰返される。六年過ぎても「心臓の鼓動と共に彼女が自分の中に息吹いている」(4)と告白し，十一年たっても 'This day 11 years poor dear Mary died.' (5) と忘れず，たとえばアメリカに旅し，或はゼノア (Genoa) に旅して，すばらしい幸福感に浸ると必ずと言ってよいほど彼女を回想している。彼女が最初に文学の上で完成されたのは Nell (6) であるが，たとえば *Barnaby Rudge* の Dolly Varden に，或は *Dombey and Son* の Florence に，*David Copperfield* の Agnes に，と受継がれて遂に最後まで，たとえば *Our Mutual Friend* の Johnny に到るまで初恋の Beadnell のイメジと交錯しながら Dickens の文学を動かし続ける一つのモティーフとなっているのである。

Weller 父子について，結婚しなければならぬという命題と，結婚すべきでないという命題との矛盾相剋が人生の悲劇の一つである事を述べたが，Dickens の場合，母として妻として接する現実の女性像と，理想の女性として若く消え去る女性像との矛盾相剋は生涯作家生活での一つの大きなテーマとし

(1) *Let.*, I, 112
(2) *ibid.*, I, 109
(3) *ibid.*, 120
(4) *ibid.*, 519 (1843)
(5) *ibid.*, II, 87
(6) *The Old Curiosity Shop*

て残る問題でもあった。

出版社は常に営利を目的とするけれども，作家の成長と切離しては考え得ない。Dickens が大作家となるまでには John Macrone, Chapman and Hall, Richard Bentley という三人の出版者が夫々に深い縁を持った。そして結局は Chapman and Hall を除いた二者は Dickens の犠牲にならなければならなかった。ここでもすべてを征服しなければ承知しない Dickens の強固な野心と意志力の犠牲にされた面も考えられるし，好意的に解釈すれば Dickens の成功が余りにも意想外であった為に，群小の出版社がこれと歩調を合わし得なかったという必然性も考えられる。

Chapman and Hall に薦められて *The Pickwick Papers* を書き始めた時の契約は十四ギニというから £20 に満たない。それが Sam Weller 登場の第四号を境に俄然人気を呼び始め，月給は £25 に増額された。第一号四百部発行のものが第五号では既に四万部発行と驚異的な増加を見せた。一周年を祝って £500 を贈られるし，十九回分が完成した1837年には契約通りの £750 以外に £2,000 以上が贈られたらしい。Chapman and Hall は £14,000 の売上げをしたと言われるから，この謝礼金も驚くには当らない。Seymour の絵を主に，Dickens の説明文を従にしたスポーツ記事という案は逆にされたが，少くとも Dickens の筆を利用しようとした Chapman and Hall には先見の明があった訳で，好運にも予想外に報いられる結果となった。

しかしそれ以前に Macrone はそれまでに発表された *Sketches* に新しい作品を書き加えて二冊に纒めて出版する事を提案している。纒め次第初版を £150 で買取る契約であった。作家生活に全精力を集中し，やがては今日の Dickens となる上でこの契約は非常に重大なものであった。これ程の多額を提供された事は，生涯始めての経験で，興奮した

Dickens は有頂天になって書きなぐった。1835 年から翌 36 年にかけての事である。旧作に手を加え，新しい小篇(1)の傑作が書き加えられた。そして Macrone は専ら激励の役を果した。*The Pickwick Papers* を書き始めたのもその勢に駆られての事であった。結婚資金も Macrone に調達して貰った。結婚早々五月には Macrone は今度は小説を書く様に依頼して来た。£200 の契約であったが，年末を期限に Dickens は承諾した。Richard Bentley が別の小説で依頼に来たのはそれから数週間後の事であった。しかし Macrone との契約を解約した形跡はないのに，それから二，三ケ月後には Dickens は Bentley の申出に応じた。題も未定の小説を期限なしの £400 で出版するという契約である。二冊目の *Sketches* 出版の事が残っているので，それを果せば Macrone との新しい小説の約束は不履行になっても許して貰えるものと Dickens が早合点したのであろうか。ともあれ金銭的な勘定高さに関して Dickens に抜目がなかった事は明かで，*The Pickwick Papers* の売行が激増したので八月には Bentley に対して £400 の契約を £500 に増額する様臆面もなく申出ている。リューマチという病気のせいもあったらしいが，年末になっても第二冊目の *Sketches* が完成しなかったのは当然で，既にその前 Bentley とは更に別の契約を交わしていた。Bentley が計画していた月刊雑誌 *Bentley's Miscellany* の編集に当る仕事であった。八月に交わした小説の契約とは全然別に，給料 £20，別に毎月十六頁分の小説を書いて 20 ギニ，計 £40 の月給という条件で同年十一月四日に契約した。早速 *Morning Chronicle* に辞表を一方的に郵送し，今迄厄介になった Easthope を怒らせたのもこの時の事である。確かに一介の記者から本格的な作家として独

(1) A Visit to Newgate, Sentiment, The Black Veil, The Great Winglebury Duel, etc.

立した契機としては意義深い事件であるとしても，人間的には必ずしも賛成できる行為ではなかった。Macrone が憤慨したのも当然であるが，同時に Macrone の側の手落ちとも考えられない訳ではない。それは八月 Bentley と小説の契約を取交わした事は承知しながらその事には一言も触れずに放置していた事である。それで Dickens が，解約してくれたものと早合点した事は充分あり得る。相手はともあれ Bentley との十一月の契約に Macrone は憤慨して Dickens, Bentley 両人に激しい抗議文を送った。再三の折衝を経て *Sketches* 二冊を £250 で Macrone に売渡す話にもなったが，結局は Dickens が折れてこれを £100 で売渡す事によって自分の不履行の代償とした。翌年には Chapman and Hall を動かせてその版権を £2,250 で買取って貰ったが，Macrone はその直後急死した。残った未亡人の為には尽力を惜まなかったが，両者の何れにとっても後味の悪い不愉快な事件であった。

同時に Bentley との契約にも矛盾があった。*Bentley's Miscellany* の編集と，それに毎月小説を載せるという1836年末の約束と，それを遡る八月に，£500 で何か小説を書くという契約とが結果的には二重に行われていた訳で，翌37年になって *Miscellany* に *Oliver Twist* を連載し始めてみると，この小説で両方の契約が履行される事になるか否かの問題で正面衝突した。Macrone とのいざこざで仲介に入ったのは Forster であったが，Bentley の場合も彼の仲介で一応はそのまま *Oliver Twist* を続け，別の小説 *Barnaby Rudge* を翌1838年十月 £700 で Bentley に渡すという妥協案ができたがこれも結局無駄に終った。事実 *Oliver Twist* を執筆しながら，一方では Chapman and Hall との約束で *Nicholas Nickleby* を現に執筆して居り，これに加えて *Barnaby Rudge* を書く等とは全く不可能な話である。だから Dickens

の方でもこの小説を延期する事で再三の変更を申入れねばならず，Bentley の方でも嫌々これに応じながら，たとえば39年二月には次の様な妥協案にまで漕ぎつける事ができた。*Barnaby Rudge* の期限を 1840 年一月一日とし，Bentley は即金 £2,000，発行部数一万部を越えれば更に £1,000，一万五千部を越えれば£1,000を支払うという条件である。僅か二年前にはこの小説をめぐって Bentley は£500を約束していたが，Dickens がどの様な飛躍を行いつつあるかを最も端的に物語る数字でもあろう。しかしそれにも拘らず Dickens はこれに承服する事ができなかった。一度は妥協しながらも，相手が不当に利益を得るとか，不当に自分の名前を利用するとか，*Miscellany* の編集権を委嘱しながらもこれを認めない等と Dickens の方からの捨鉢的な紛争が絶えず，遂に Bentley は完全にねぢ伏せられた形で降参しなければならなかった。理論的にも法的にも，又義理人情の面から考えても当然 Bentley には訴えるべき手段は多かった筈であるし，又周囲の者も等しく Dickens の非を認め非難しようとしたが，恐らく Bentley は将来の事と裁判にまつわる経費の事とを考えたのであろう。*Oliver Twist* の版権と約束の小説等一切を£1,500で買取って貰う条件で黙して引下らねばならなかった。

驚異的な飛躍の過程にあった Dickens にとっては事を荒げれば荒げるだけ稼ぎ得たという事が結果的には指摘される。しかし反面その様な自分の飛躍に乗じて出版社も予想外の利益を稼ぎ得たというのも事実である。ともあれどちらがより正しいか，より強かったか等の詮索よりも，これら一連の事件はむしろ不可避的な不幸事であった事を考えるべきであろう。一介の記者が僅か二，三年にして最大の文学者の一人になり得たという史上未曾有の事件を中心として考える時，この様な犠牲はむしろ必然であるかも知れない。世人を征

服した Dickens は，再び出版社をも傲然と征服したのである。勿論金銭問題に関して勘定高いとか，或は好意に報いるに好意を以てしなかったとか，常識的な様々の基準を当嵌めて判断する事も容易であるが，二十八才の青年 Dickens に見られる意志力の凄じさには何か異質なものが感じられる。*Sketches, The Pickwick Papers, Oliver Twist, Nicholas Nickleby* という作品系列からも既にその事は明かであるが，この事件を契機に Chapman and Hall だけが版元になった事はそれだけ見苦しい紛争などの世事を離れて Dickens を純粋に創作一本に集中させる事ができた。

この様な見苦しい社会的な紛争に続いて書き上げられたのが *The Old Curiosity Shop* ではあったが，この作品にはその様な雑音的な後味の微塵も残していない。むしろ純粋に創作一本に集中する事は，それだけ作品の純度を高める事であり，それだけにこの作品を境に Dickens は創作に伴う懊悩の虜となり始めている。今までの作品は若さにまかせて有頂天に書きなぐって生れたものと言ってもよかった。書く事に喜びを感じ，愉しみながら天才のままを吐露して自らできた作品と言ってよい。

しかし意識的になると同時に創作の懊悩がはじまる。徹頭徹尾苦しみながら書きあげた跡が歴然としている。しかしその懊悩とは，純度を高める為のものであって，今この作品で Dickens が追求しようとしているのは三年前に死んだ Mary を天使として芸術的に完成する事であった。感傷に陥りがちな追憶を，純度を高めた感情で客観化する事であった。その様な制作意欲に駆られれば駆られるだけ，意識の度合を増し，創作の苦悩に益々足をさらわれる結果となった。

物語の仕組は簡単である。骨董屋を営む祖父は借金の為高利貸 Mr. Quilp の術策に陥って店まで乗取られる。祖父は一

獲千金を狙って賭博をするが借財は嵩む一方で，たまりかねた Nell は祖父を連れて放浪の旅に出る。そして結局は様々の辛酸を経て，二人は死ぬという哀れな物語である。幼時住んだ Rochester の本通には昔懐しい Guild Hall が建って居り，近くの Corn Exchange にはでかい大時計があった。この二つの想い出を結びつけて，Guild Hall の大時計の抽出から Master Humphrey なる人物が古文書を取出し，綴られた物語や随筆風の読物を読者に披露しようというのが原題 *Master Humphrey's Clock* の端緒であった。しかし予期した反響を呼ばなかった事と，骨董屋の祖父が夜の街を悄然彷徨するシーン(1)あたりから自然 Nell という少女を中心とする物語に変更する決意をしたらしく，現在の第一章が場違いの雰囲気を持っているのはその為である。

従来の喜劇的なメロドラマに新しくペーソスを加え，Nell という純情な乙女の哀れな物語を綴ろうとした野心作であったが，それは同時に Mary に対する追憶を思いのまま歌いあげる事でもあった。そしてその様な個人感情が一般世人の共感を呼び得るか否かという疑問も彼を苦しめる大きな問題であった。

Dickens の生涯に亘る作家経験についても言えるが，文学史上にもこの小説ほど大きな反響を呼び，世をあげての興奮と嗚咽の坩堝に陥れた事例はないであろう。Nell の遍歴が進展するにつれて，十万部，二十万部と毎月の発行部数が増加した。アメリカ通いの蒸汽船が新刊を乗せて New York の埠頭に着くと群衆が押寄せて "Is Little Nell dead?" と我先きに乗客に大声で尋ねた等という伝説的な事実さえ伝えられている。当時の文人知識人でこの小説に対する讃辞を残していない人も珍しい。最も批判的であった Carlyle でさえも 'noble Dickens' の称号を惜気もなく与える様になった

(1) *The Old Curiosity Shop*, I

し，Forster, Macready, D. O'Connell, Lord Jefferey, 等々人前もなく感激したり泣崩れたり，様々の逸話を残している。

しかしこの様なペーソスや感傷を盛った物語に感激し，或はその様な感情を‘noble’とさえ呼ぶという態度と，たとえば今世紀になってそれは最も端的に現れたが A. Huxley[1] の様にこれを卑俗（vulgar）と呼ぶ態度との対立はどの様に理解すべきであろうか。

前述の様に物語自体は極めて簡単である。雑多の人物が，善玉，悪玉の間を往復する。ろう人形（waxwork）の見世物師 Mrs. Jarley, 女学校の校長 Miss Monflathers, 軽業師，犬使い‘Punch’の興業師，賭賭師等々である。これらを中にして，Mr. Quilp を中心とする Sampson Brass とその妹 Sally, Frederick Trent 等の形成する悪玉の世界と，Nell を中心として祖父，貧しい父無児の Kit とその母，恋人の Barbara, 校長 Mr. Marton, Dick Swiveller 等々の形成する善玉の世界とが対立している訳である。

これはたしかに雑多の世界と言えようが，それにも拘らず，単に雑多というだけでは割切れない何物か，或は‘variety’に対して‘plurality’と呼ぶ事ができるかも知れないが，単なる雑多の域を越えた結晶物に似た一つの統一的な力が一筋貫かれている事が指摘されるであろう。

雑多の世界を最もよく代表しているのは蠟人形（wax-work）である。貴族，実在の人物，伝説の人物，架空の人物等々，大衆の嗜好に投じ好奇心の対象となる人物を選んで，これを等身大の蠟人形に仕立てて，町から町へキャラバン（caravan）で巡回しながら見世物に出す興行物の一つである。年恰好五十位の Mrs. Jarley[2] なるあやしげな女性が，助手と車夫二人を連れて旅を続け，途中 Nell と祖父はこの

(1) A. Huxley: *Vulgarity in Literature*(1930)
(2) *O. C. S.*, XXVI-XXIX, XXX, XXXII, XLVII

一座に加わって暫く生計を得ることになっている。この一座のろう人形は King George the Third, Mary Queen of Scots, 勇将 Mr. Pitt, 名道化役者 Mr. Grimaldi 等歴史上の人物をはじめ，聞くも哀れな Maid of Honor, 十四人の妻の足をくすぐり殺したと伝えられる大罪人 Jasper Packlemerton その他畸人，野獣に育てられた子供等々。宿屋の広間でも公会堂でも何処にでもこれらを陳列して入場料を取る。入口で客を集める Mrs. Jarley の言葉は実に名文句[1]で，駄洒落やパロディ (parody) 等も利用してちょっぴり文学的な所も見せる。人が集ると今度は説明役に回る。鞭で指しながら歌う様な名調子が流れる——

"That is an unfortunate Maid of Honor in the Time of Queen Elizabeth, who died from pricking her finger in consequence of working upon a Sunday. Observe the blood which is trickling from her finger; also the gold-eyed needle of the period, with which she is at work."[2]

学校の子供が団体で来ると同じ人形が別物に早変りする。Mr. Grimaldi は文法書執筆中の Mr. L. Murray に，Pitt は詩人 Cowper に，Mary Queen of Scots は Lord Byron[3] に等と変って，子供はその説明に感激しては泣き，拍手を送るという仕組である。

Mrs. Jarley は心憎いまでに大衆の心理を摑んで金儲けするが，同時に結局は大衆とはその様なものであると言ってしまう事もできる。

... all the ladies and all the gentlemen were looking intensely nowhere, and staring with extraordinary earnestness at nothing.[4]

(1) *ibid.*, XXVII (2) *ibid.*, XXVIII (3) *ibid.*, XXIX
(4) *ibid.*, XXVIII

感激して何かを凝視しているつもりになっているのだが，実は空にすぎないというのは，恐ろしい事実には違いないが，それが人間の実態であるかも知れない。

ついでではあるが無学文盲の Mrs. Jarley は次の様な人生観も吐露する——

I won't go so far as to say that I've seen waxwork quite like life, but I've certainly seen some life that was exactly like waxwork. (1)

「蠟人形が人生を模倣している等とまでは言えぬにしても，時に人生が蠟人形を模倣している事がある」という皮肉な芸術論は確かに一つの真理を持っている。芸術は人生を模倣するという Aristotle を通り越して，人生が芸術を模倣するという真理を，人間共への侮蔑をまじえながら吐露した名言である。同時にその面にも大衆の実態が考えられる。貴人を眼前にしてその物語を聞いて自分まで貴人になった気持になり，針仕事に追われて指先きを傷つけ傷つけ遂には死んだ孝女を，眼前に見ている気持になって涙するというのが蠟人形を見る人間の真情でもある。

しかし一度瞞されたことに気付くや否や，頑として二度と振り返ろうとしないのも大衆である。欺かれたと知った以上は，「大陸の貴族歴訪の為の出発をまげて一週間延期して続演します」(2) 等という嘘をいくら列べても二度と欺かれる事はない。Mrs. Jarley も認める如く大衆 (general public) (3) は刺戟を求めると同時に，啓蒙され (enlightened) て居り，識別力を持つ (discerning) ものでもある。そして，ここで言える事は，蠟人形という雑多の世界で世人の注目を浴びようとした Mrs. Jarley は失敗に終ったのに対して，同じ様なヴァライエティに富んだ世界を披露しながら何故 Dickens

(1) *O. C. S.*, XXVIII (2) *ibid.*, XXXII (3) *ibid.*

は成功する事ができたかという問題である。たしかにこの小説をはじめ Dickens の小説はそのすべてを雑多の世界と評する事もできる。十九世紀前半の現実がヴァライエティの形で展開されているからである。蠟人形もその十九世紀前半の現実を最もよく象徴する典型である。それにも拘らず単にこれを雑多というだけでは済まされぬ何物か，雑多を越えた何物かが貫いて存在するのである。

その様な秘密が Dickens の文学の力となって今日までの生命力を維持し続けている理由にもなっているのであろうが，たとえば次の様な小さな例の中にもその力の一端はうかがい得ないであろうか。

Mrs. Jarley は旅先きで Nell を遣いに出し，女学校を経営する Miss Monflathers の所へ行って女の子供に wax-work を見せる様勧誘させる。この Miss Monflathers は Mr. Squeers ほど非道ではないが，当時の馬鹿げた教育思想を体現している。「睡眠状態にある天賦を目覚まし，社会環境が与える悪い習慣から離乳させる(to wean)」(1) という理念と，「金持には本と遊びを，貧乏人には仕事仕事を」といった非人間的な考え方を何の不都合もなく共存させている。だから金持の子は下にも置かせない鄭重な扱いをするが，貧乏人の子供は歯牙にもかけず虐待してはばからない。Nell は 'waxwork-girl' であるから，'wicked little child'(2) であり，これに同情する子供はすべて 'vulgar-minded girl' になるのである。だから蠟人形などもっての外で，二度と勧誘でもしようものなら，警察に言って Mrs. Jarley を足枷 (stocks) の罪でも苦行の罪 (penance in a stocks) にでも問うてやるし，Nell は踏車 (treadmill) の罪にしてやると嚇して帰す。

(1) *O. C. S.*, XXXI (2) *ibid.*

これを聞いた Mrs. Jarley は怒髪天をつく怒り様である。あれこれ考えてみるが復讐の方法は容易に見つからない。そこで一計を案じた。酒瓶をとり出すと，ドラムの上にコップを列べ，助手と車夫に囲んで坐らせると，Miss Monflathers の言葉を一語一語嚙みしめる様に数回繰返えして聞かせた。自暴自棄になって酒でも飲みなさいとみんなに飲ませると，笑って泣いて，自分でも飲むと，笑って泣いて，又飲み（... she begged them in a kind of deep despair to drink; then laughed, then cried, then took a little sip herself, then laughed and cried again, and took a little more...）続けた。(1) これが繰返されると奇妙な事に，最初はやたら流れていた涙が次第に減り，笑いの方は次第に増えて来るのである。そして遂にはどんなに笑っても笑い切れないほど Miss Monflathers が可笑しく見えて来て笑いがとまらぬ状態になる。怨恨（vexation）の対象であった相手が，嘲笑と愚劣さ（sheer ridicule and absurdity）の張本人に見えて来るのである。何を怒っているのか，結局は話の行きがかりにすぎないではないか...

"It's only talking, when all is said and done, and if she talks of me in the stocks, why I can talk of her in the stocks, which is a good deal funnier if we come to that. Lord, what *does* it matter, after all!" (2)

ハタと思い当るのである。忽然と悟りを開いた境地である。見世物師である事を忘れて Mrs. Jarley が真裸の人間に立返った姿と言ってもよい。ヴァライエティを陳列してそのヴァライエティになり切っていた人間が，単なるヴァライエティとしての立場でなく，相手が足枷に入れると言うならこちらだって相手を足枷に入れると言ってやればいいではないかと対等の立場の人間に立返った姿である。泣いたりわめい

(1) *O. C. S.*, XXXII (2) *ibid.*

たり，たしかにこの婆さんは騒々しい。理性的な思考方法など一切無縁の女の行動であるからには騒々しい事だけは我慢しなければならないが，しかし本来の人間に立返える為であればそれも喜んで許してやれるであろう。ましてや相手を許そうとするキリスト教的な寛容の精神を持つに到るのだから尚更歓迎してやらねばならない。雑多雑音の世界に真実の人間性がひらめくと言ってよい。

この小説には逆立ちの上手な Tom Scott[1] なる少年がいて，腹を立てても口惜くても嬉くてもその都度逆立ち (standing upon his head) をするか，時間が許さなければ宙返り ('summerset') をしなければ承知できないという奇癖を持っている。Mrs. Jarley にとって泣きわめく事が一つの結論に到着する方法であったと同様，この少年には逆立ちする事が感情の唯一の吐口となっている。人間が意識とか感情とかを超越して，純粋に行動するだけの動物に還元されて来ると，たとえば次の様な鬼気迫る不気味な表現にもなる。仕えている高利貸 Mr. Quilp に殴られ蹴飛ばされて家から闇夜に放り出された時の描写である。

... Tom immediately walked upon his hands to the window, and if the expression be allowable —— looked in with his shoes: besides rattling his feet upon the glass like a Banshee upside down.[2]

恨み骨髄に徹するとでもいうべきか，家人の死を伝える妖魔 Banshee と化して靴が不気味に闇夜から覗き込むのである。Mr. Quilp も同様行動に狂奔する人間である。愉快になれば涙がボロボロ流れるまで笑いこけ,[3] ふと想い出しては甲高い叫び声 (shrill scream) を立て，時には手足をねじ曲げ，顔をひん曲げ (many distortions of limb and

(1) *O. C. S.*, IV-VI, XI, XIII, XXVII, XLIX-LI, LXVII, LXXIII
(2) *ibid.*, LXII (3) *ibid.*, XXXIX

feature)[1] それでも堪らなくなるといきなり大地に身を投げつけて叫びながら転げ回る (throwing himself upon the ground, actually screamed and rolled about...)[2] (... rolled upon the ground...)[3] 等という Quilp の行動は実は驚くべき事にすべて喜びの情 (delight, pleasure, enjoyment) にかられた時に見られるものである。しかも彼が喜びを感じるのは弱い者を苛める時，復讐する時に限られている為に Quilp のイメヂの純度が高められる。Where I hate I bite.[4] という非人間の表現が真実性を以て迫るのである。

これらの例はすべてカタルシス (catharsis) の過程の表現と解する事ができる。夫々特有の方法で Mrs. Jarley は彼女なりの真実に，Tom は Tom なりの自己表現に，Mr. Quilp は世にも非道な悪鬼の本性を，と夫々のカタルシスの方法によって到達している訳である。

同じ事が作家 Dickens の側にも見られる。

Forster その他への手紙によると既にその懊悩は執筆前から始まり，執筆と共に益々その激しさを加えて行ったようである。

'I am utterly lost in misery and can do nothing. I have been reading Oliver, Pickwick and Nickleby to get my thoughts together for the new effort, but all in vain...'[5]

'It's now four o'clock and I have been at work since half past eight. I have really dried myself up into a condition which would almost justify me in pitching off the cliff, head first—but I must get richer

(1) *ibid.*, L
(2) *ibid.*, XXI
(3) *ibid.*, LXI
(4) *ibid.*, LXVII
(5) *Let.*, II, Forster II, VIII

before I indulge in a crowning luxury.' (1)

'I am as bad as Miss Squeers ... screaming out loud all the time I write.' (2)

'You can't imagine (gravely I write and speak) how exhausted I am today with yesterday's labours. I went to bed last night utterly dispirited and this morning I am unrefreshed and miserable. I don't know what to do with myself...' (3)

'The difficulty has been tremendous — the anguish unspeakable.(4)

Nell を理想化する事によって死んだ Mary を永遠のものとしようとする意図は最初から明かで，物語の結末も 'happy-ending' を考えていたが，Forster の指示に従ってこれを死なさねばならなくなった時の Dickens の苦悩と悲嘆は想像を絶するまでに強められている。

... but I am the wretchedest of the wretched. It casts the most horrible shadow upon me, and it is as much as I can do to keep moving at all. I tremble to approach the place a great deal more than Kit ; a great deal more than Mr. Garland ; a great deal more than the Single Gentleman. I shan't recover it for a long time. Nobody will miss her like I shall. It is such a very painful thing to me, that I really cannot express my sorrow. Old wounds bleed afresh when I only think of the way of doing it : what the actual doing it will be, God knows. I can't preach to myself the schoolmaster's consolation, though I try. Dear Mary died

(1) *ibid.*, (to Forster, June 17, 40)

(2) *ibid.*, (to Chapman and Hall, Oct. 2, 40)

(3) *ibid.*, (to Forster, Oct. 40) (4) *ibid.*, (Nov. 12, 40)

yesterday, when I think of this sad story.[1]

霊魂は不滅であり，死人の魂は心正しき者と共に絶えず現世に残ってこれを勇気づけ，地上を天国にまで美化しようとする我々の努力に協力してくれるという教師 (schoolmaster) の信仰[2]はこの小説全体を貫く大きなテーマの一つではあるが，その様な理想主義的論理と信仰を越えた更に深い本能的な場所で，Mary の，やがては Nell の，死という問題が Dickens を無限の悲嘆と苦悩に駆り立てているのである。この小説の挿絵を描いた画家 G. Cattermole に最後の場面を説明しながら感極まって泣き崩れると ... I am breaking my heart over this story ... (Dec. 22, 40) と洩したと伝えられている。そして完結した時も，勝者の喜びはおろか，傷つける者の悲しみ以外は意識できなかった様である。

It makes me very melancholy to think that all these people are lost to me for ever, and I feel as if I never could become attached to any new set of characters.[3]

この様な絶望的な苦しみと悲しみを経験しながら描きあげられたのが Nell の映像である。まさしく慟哭しながら書いたという表現がふさわしい。Forster もこれほど苦しんだ例を知らないと云う。たしかに一方では感傷に堕し，調子に乗っては弱強調 (iambus) の形式を用いてペーソスの過剰を制御しようとした形跡もあるがそれらすべてが成功しているとは言えない。しかしそれ以上に Dickens の執拗なまでに周到な構想力が Mr. Quilp, Brass 兄妹等の悪玉の構成する劇的な世界に，Swiveller 等によって体現されている底ぬけの楽天

(1) Forster, XII, *Let.*, II (to Forster, Jan. 7, 41)
(2) *O.C.S.*, LV
(3) Forster, XII, *Let.*, II (to Forster, Jan. 17, 4. A. M., 41)

観などを適度にない合せて，一面ではすぐれた‘picaresque novel’の形態を築くと同時に，Nell を本筋とする‘novel of sentiment’としても，その周到さと謂わば先述のカタルシスの過程によって，単なるお涙頂載式の低俗さから救っている事が認められねばならぬであろう。たしかに Nell は社会的には最下層に突落され，完全な乞食になり果てている筈であるが，その様な下層の階級意識をはるかに越えて，たとえばこの場合も Nell の世界を星座の高みに高めようとする Dickens の意図は報いられている事を認めなければならぬであろう。創作に伴う苦悩はその経験に他ならず，Dickens 自身が，たとえば Mrs. Jarley の様に苦悩のカタルシスを通じて感傷的な Nell の世界を星座の高みに高めているのである。

Brass 兄妹の事務所，或は Mrs. Quilp の死場所一つの選定にも並々ならぬ努力や踏査を惜まなかった周到さは Nell の場合にもうかがわれる。

流浪の途中で出会った Miss Edward[1] とその姉——これは Nell の生き写しとも称すべき姉妹で，天涯孤独の生活を逆境に負けずお互が慰め合い，励まし合いながら生きているが，この二人が Nell に異常な共感を感じさせ，同時に生きる喜びや慰めを与え，孤独な境涯が却って，自然に抱かれ自然と共にある（companionship in Nature）という平和な，なごやかな東洋的な悟りに近い心境にまで彼女を高める。そしてこれに勇気づけられた Nell に，例えばまさに消えようとする灯が瞬間ふと明るく燃え立つかの如く，疲れ果てた旅路の果てに，漸く牧歌的なむしろ崇高美をさえ湛えた平和そのものの生活が待っていたとしても何等怪しむに足りない。その理想境で彼女を待っていた人が嘗て旅路で偶然出会った校長であったとしても，又 Nell の祖父と因縁ある物語以前

(1) *O. C. S.*, XXXI, XXXII, XLII

の知人であったとしても，その様な偶然的な辻褄合わせ以上に，彼女を平和な悟り切った境地で死なせたいと希う情熱の方が Dickens にとっては重大な問題であったと云えるであろう。彼女を平安な境地で死なせたいと希う感傷が構成の破綻を補ってあまりあるとも言えるし，或は数々の構成上の破綻にも拘らず，それ以上に彼女の静かな往生を用意する plot が本筋となってこの小説を貫いていると言ってよい。

やがてその様な崇高さをさえ湛えた，平和そのものの心境は，彼女の最後の仮の住いで附近の人々の限りない同情と尊敬をかち得る。特に兄 Willy を失った一人の孤児が彼女に傾けるひたむきな愛情と慕情は抒情的な美しさを湛えて完成されている。

... they say that you will be an angel before the birds sing again. But you won't be, will you? Don't leave us, Nell, though the sky is bright. Do not leave us! (1)

これにはじまる彼の切々たる哀訴は天国に住む天使と美しい Nell とが詩的な想像力に溶け合って，この少年にとってはもはやかけ替のない絶対的な存在にまで高められている。死にはしないと Nell が云い聞かせても不安な彼は彼女の家を終日終夜訪れては戸外を徘徊し続け，天使の様なあどけないイメジを読者の脳裏に刻み込む。

Willy went away, to join them (=*angels*); but if he had known how I should miss him in our little bed at night, he never would have left me, I am sure.(2)

などという言葉には，弱強調のリズムや，美化するための誇張や技巧が加えられすぎているかも知れないが，Nell に天使になられては淋しいから死なせたくないと希うこの少年のひたむきな慕情が真実である事に間違いはない。

(1) *O. C. S.*, LV (2) *ibid.*

Nell の死を取囲く最後の登場人物は彼女を温く迎え，人間の愛情の尊さや死の意味を教えてくれる教師と sexton, それにロンドンから駆けつけた Single Gentleman（実は Nell の祖父の弟）等，謂わば死の用意をする役目しか持たない身寄りの大人以外はすべて子供の世界によって構成されている。旅立つ前に Nell が置いて行ってくれた小鳥を持ってロンドンから遥々駆けつけたのも彼女に憧れてやまない純真無垢の少年 Kit であってみればその行動が感傷的であると誹謗するにも当らないであろう。彼女の臨終につき纏う想念は旅でふとすれ違った貧しくはあるがこの上なく心の美しい二人の姉妹であり，彼女に慕情を燃やしてやまない孤独な少年であり，昔なじみの Kit であった。少女 Nell の死を構成するにふさわしい人物といえるであろうし，死に対する人間感情をできるだけ純粋な形で捕えようとする Dickens の用意のほどを窺うに充分である。

この Nell の死を，例えば Andersen のお伽噺と分つものも彼女の安らかな死を用意し，或は死を惜しむ感動に支えられた周到な構成が厳然と存在するからに他ならない。その感動は彼女を溺愛する祖父を狂人に仕立てるに及んで，最高潮の表現を得ていると言える。

孫の死を信ずる事ができず，狂乱の果ては，She is sleeping soundly.(1) という一事をひたすら信じ，居列ぶ人々に "We will not wake her." と諭しながら，天使や小鳥と戯れる Nell の姿を空想し，或は後年 Dickens が好んで朗読に用いた次の様な妄想に駆られる。

"Why dost thou lie so idle there, dear Nell, when there are bright red berries out of doors waiting for thee to pluck them! Why dost thou lie so idle there, when thy little friends come creeping to the door,

(1) *O. C. S.*, LXXI

crying 'where is Nell, sweet Nell?' and sob, and weep, because they do not see thee..." (1)

雪に埋れた真夜中の戸外と陽を浴びた春の戸外の対照が，再び弱強調と，繰返しとによって，狂的な現実となって読者を打つ。謂わば King Lear の狂乱にも近似した悲劇性をさえ湛えたこの現実性が，Andersen のお伽噺と本質的な差異を生む所以でもあろう。

Nell の流浪の旅には余りにも彼女を痛めつける条件が揃いすぎている事も，お涙頂戴式の安易な物語と見紛わせる理由になるであろう。そしてこれと対蹠的に彼女は余りにも純真無垢で理想的な女性像に仕立てられすぎて居り，又その死も美しすぎる，等々，Dickens の楽天性その他に起因する欠点も多く数え上げられるであろう。しかしそれらの欠点にも拘らず，人の死を惜しみ，悲しむ気持は恐らく時代と国境を超越してヒューマニズムの根幹をなすものであり，これを正面から臆せず描き上げ得た Dickens の情熱と筆力は，多くの欠点を補って余りあると言ってよいであろう。

少くとも Dickens にとっては，感傷とは決して女々しい感傷に堕した，むしろ卑下するに足る感情の謂ではなかった。*The Old Curiosity Shop* は 'novel of sentiment' と 'picaresque novel' とが微妙な調和を保ち得た稀有の作品と呼び得ようが，併しこの二つの要素は Dickens にとって元来異質のものではあり得なかったのではないであろうか。何れの型の小説も大らかな人間本来の感傷にしっかり足を踏み構えているからである。ただ，前者が謂わば正面向きに感傷に対しているのに対して，後者は，うしろ向きの姿勢で感傷に対しているという差異が認められるにすぎない。前者が人間の感情をそのまま描こうとするのに対して，後者はこれを外的な行動の写生を通して描こうとする態度といっ

(1) *O.C.S.*, LXXI

てよい。先述した Mrs. Jarley や Mr. Quilp や逆立ちの Tom 等の描写はその好例である。行動に視点が集中されすぎると，これが誇張されて「どさ回り」になりメロドラマになる事情も推察するに難くないし，Dickens の創造した多くの人物が戯画（caricature）になると評される理由の一端も発見できる。

いずれにせよ，この小説で考えられる事はあらゆる説明や詮索を越えた所で，人間の行動を行動自体として見つめようとし，人間感情を感情自体として見つめようとする態度が貫かれている事である。その意味では感情も行動も Dickens にとっては，夫々人間表現の為の最終単位として同次元に位していた筈である。それは，健康そのものの人間像の表現でこそあれ，彼自身としては感傷的に流れたり，卑俗に堕す余裕などを持ち合していないギリギリの線でもある。逆立ちして靴で覗き込んだ Tom Scott の行動に，何等かの説明や分析を加えたならば，行動が行動でなくなるのと同様，Nell の死を悲しむ感傷に，これ以上の誇張や説明や分析を加えたならば，その死はもはや死でなくなるであろう可能性を多分に孕んだ感傷であった。死を惜しみ悲しむ感傷がむしろ科学の対象としての死の問題に肩替りするのは現代の傾向と云えるが，死を「考える」前に死を「感じる」事が少くとも Dickens にとっては先決問題であった筈である。現代的な眼を以てすればその様な前提を考慮に入れてもやはりまだ結果的には確かに多くの欠陥を持つ Nell の映像ではあるが，しかし，その様な切迫した，ギリギリの場所で，表現を求め，人間を求めた Dickens の意味は見逃し得ない。Nell は死んだけれども，感傷に直結した Nell の人間像はまざまざと生きているといえないであろうか。Nell は死んだけれども，しかし Nell の様に真実な死に方をなし得た少女はなかったと断言する事もできる。死を惜しみ悲しむという人間本来の最

も根本的な愛情が，まともな感傷として，これほど純粋な形で健かに息吹いている作品は他に求める事は困難である。

VI 恐怖と悪の問題

—— *Barnaby Rudge*
—— *Martin Chuzzlewit*

人間への絶対信頼，揺がし様のない人間尊重の理念は何よりも大きな Dickens の根幹となっている。これは逆に見れば，それに逆行する悪の要素がそれに比例して強い証拠でもある。悪の克服を前提としない善などは凡そ無意味と言ってよい。勧善懲悪と一言に済ますけれ共，悪を本能的に嗅ぎつけこれとの血みどろの格闘を経た上での勧善でなければ嘶のそれに堕す事は自明である。

Dickens はその意味で悪に徹底した人であった。 I have a strong spice of the Devil in me.(1) と恐るべき告白を残している。この人にしてこそあれだけの悪人を創造し得たのであろう。

悪の問題を考える時，W. Blake をはじめ，R. Browning, Nietzsche, Dostoevsky 等は夫々一つの極限を形成する作家として想定されるし，近くは J. Joyce, G. Greene 等も加える事ができる。そして作品系列としては，たとえば「思索する者は行動しない」という仮定に立って「罪と罰」のラスコリニコフからスタブローギン，イワン・カラマゾフ等を経て，完全な独白 (soliloquy) とも呼べる「悪霊」へと進んだ Dostoevsky の沈潜の方向は，上掲の作家一般に共通して指摘できる事実である。逆に言えば，行動は陳腐平凡に陥り易いので一定の知的水準を保つ為には善悪の葛藤抗争は自ら独白の形を取らざるを得ないという事である。Hamlet, Macbeth についてもこの事は自明である。Blake の *The Mar-*

(1) *Let.*, II (to Moir, 1834)

riage of Heaven and Hell 又 *The Ring and the Bell* で代表される Browning の独白詩等についても同じ事が言えるであろう。

ところが文学での勧善懲悪は行動を主体としなければならぬという意味では，上掲の一群の作家の場合と矛盾する問題が生れる。知的水準では常識的凡庸から脱する事は最初から不可能であるからである。そこにも Dickens の卑俗性の可能性が考えられる訳であるが，行動する悪魔を創り出すという意味では Dickens にまさるものはない。行動を通して悪魔を描くというより創造している事，それがそのまま文学の勧善懲悪の謂である。

'Stop thief!'(1) と叫び乍ら群衆の先頭に立って悪を相手に追跡の喜びに浸った若い日の Dickens は，勢にまかせて Sikes, Fagin を葬り，Mr. Bumble を辱め. Ralph Nickleby, Mr. Squeers, Mr. Quilp, Brass 兄妹，等々を火祭に葬って来た。

傑作 *David Copperfield* (2) は 1849 年から翌 50 年にかけて発表されたが，自伝と虚構を創造的な写実精神で貫いた特殊な作品で，回顧的な浪漫精神と写実的なリアリズムが調和を保って代表作の名にふさわしい。Mr. Micawber 等を手がかりにその問題は更に詳細に考えられねばならないが，自伝という要素が強い事はこの作品を他の作品と区別して特に温いものとし，中に U. Heep, Mr. Murdstone 等という悪人も登場するけれども，他の作品に於ける様に悪に対する執拗な追跡が主題となっていない点でも特殊な作品となっている。その様に悪を中心とする意味からは *David Copperfield* という作品は全体の作品系列から除外して考える方が適当であろう。

---

(1) *O. T.*, X

(2) 詳しくは *The Personal History of David Copperfield*

又 *Dombey and Son*[1] は *David Copperfield* 以前に，即ち1846年から48年にかけて執筆されてはいるが，*David Copperfield* 以後の作品，即ち *Bleak House*,[2] *Hard Times*,[3] *Little Dorrit*,[4] *A Tale of Two Cities*,[5] *Great Expectations*,[6] *Our Mutual Friend*[7] そして最後の未完の小説 *The Mystery of Edwin Drood*[8] 等後半の文学活動に含ませた方が適当であろう。それまでの個人悪を追求する態度から発展して，社会悪という広い面での悪を追求しようとする態度に移っている事と，初期の楽天的な明るさが姿を消して次第に暗澹たる翳を増し始めているからである。

その様な意味で *David Copperfield* を一つの頂点として作品全体を考えると *Dombey and Son* は例外としてそれまでの前期，それ以後の後期という二大別ができる。四十才を待たずして既に後期への転換が行われた訳で，それを契機に絶望を湛えた沈痛な暗さが作品の空気を支配する様になるのである。威圧する様な重苦しい暗雲が次第に垂れこめて来る感じである。

The Old Curiosity Shop を書き終えてからその転機に到るまでの十年足らずの間の作品は *A Christmas Carol*, *The Chimes*, *The Cricket on the Hearth* 等のクリスマスを主題とする短篇と *Barnaby Rudge*,[9] *Martin Chuzzlewit*[10] の二長篇である。クリスマス物語は汚濁と悲惨の現世に浪漫的なキリストの精神を回復しようとする Dickens 自身の最大の希いを彫琢の粋を結集して芸術的に具現するものとして，又 *Barnaby Rudge* は Gordon Riots (1780) という歴史的な大暴動を背景に，そこにうごめく人間のささやかな

(1) 詳しくは *Dealings with the Firm of Dombey and Son*
(2) 1852-3 (3) 1854 (4) 1855-7 (5) 1859
(6) 1860-1 (7) 1864-5 (8) 1870 (9) 1841
(10) 詳しくは *The Life and Adventure of Martin Chuzzlewit* (1843-4)

希望や絶望の彩る人生模様を鳥瞰する歴史小説として，又 *Martin Chuzzlewit* は歴史小説とは逆に英国からアメリカ迄足を延しての大がかりの冒険を通して写実的に青年の成長を跡づけたものとして夫々傑作である事に間違いない。

これら中期の作品について言える事は，初期の作品に於けると同様，悪の追求は個人の問題としてのみ扱われ，依然勧善懲悪という方法が唯一の武器として用いられているという事である。*Sketches by Boz* 以来 *Nicholas Nickleby* までの僅か六年間に展開された様々の長所が凝集された形でクリスマス物に，歴史的な背景の下に大規模に展開されて *Barnaby Rudge* に，又丹念な構成の許に実証的写実的に展開されて *Martin Chuzzlewit* にと夫々の特長は持ち乍らも，本質的には初期の成長発展とみなす事ができる。

Barnaby Rudge は *A Tale of Two Cities* と共に Dickens の歴史小説の双璧であるが，あくまでも初期の作品としての特長が強い。後期の作品が持つ暗さは全然と言ってよいほど無い。*Our Mutual Friend* と未完の *The Mystery of Edwin Drood* は完全な 'mystery story' と言えるが，その面では *Barnaby Rudge* にもその傾向は強く，スリルにも富んではいるが後期の暗さは全くない。恐怖を恐怖として求める純粋さが強い為に，暗黒のロンドンを描きながらも不思議にすっきりしたロンドンとなっている。歴史小説のジャンルに加えられる所以であろう。

悪の面からこの小説を考えると John Chester という悪者の代表がいる。表面は上品であるが狡滑，残酷の権化で金を得る事と名誉を得る事だけを念願とする虚栄の男である。息子を金持の娘と結婚させる事によって財力を得ようとしている為 Emma という恋人との結婚を許さない。狡智によって M.P. にもなり Sir の称号(1)を与えられるが Gordon —

(1) *B.R.*, XL

派が優勢と見るやすぐさま加担の素振りを見せて立回りの妙を発揮する。結局は息子にそむかれ，暴動の傘にかくれて殺そうと計画していた相手から逆に決闘で殺される[1]という結末になる。しかしその様な悪の問題は副題と言ってよく，主題はむしろ恐怖と言った方がよい。これも歴史小説としての成功を裏書きする事実であろう。

ロンドンから十三哩離れた寂しい片田舎での嵐の夜の殺人事件にからまる幽霊譚から物語は始まる。Barnaby Rudge という白痴純情の青年は殺された人の邸で働いていた執事の息子であるが，行方不明だった父は後に白骨となって発見された。確証はなかったが Barnaby Rudge の父であろうと推定された訳であるが，未亡人 Mrs. Rudge と Barnaby に幽霊の如くつきまとう不可解な人物がいる。紊乱を極めた当時のロンドンの夜は罪と貧困と疫病と酒の阿修羅で，事実幽霊が出没して人を襲う[2]のである。乞食より汚い馬丁であり乍ら，時に眼から底知れぬ知力と意志力をパチパチ発火させる不気味な Hugh[3] という青年がいる。片目の Stagg, Barnaby 愛玩の烏 Grip, 無知な父親を怨んで出奔する青年 Joe, 錠前屋に丁稚奉公しながら主人に反抗の為の反抗をする青年 Tappertit 等々不気味な登場人物が謎に包まれたまま夫々ロンドンから姿を消す。Sir Chester の息子は勘当を受けて追放され，Joe は募兵に応じ，[4] Barnaby 母子は何者かに追い立てられて田舎にかくれる。[5]

その様な謎のままちりぢりになった人間が五年後 Gordon Riots を契機に再びロンドンに集る訳であるが，その暴動の描写が再び幽霊物語で始められるのも不気味である。暴動に巻き込まれたロンドンは，幽霊の出没とは違った意味での恐怖の町と化す。伽藍を焼き，役所を焼き，Newgate を焼き払い果ては私宅にまで放火してさながらの地獄[6]を現出さ

(1) *B. R.*, LXXX (2) *ibid.*, XVI, XVII (3) *ibid.*, XXXII
(4) *ibid.*, XXXI (5) *ibid.*, XXV (6) *ibid.*, XLVIII–LVI

せる。Hugh と Tappertit は叛乱軍の幹部として加わり，再び田舎から追い立てられてロンドンに辿り着いた Barnaby 母子はウエストミンスター橋にさしかかった時暴徒の行列に会い旗手に雇われ，片腕の兵士となって帰国した Joe も Sir Chester の息子も夫々がこの狂乱の中で血みどろの闘争に参加する訳である。

革命に関する Dickens の考え方は本格的にはフランス革命を主題とする *A Tale of Two Cities* を俟たねばならないが，幽霊という自然現象的な恐怖にせよ，暴動という人間社会の生む恐怖にせよ，Dickens はこの小説でその恐怖を徹底して追求している。恐怖のための恐怖に憑かれてこれと共に狂奔するという態度で貫かれている。暴動に対する批判や反省や，或は Lord Gordon の功罪等はほとんど眼中にない。その事が Dickens の若い精力を証拠づける理由でもあるが，同じ態度は次の *Martin Chuzzlewit* にも見られる。「恐怖」を主題とする態度が，今度は「悪」を主題として展開されるのである。

Martin Chuzzlewit は同名の祖父の孫に当るが，祖父は金持で周囲の者の羨望や諂いの為に疑心深く人間嫌いになっている。孤児の Mary を娘のように溺愛していたが，孫の Martin が彼女に恋すると，折角建築家にさせようと Mr. Pecksniff の見習生にしていたその孫を追放する。元々孫の Martin は利己的で祖父の気に入らなかったが，無一文で天涯孤独となると偶然の友 Mark Tapley を連れてアメリカに渡る。インチキの土地開発会社 Eden Land Corporation に欺され散々の苦労の後利己主義的な考え方も大いに改心させられて帰国する。帰って見ると年老いた祖父は Mr. Pecksniff に引取られているが，Pecksniff がやがては Mary を妻とし，祖父の財産までも狙っている事が暴露されて Martin と Mary が結ばれるという物語である。底抜けの楽天

家 Tapley に対して，徹底した偽善家 Mr. Pecksniff が配されているが，この本筋にはも一人の悪人 Jonas Chuzzlewit なる人物がいる。老 Martin の甥に当るが，遺産目当てに父を殺し，妻となった Mr. Pecksniff の娘を虐待し，インチキ保険会社を経営する同僚の悪人 Tigg を暗殺して遂に悪事がばれ自ら毒を仰ぐ無知獰猛吝嗇の極悪人である。既に見て来た Mr. Squeers, Ralph Nickleby, John Chester 等と同類で，写実的に描かれたあくまでも人間的な悪人である。この種の悪人は後にも跡を絶たず，金銭の奴隷となって人間性を忘れた Mr. Dombey や男性に復讐する事しか考えない彼の後妻の Edith Granger (1) 等も同類の悪人である。

しかし後期の作品について言える事は，その様な悪人，即ち個人悪を代表する悪は姿を消して，それらを背後にあって操る，社会が代表する悪，たとえば *Dombey and Son* の資本主義経済制度が持つ金銭崇拝の思想，*Bleak House* に見られる裁判制度が持つ矛盾，*Hard Times* の機械第一主義が孕む悪，*Little Dorrit* では資本主義と結託した政治や財力が示す悪などが夫々対象となって，その中で動く個人の善悪はむしろ二次的な問題となって来る。

その様な意味では Jonas Chuzzlewit は前期の写実的な個人悪を代表する悪人の典型と言ってよい。たとえば父の死(2)後その死にまつわる不可解な些細事が次第にばれて，実は息子の Jonas がその下手人であった事実が明かになる(3)までには全体の五十四章中三十数章が費されている。しかもその実際は，Jonas 自身が自分で父を毒殺したのだと信じ込んでいる為，その事実をかくす為に悪事から悪事へと益々深みに落ち込むが，実は直接自分の毒に倒れたのではなく，毒殺しようとしている事を召使に見抜かれ，その事実を聞いてショック死したのが真実であった。その様な二つの事実が平行して

(1) *Dombey and Son* (2) *M. C.*, XVIII (3) *ibid.*, LI

事件はミステリーの影を益々深めると同時に，これを描き上げる Dickens の筆は水も洩さぬ周到さで，写実的に実証的に跡付けられて行く訳である。その巧妙に組織された悪の深刻さは Ralph Nickleby より数等優れている。主人の死後は完全に痴呆状態になった召使 Chuffy (1) に亡霊の様に付きまとわれてその脅迫観念の虜となり，又同じ秘密を嗅ぎつけたペテン師 Tigg(2) に脅迫されて悪事の深淵に足を突込み，最後にはこれを嵐の夜暗殺しなければならなくなる迄の悲劇的な過程は写実的にも心理的にも徹底して追求されている。その死は，自ら墓穴を掘るという性格的な面と同時に，運命的な何物かに強いられて悪のどん底に落込むという面からも考察されて悲劇性を一層高めている。

次の描写は逮捕される断末魔の心理を描いたものである。逮捕に来た Nadgett という男を見た瞬間鐘の音が遠くから鳴り響く。

Hark! It came on, roaring like a sea! Hawkers burst into the street, crying it up and down; windows were thrown open that the inhabitants might hear it; people stopped to listen in the road and on the pavement; the bells, the same bells, began to ring: tumbling over one another in a dance of boisterous joy at the discovery and making their airy playground rock...

'Murder,' said Nadgett, looking round on the astonished group. 'Let no one interfere.'

The sounding street repeated Murder; barbarous and dreadful Murder; Murder, Murder, Murder. Rolling on from house to house, and echoing from stone to stone, until the voices died away into the distant hum,

(1) *M. C.*, XIX, XXV, XXVI, XLVI, XLVIII, XLIX, LI
(2) *ibid.*, XII, XIII, XXII, XXVIII, XL-XLII, XLIV

which seemed to mutter the same word!(1)

視覚を失って聴覚だけとなった人間に，良心の苛責が鐘の音となって襲いかかる心理描写である。'Murder' という Nadgett の言葉が万雷となって轟き渡り，やがて刻々遠のく様まで明確に意識している聴覚である。確かにここでも 'Stop thief!' と同質の勢い込んだ追跡の態度がうかがえるが，向う鉢巻の元気良さから既に鋭利重厚なリアリズムに到達していることは確かである。

この小説は J. Austen の *Pride and Prejudice* (1813) とよく比較されるが，'selfishness,' 'hypocrisy,' 等人間の欠点が生む悪を中心に物語が展開されている点は共通しているとしても，本質的にはむしろ対蹠的で，Austen の優雅繊細な写実や心理分析は見られず，又悪の持つ現実的な純粋さを追求するという意味では比較にならない。瓢々たる Mr. Collins のふりまく底ぬけのヒューモァと諷刺には及ぶべくもないが，そのヴァライェティと深さにかけては Mr. Pecksniff が数等まさっている。'hypocrisy' を完全に隠す事のできる朗々たる甘言と冗舌は，あらゆるものを美化し教訓化する詩人的資質をさえ証明するものである。いかに得意の時でも，いかに面喰った時でも，Pecksniff 氏の口の開く所，読者をアッと驚かせる奇想天外の発言が，強き人の前では上品なくすぐりと甘言となって，弱き人の前では相手を睥睨する気取ったおどけと教訓となって立板に水式に流れ始める。財産目当てに老 Chuzzlewit に取入ろうとする時の氏の表情は「虫も殺さぬ」(... he looked as if butter wouldn't melt in his mouth) 等という表現では到抵言い尽せない。

He rather looked as if any quantity of butter might have been made out of him, by churning the milk of human kindness, as it spouted upwards from his heart.(2)

(1) *M. C.*, LI (2) *ibid.*, III

バタが溶けないどころか，ミルクとなってとめどなく溢れ出る心情がそのまま攪乱されてバタと化すという神妙な過程は Shakespeare さえも予言できなかったであろう。

その様な神妙さにも拘らず最後にその陰謀が見破られ，並みいる衆目の前で赤恥を曝させられるが，その時の訣別の辞もその本領を遺憾なく発揮している。

I have been struck this day with a walking-stick (which I have every reason to believe has knobs upon it) on that delicate and exquisite portion of the human anatomy, the brain. Several blows have been inflicted, sir, without a walking-stick, upon that tenderer portion of my fame, my heart... If you find youself approaching to the silent tomb, sir, think of me. If you should wish to have anything inscribed upon your silent tomb, sir, let it be, that I —— ah, my remorseful sir! that —— the humble individual who has now the honour of reproaching you, forgave you.(1)

この期に及んでも修辞法を忘れず，相手を面詰する無礼さを弁えて，キリストに従って「許しましょう」と言明できるのは凡人の真似できる事ではない。人間的な意味で Pecksniff 氏を勧善懲悪のふるいにかけ，物欲にこり固った野心や術策を剝ぎ取り，金目当ての娘の結婚に失敗させ，折角の財産も全部はたかせ，最後には老 Chuzzlewit によって社会的な名誉も信望も全部剝ぎ取られながら，氏は凡庸な人間性を超越した 'hypocrisy' の権化となって堂々と濶歩し続けていると称してよいであろう。

Sir John Chester にせよ，Jonas Chuzzlewit にせよ，悲劇的な運命を担って人間の生命を終らねばならなかった恐るべき悪人に対して，Pecksniff 氏は永遠の生命を持って生

(1) *M. C.*, LII

き続けている様である。人間的な悪人に対して超人的な悪人と言えるであろう。写実的に悪魔の映像を打建てる事も立派な芸術であるが，同時に不滅の生命感を悪魔に附与する事も立派な芸術に違いない。前者が凝視から生れる写実を中心として発展形成されるのに対して，後者はグロテスクな誇張，或は戯画化（caricaturization）の方法によって形成される。*The Pickwick Papers* の世界もその代表とみなされるが，悪人に関する限り *Martin Ghuzzlewit* では Mrs. Gamp が Pecksniff 以上に見事に完成されている様である。

Mr. Quilp が超人的悪魔であったとすれば，Mrs. Gamp は世俗的な悪魔と呼べるであろう。裏町の床屋の二階に狭い一室を借りて住む貧乏な未亡人でもある。看板は看護婦兼家政婦。ずんぐりした短軀でその団子鼻はいつも擦られて赤い。しわがれ声で眼はうるみ，首が短かすぎて自由に廻らぬが，その不便を補うかの様に，眼球を上に廻すと容易に白眼ばかりになって極めて表情的である。世俗的という意味で職業意識も極めて旺盛である。いつも喪服まがいの，嗅ぎ煙草の匂のしみ込んだテラテラの黒服を着ているので，葬式があると死んだ人の服をかたみに恵んで貰える。近所の古着屋には彼女の着古した服がいつでも数着掛かっている(1)。葬儀屋 Mr. Mould は自分の紹介者として大切にしなければならぬとあっては，時々訪ねては最上の甘言をふりまく。

'Wishing ev'ry happiness to this happy family with all my heart. Good arternoon, Mrs. Mould! If I was Mr. Mould, I should be jealous of you, ma'am; and I'm sure, if I was you, I shonld be jealous of Mr. Mould.'(2)

この様なおべっかは恥かしくて常人のよく口にし得る所ではないが，夫婦を前にしてこの挨拶にまさる甘言はない。看板や名刺には 'Midwife' と洒落ているが，実は他人の嫌が

(1) *M. C.*, XIX　　(2) *ibid.*, XXV

る葬式に出すまでの死人の処置が最も得意とする仕事らしい。名刺はたえずポケットに携行して会う人毎にこれを手渡しては宣伝おさおさ怠りない。若い婦人にでも会えば leers, winks, coughs, nods, smiles, and curtseys (1) 等相手に取入る為の表情が無限に続出する。しかしこれは単に人間的な意味で取入る為の表情ではない。名刺を手渡すまでには可なりの時間を要するが，彼女の心中での操作は神秘的と云ってよい。

With a leer of mingled sweetness and slyness; with one eye on the future, one on the bride, and an arch expression in her face, partly spiritual, partly spirituous, and wholly professional and peculiar to her art; Mrs. Gamp rummaged in her pocket again, and took from it a printed card... (2)

sweetness と slyness と同時に持ち，宗教的な (spiritual) 表情と，酒に酔った (spirituous) 表情を同一の顔に共存させる技術は超人的である。ましてや一つの眼を現実に，他の眼を未来に向け得るとあっては神秘的な Janus 神と言えよう。

彼女がいつでも間違いなく持っているのは丸いつぎはぎのある gamp (=umbrella esp. large untidy one. 〔cf. Mrs. G.〕, C. O. D.) と，名刺と biscuit。biscuit は大の酒好きである為に，行く先き先きで酒にありついた時の肴の用意である。彼女が部屋に入ると同時に，特殊な香気 (peculiar fragrance) が微風に乗ってどこからともなく漂って来る。云ってみれば其処を通りぬける妖精 (fairy) が目には見えぬがしゃくり (hiccough) をしているのだろうが，この妖精ここへ来る前に酒場 (wine-vaults) を回って来たらしい... (3) 醜い老婆の姿は形骸だけで，その底から妖精が垣間見られ始

(1) *M. C.*, XXV (2) *ibid.*, XXVI (3) *ibid.*, XXV

める。

しかし何よりも鮮かなのは彼女の弁舌である。文法など最初から無視した弁舌は‘nonsense’と‘digressions’をかきまぜて滔々と流れる。その上この天才は Mrs. Harris というこの世ならざる仮空の夫人を創造し得ている。有名人などの言葉を借りて引合に出すテクニークは話術に長じた人のよく用いる所であるが，その様な常識を越えてハリス夫人は彼女にとっては絶対的な存在となっている。自己推賞をしたければ，「ハリスさんが……」という工合に他人の言葉として客観化されるし，どんな不利に追い込まれても「しかしハリスさんは……」と助けて貰える訳で，どんな人にかかっても，いわゆる論争などで負ける事の絶対ない様にはじめから仕組まれているのである。悲しければ慰めてくれるし，淋しい時には話相手（visionary dialogues）にもなってくれる。三十五年来の知己[1]とも，三十八年来の知己[2]とも云うが，そんな矛盾など最初から問題ではない。Mrs. Gamp にとってはハリス夫人はまさに絶対の神である。雄弁の神ハリスが Mrs. Gamp に乗り移って地上を彷徨しているのである。だから最後に同業の醜婆 Mrs. Prig からハリスなんて人はいない（...there ain't no sech a person livin'）とすっぱぬかれて怒髪天を突くの意気で喰いかかり「去れ」（Go along with you!）と厳かに命ずるのも当然である。

‘What!’ said Mrs. Gamp, ‘you bage creetur, have I know'd Mrs. Harris five and thirty year, to be told at last that there ain't no sech a person livin'! Have I stood her friend in all her troubles, great and small, for it to come at last to sech a end as this, which her own sweet picter hanging up afore you all the time, to shame your Bragian words! But well you mayn't be-

(1) *M. C.*, XLIX (2) *ibid.*, XL

lieve there's no sech a creetur, for she wouldn't demean herself to look at you, and often has she said, when I have made mention of your name, which, to my sinful sorrow, I have done, "What, Sairey Gamp! debage yourself to *her*!" Go along with you!' (1)

ハリス夫人は神であるから Mrs. Prig など卑しい(bage=*base*) 女の前に姿を現わして自らを卑しめる (demean) 事はしない。「あんたにはここに掛けてある写真でずっと見せてあげていたのに，それを今更いないなんて……今から考えると罪深い事だけれど，ハリスさんの前で，ついあなたの名を口にすると，勝手に堕落し (debage=*debase*) なさいとまで云われたのに」と嘆くのも当然である。そこには神の代弁者としての相手を睥睨する気概と，to my sinful sorrow などの用語には敬虔ささえ感じさせられる。

If she had abuged (=*abused*) me...I could have bore it with a thankful art (=*heart*). But the words she spoke of Mrs. Harris, lambs could not forgive. No, Betsey! nor worms forget.(2)

Bible に見られるキリストの口調がここでは再現されている。怒りの余り worms 等という新しい言葉を加えて Gamp 的 Bible が綴られて行くと云ってよいかも知れない。

He was born into a wale (=*vale*) and he lived in a wale; and he must take the consequences of sech a sitiwation (=*situation*).(3)

Of all the trying inwalieges (=*invalids*) in this walley of the shadder (=*valley of the shadow*), that one beats 'em black and blue (4)

I says to Mrs. Harris, only t'other day; the last Monday evening fortnight as ever dawned upon this

(1) *M. C.*, XLIX (2) *ibid.*, XLIX (3) *ibid.* (4) *ibib.*, XXIX

Piljian's Projiss (=*Pilgrim's Progress*) of a mortal wale... (1)

等 Bible 的口調は枚挙に遑ない。甚しくは

It is easier for a camel to go through the eye of a needle, than for a rich man to enter into the kingdom of God. (*Matt.* XIX 24) が——

Rich folks may ride on camels, but it ain't so easy for 'em to see out of a needle's eye.(2)

という表現となっては驚嘆の他ない。Gamp 的 Bible の観は益々強められて行く。

Which shows... what a little way you've travelled into this wale of life, my dear young creetur! As a good friend of mine has frequent made remark to me, which her name, my love, is Harris, Mrs. Harris through the square and up the steps a-turnin' round by the tobacker shop, "Oh, Sairey, Sairey, little do we know wot lays afore us!" "Mrs. Harris, ma'am," I says, "not much, it's true, but more than you suppoge. Our calcilations, ma'am," I says, "respectin' wot the number of a family will be, comes most times within one, and oftener than you would suppoge, exact.... Therefore, ma'am," I says, "seek not to proticipate, but take 'em as they come and as they go." Mine is all gone, my dear young chick. And as to husbands, there's a wooden leg gone likeways home to its account, which in its constancy of walkin' into wine vaults, and never comin' out again 'till fetched by force, was quite as weak as flesh, if not weaker.(3)

『あんた達若い人は人生の谷間をちょっぴりしか旅してな

(1) *M. C.*, XXV (2) *ibid.* (3) *ibid.*, XL

い証拠だよ。仲のよい私の友達がいつも云うように，その人の名はネ，ハリス，あの，広場を通ってタバコ屋の角を廻って階段を上った所のハリス夫人が云う様に「あゝ，ギャンプさん，私達には目の先きの事がほとんど分らないのネ」私は云うのよ「ハリス夫人さん，ネ，たいして分らぬのは確かだけど，しかし想像以上の事がネこの世には。あんた」と私は云うのよ「家族の数が何人になるだろうかという予想は大概一人以内になるもので，それもあんたが考える以上に屢々，間違いなしに。…だから，奥さん」と私は云うのよ「取越苦労はよして成り行きにまかせるのですね」私の家族はネ皆んな死んじゃった。そして私の主人と云えば，片方の木の義足までも同じ様に元の黙阿弥さ，酒場に通いっきりで力ずくで引張り出さぬとどうしても出て来なくて，肉身(み)のように弱くて，それ以上に弱いとは云えなくてもネ』

家族の数が段々減って最後にはいなくなる事は分り切った事実で全くのナンセンスと騒いでも始まらない。文法がでたらめで誤のない文章がない，と云った所ではじまらない。彼女が喋り始めると 'digression' が 'nonsense' を生み，'nonsense' が 'digression' を生んで，全く滔々と流れて，'proticipate' が 'anticipate' として通用するから奇妙である。Bible は云わずもがな，Shakespeare (cf. There are more things in heaven and earth, Horatio, Than are dreamt of in your philosophy. *Hamlet*: l. v.) までも呑み尽くした観がある。

その様な天才的な弁舌家 Gamp は自己推賞にかけても手ぬかりない。

"I ast (=*ask*) your pardon, ma'am," says Mrs. Harris, "and I humbly grant your grace; for if ever a woman lived as would see her feller creeturs into fits to serve her friends, well do I know that woma's

name is Sairey Gamp." (1)

ハリスの口を籍りて自ら喋っているのである。

Mrs. Harris, don't name the charge, for if I could afford to lay all my feller creeturs out for nothink, I would gladly do it, sich is the love I bears 'em.(2)

ハリス夫人の使徒 Gamp はキリストの如く世を慈み愛を教える為に生きているかの観を与えずには措かない。

ところが実は最初にも触れた様にこの Mrs. Gamp は Mr. Quilp にも劣らぬ悪人であった。自ら悪をたくらんで悪に身を焼くが如き Quilp 的悪を代表する悪人ではない。弁舌の力によって完全な使徒と化し，善を代表するかに思わせる彼女が，実は人目のない所では完全な悪魔と化すと云った，消極的悪の典型とも呼べる悪人である。キリストという人間が，その説く所は見せかけで，裏面に廻っては弱き者を虐め，石ころを蹴るかの如く病人を扱った人であるとすれば，という仮定は，あくまでも仮想であって現実には不可能であろう。その不可能な恐るべき仮想を，実は，文学の世界で現実化したのが Mrs. Gamp である。Mr. Quilp の積極的な悪に対してこれは消極的には違いないとしても Mrs. Gamp がその一身に集めた善と悪との対照の激しさが生む悪魔の印象はそれだけ強く，それだけ印象的とも云える。彼女の酒好きな奇癖や服装などについては，既にこの小説を書き始めた以後になって Miss Coutts (3) から断片的にその様な看護婦のいる事を洩れ聞いた事から得た着想であると伝えられ(4)又

(1) *M.C.*, XXV (2) *ibid.*, XIX

(3) Miss Burdett-Coutts (1814-1906) 政治家 Sir F. Burdett と Coutts 財閥の娘との間に生れ，両方から受けた莫大な遺産を貧民，転落女性の更生等の慈善事業に投げ出し生涯をそれに費した。Dickens とは 1835 年以来の知己で，家族とも親しかったが，慈善事業のほとんどを Dickens の指示に従って決定するほどの間柄であった。

(4) Forster, XXIII, 30

当時の看護婦が揃いも揃って人間を人間とも思わぬ職業人ばかりであったといわれるが，その様な事実を無視して，彼女がはじめて顔を見せる(1)や否や，Dickens の想像力とすばらしい言語能力は渾然一体となってこの残虐そのものの人間像を躍動させ始める。

Mrs. Gamp solaced herself with a pinch of snuff and stood looking at him with her head inclined a little sideways, as a connoisseur might gaze upon a doubtful work of art. By degrees, a horrible remembrance of one branch of her calling took possession of the woman; and stooping down, she pinned his wandering arms against his sides, to see how he would look if laid out as a dead man. Hideous as it may appear, her fingers itched to compose his limbs in that last marble attitude.

'Ah!' said Mrs. Gamp, walking away from bed, 'he'd make a lovely corpse.'(2)

家の人達に散々お上手をふりまいてから，さて病人は，という事になり，まだ見た事のない病人の部屋へ一人で入った時の仕草である。いうまでもなく，病人といえば死を予想させるし，死んだ時の硬直した死人の恰好を現場に当って調べた上でなければ安心して看病もできないという心理は想像できるとしても，その実験を生きた人間に行ってみるというのは余りに無慈悲な仕草で，これにまさる非情はない。病人が騒ぎ立てれば慌る事はない。椅子に坐らせた病人の首っ玉をうしろから掴んで前後に数十回思い切り揺さぶりさえすれば静かになる。もしそれで病人が気絶しても気遣いはない。親指を切れる位嚙るか，指を逆にひん曲げれば正気に返す事も簡単である。病人の顔を洗ってやるのに石鹸が眼に入ろうが

(1) *M. C.*, XIX (2) *ibid.*, XXV

口に入ろうが問題ではない。I feel the sufferings of other people more than I feels my own.[1] とキリストに劣らぬ名言を口にしながら，その裏で，人間を人間として扱わぬ訓練，人間を完全な物質として扱う技術，これが完全であればあるだけ彼女の喜び (pleasure) も大きく，'triumph of her art'[2] に恍惚となり得るのである。

ここに到っては完全な非人間化が行われたと云えよう。Dickens が完全に Mrs. Gamp になって 'triumph of the Devil' を奏でているとも云えようし，事実 'triumph of Dickens's Art' をかち得ていると云ってもよいであろう。

Mrs. Gamp に Jonas Chuzzlewit と Mr. Pecksniff を加えれば *Martin Chuzzlewit* の三つ巴の悪が完成される。既に見て来た様に Jonas は 'selfishness', Pecksniff は 'hypocrisy' を代表しながら，夫々に陰険で，思考する悪の様相を強く湛えて，後期の作品に見られる懐疑的な暗さを暗示する。現実的で人間的である。それに較べると Mrs. Gamp は残酷すぎて超人間的である。何処か嘶の国に住む悪魔をしのばせる風格がある。それでいてこれほど悪魔的な悪魔もいないというのも真実である。Weller 父子が楽天的で人間的な生命力に溢れていながら同時に超人的な生命力に恵まれてこの世の住人と思えぬ魔性を帯びているという事実と併せ考えられるべき問題であろうか。

Mrs. Todgers[3] の営む下宿屋の温情とヒューモア，底ぬけの楽天家 Mark Tapley，気弱い好人物 Tom Pinch 等の醸す楽天的な笑いの世界も，Mr. Pecksniff に対するヒューモラスな諷刺と共にこの作品の明るさに寄与しているが，個人悪を夫々頂点に於て把握したその純粋さに於て，悪の系列の代表作としてもすぐれている。明るさ暗さを適度に調和した

(1) *M. C.*, XXIX　(2) *ibid.*, XLVI
(3) *ibid.*, VIII-XI, XXXVII, XLVI, LIV

意味で初期の最高傑作とする考え方も許されるであろう。

しかし一つの面で明かに Dickens が失敗している事も指摘されねばならない。それは写実の問題で，人間の変化を跡づけようとした Martin の描写である。元々この青年は遺伝的なほど‘selfishness’を強く持合わせた主人公であった。追放され放浪し，様々の経験をする事によって自分の性格の非を悟り立派な紳士になるというテーマは Dickens にとっては最初から骨子となるべき筋書きであった。理想的な人間を主人公に選ばなかった事実からも Dickens の野心は明かである。勧善懲悪では成功しながら *Nicholas Nickleby* でも青年の成長を性格的に跡づけようとする試みでは決して成功はしていなかった。この問題を再び取上げてより徹底的に取組もうとしたのが *Martin Chuzzlewit* であった。尤も Martin をアメリカまで放浪させる予定は最初はなかった事で，この小説の売行きが予想外に悪い事と，アメリカのジャーナリズムや企業家への憤懣の吐口を求める為に，急にアメリカでの奇想天外の経験をさせる事になった(1)と言われる。その前年 (1842) 妻と共にアメリカ旅行を思い立ったのは，*American Notes*(2) からも明かな様に，本来民主々義の立場からその健康な国柄に好感を抱いていた上に，熱狂的な読者への挨拶を兼ねたものであったが，偶々アメリカで印刷される自分の作品に対する正当な印税を要求した事が誤解のきっかけとなって，出版社，ジャーナリズムから猛烈な反撃を受け，Dickens is a Fool, and a Liar. 等とまで新聞に書き立てられて苦々しい経験を嘗めて帰国した。しかし国際版権 (international copyright) の問題は自分が先鞭をつけて犠牲となっただけで，いつ確立されるか見当も立たず，折角の国際正義も通用しない焦燥は後々まで Dickens の痛恨事の一つとして残った。しかし *American Notes* にせよ Martin

(1) Forster., II, III (2) 1842

Chuzzlewit のアメリカ遍歴の部分[1]からも明かな様に，Dickens にとって痛恨事の対象はアメリカ自体ではなかった。無智粗暴で搾取しか弁えない出版人，ジャーナリズム等がその対象で，その意味では既に現実に Bentley 等の出版者との闘争，或は作品では Mr. Pott[2] 等のジャーナリストを通して，その排他独善的な愚劣さ横暴さを手ひどく叩いて居り，必ずしもアメリカに限った訳ではない。それにも拘らず，たとえばニュー・ヨークの或る劇場では *Macbeth* の魔女の場をバーレスク (burlesque) にして *Martin Chuzzlewit* を釜に投込ませた等という辛辣な嫌がらせをするのはむしろ非はアメリカにあるとさえ言えよう。ともあれ，その様な事情で急遽アメリカ遍歴を加える事によって Martin の経験をより広い視野で興味深く広げる事によって，改心の必然性を跡づけようとしながら，内容的には無意味に終ったという事が指摘されねばならない。

これは Dickens の文学の本質的な問題でもある。結論的には Weller 父子や Mrs. Gamp 等の典型に見られる様に，人間の変化しない面しか Dickens には描けなかったのではないか。性格は変化するという前提に立ってこれを手がかりに人間を探求する事も文学一般から見ると大きな分野になっているが，少くとも Dickens はその面では最後まで失敗を重ねていると言えよう。*Nicholas Nickleby* を手はじめに *Martin Chuzzlewit* もその一例であるし，何れも見方によっては最高傑作とさえ呼ばれる *Dombey and Son* についても *Little Dorrit* についても，変化する過程を跡づけるという意味では失敗作と言う事もできる。たとえば娘に冷酷そのものであった Mr. Dombey は，実は金銭欲と名誉欲のために本来の人間性を盲目にされていたからであり，妻を失い息子を失い金力権力すべてを失った時，愛情の尊さを知って人情味溢れた Mr. Dombey になるのであるが，その過

(1) *M.C.*, XV-XVII, XXI-XXIII　(2) *P.P.*, XIII, XV, XVIII

程は，変化する性格を辿るのではなくて，本来厳として存在しているにも拘らず，幾重にも殻をかむされているその社会的な殻を一枚一枚剝ぎ取られて行く事にある。人間とは思えない冷酷さの中にも，本来の人間的な弱さや苦悶をほのめかしながら，次第に真実の人間性に接近する過程が，たとえば *Dombey and Son* の文学性と言えるであろう。変化というより人間性の回復と呼ぶにふさわしい。G. Eliot や T. Hardy，或は最も典型的には G. Meredith の *The Egoist*(1) 等に見られる様に，性格の内面に沈潜してその行方をじっと見守る事は Dickens には不可能であった様である。悪の問題についても Browning や Dostoevsky 等と逆の方向を辿らねばならなかった Dickens にそのまま結びつけて考えられる問題である。眼一筋の作家であったという事実とも関聯づけて考え得よう。

ともあれ Martin Chuzzlewit はアメリカでの遍歴を通して性格が変ったというけれども，経験とそれが及ぼした内的変化との必然性は極めてとぼしい。人間性を回復したと呼ぶとしてもこの小説ではまだそのための本格的な肉づけが見られず，途徹もない出まかせの冒険が偶然性格を変えて行くという欠点は否定できない。David Copperfield の青年期も海外旅行やその他の経験が失望や煩悶の解決に役立つが，これらの結びつきという意味ではやはり必然性がとぼしく偶然的である。これに劣らず自伝的要素を持つ *Great Expectations* についても同様な弱点は指摘できるが，*Dombey and Son* が人間性の回復を軸として展開されているのと同様，虚栄，空頼み等の弱点の発見が軸となっている点では *Great Expectations* の方が強くまとまってすぐれている。いずれも変化に焦点が合わされず，その底にある固定した性格が想定されている場合である。

(1) 1879

VII 芸術の完成

—— *Christmas Books*
—— *Dombey and Son*
—— *David Copperfield*

妻と共に第一回目の訪米をしたのは Dickens 三十才の時である。 *Martin Chuzzlewit* ではその経験を利用して読者を獲得したり物語に variety を与えたり等々の利点もあったが，却て芸術的にはマイナスになる面が強かった。主人公の経験の範囲を拡げてみても，それが性格の探求や内面的な発展を跡づける理由にはならなかったからである。しかしこの小説を契機に Dickens は既に完成の域に肉迫する。

途中から急遽方針を変えてアメリカに放浪させる等という無謀さは最も警戒すべきものであった。度々見られたプロットの矛盾撞着も姿を消して来る。部分と全体とが寸分の隙間も見せない有機的な融和関係で結び合っている。E. Johnson, K. Tillotson (1) 等 Dickens の 'symbolism' を指摘する傾向が最近強いのは主としてこの調和に根拠を置いている。一見意味のない些細な事実が，実に巧妙にヴェイルされて中心思想と緊密に結びつけられて象徴的な意味を負わされている事を指摘するのである。

その事は見えすいたメロドラマの段階から脱却する事でもあった。底ぬけの楽天思想や，ドタバタ騒ぎや，瞬間的なパントマイムが処構わずどっかとあぐらをかいた感じの健康さと明るさが次第に影をひそめて来る。残るのはどうにも手の下し様のない暗澹たる人生の問題である。

(1) Kathleen Tillotson: *Novels of the Eighteen-Forties* (Oxford, 1954)

年令的な成長と共に Dickens の社会観が確立されて来た事も考えられる。一介の記者として世の悲惨に涙を流し，政治の無能に憤慨した青年は既に時代の英雄的な作家としての眼ですべてを判断しなければならない様に強いられていた。Corn Law (1) の採否を中心に議会は保守革新が入乱れて大揺れをしていたが，明るい見透しは何一つ得られなかった。喧燥と雑事を逃れてフランス，イタリーに遊び (1844-5)，スイス (1846) に遊んでも絶えず故国の政治は Dickens を追廻し，失望や焦燥を齎した。せめてもの期待を持たせてくれるのは先述の Miss Burdett-Coutts 位のものにすぎなかった。彼女の慈善事業に見られる救済を除いては政治も産業も人間を不幸と堕落の方向に追いやっているとしか考えられなかった。*Dombey and Son* 以後の作品はすべてその様な資本主義経済社会に対する徹底した抵抗と絶望となって現れている事からもこの事は容易に推察できる。人間観が暗さを増す所以でもある。

個人的には一躍高名の絶頂に達した Dickens が愈々慎重に経済的地盤を確立した時期でもあった。45年には子供が既に六人，49年には九人と妻は驚くほど多産であった。加えて経済観念の全くない妻であった事は家計的にも不安定が続いた。父や弟達の経済的依存も依然続いた。それ以上に不安であった事は *Martin Chuzzlewit* が最初予想外に売れなかった事である。文筆も所詮は人気稼業である事を充分認識させられた訳で ... most of all I have that possibility of fading health or fading popularity before me ... (2) という言葉にも明かな様に，健康と併せて将来の不安を何とかしなければと真剣に考え始めていた。

(1) 地主擁護のために輸入穀物に課税して一定価格を維持しようとする法案で1815年制定以来多くの攻撃を受けて改正され1846年廃止された。

(2) *Let.*, I, 713, to Forster, 11/3/45

二十万ポンドの資本を出版社，財閥，名士などを動員して作り *Times* を向うに廻わして *Daily News*(1) という新聞を発行したのもその様な個人的な経済的地盤を確立する為のものであった。整理係として父を田舎から呼戻して働かせたが，自分が無資本である事から Bentley の場合と同様，僅か十七日間編集長として働いただけで後を Forster に譲って退社しなければならなかった。

この計画は失敗したが，経済的には次第に安定し始めて来た。従来の小説の売行きが軌道に乗った事と，1843年以来毎年書き続けて来た *Christmas Books* の売行きも上々であった。*A Christmas Carol* (1843) を皮切りに *The Chimes* (44)，*The Cricket on the Hearth* (45)，*The Battle of Life* (46)，*The Haunted Man* (48) がそれである。年令は一年だけ年長であるが Thackeray がやっと文壇に認められ始めていた頃の事で，Thackeray の最初の Christmas Book, *Mrs. Perkins's Ball* が五百部売れたのに対して，たとえば同年の *The Battle of Life* は二万五千部という売行きであった。

これらの *Christmas Books* は中編ではあるが夫々に彫琢を極めて珠玉の様に完成されている。万人に幸福を分ち日頃の憎しみ悲しみ苦しみも今日一日だけは忘れて互に慈み，親切を分ち合おうとするクリスマス精神こそは，人間 Dickens にとって最後の拠り所であった。弱き者，貧しき者への同情一筋に生きようとする精神である。この同情は当然逆に強き者，残酷なる者，圧政者への怒りと抵抗につながるが，その様な具体的な政治的意図にまで発展しない段階で，人間の善意だけを取上げた意味では噺に終るのも当然である。意地汚い吝嗇家 Scrooge は幽霊 (ghost) に教えられて善人となり

(1) 1846年一月二十一日創刊 1930年 *Daily Chronicle* と合併するまで続いた。

思い上った独善的な Toby Veck は教会の大小様々の鐘 (chime) の精 (goblin) に ... we must trust and hope, and neither doubt ourselves, nor the good in one another という教訓を教えられる。無理に幽霊や鬼を見なくてもこの世は人に善意を持たせる材料に事欠かない。炉辺の蟋蟀でさえ妻の操を疑う John を戒める。哲学者 Doctor A. Jeddler は無意味だと一笑に附していた人生が娘一人に逃げられてまるで箍が外れた様に崩壊するのを見てはじめて人生に愛情がどれほど深い錨を降しているか(love, deep-anchored)を思い知らされる。人生の戦 (*The Battle of Life*) とはその愛情を守る為のものに他ならない。暗い過去への悔恨に憑かれた学者 Redlaw は Mephistopheles まがいの悪魔に身を売って 'haunted man' になる。幸い過去を忘れる事はできたが gratitude, repentance, compassion, forbearance 等すべての美徳まで忘れ，却て害毒を世人に及ぼす事を発見して再び悪魔に頼んで 'ghost's bargain' を解約して貰う。結局は過去の不幸，不遇の想出さえも現実の幸福に役立つのではないか。大切な事はそれを怨んだり忘れようとする事ではなくて，これを許すよう (that we may forgive it) 心構えを持つ事こそ人間的課題であるというのである。その意味では 'Lord, keep my memory green!' というひたむきな祈りこそ人間を最も人間的にする心構えであると教えられるのである。

これらの物語には所謂る勧善懲悪はない。人間が迷路に足を踏込み，幽霊などに邂逅して再び人間に立戻る経過を最も印象的な形で物語にしたものにすぎない。ましてや復讐などの腹黒い影など毛頭留めていない。曙の様に人間善意の光明が地上に明け渡って来る純粋な噺である。人類の幸福を希うクリスマス精神の結晶と言えよう。

センチメンタルな傾向も時折見られ，或は裁判官，政治家

等に対する諷刺[1]や，幼時の Dickens 自身の不遇に対する苦々しい悔恨を交えた主観性[2]等々，純粋なクリスマス精神礼讃の歌にふさわしくない不調和な面も取上げられるが，それ以上にたとえば幽霊やナイトメア (nightmare) の実存を記し得た Dickens の神技を高く評価すべきであろう。幽霊は現実には嘘に違いないが *Christmas Books* にはその幽霊がまざまざと生きて存在するから不思議である。芸術の秘密に他ならない。

一方世俗的な問題では，*Daily News* 発刊の仕事も大変であったが，素人演劇に関する活躍も大きかった。生来演劇には非常な情熱を注ぎ，若い時代の観劇は Dickens に大きな教育的意義さえ持つもので，その成長と切離しては考えられないが，愈々功成り名遂げた段階となって，同志を集めて素人演劇に手をつけ始めた。イタリーに旅行して *The Cricket on the Hearth* を書き終え，帰英すると同時に，半年近い読合わせ，練習を経て 1845 年秋 Ben Jonson の *Every Man in His Humour* を最初に上演した。非常な好評を博して同年末には大々的に St. James's Theatre で貴顕を前に上演した。演出，舞台，出演等一手に Dickens が引受けたものである。

演劇に対する異常なまでの情熱もさる事ながら，一つには E. Johnson 等も言う様に，これは欝積の吐口でもあった。創作や表現に対する焦燥，政治への煩悶，家庭への不満等々欝積するすべてのものは何等かの形で解毒作用が必要であった。執筆の最中に突如狂人の様に大声で怒鳴って家族を驚かせたり，嵐の中を若い日の Beethoven さながら走る様に十数哩を歩き廻る習慣などもその徴候の一つであろう。その振幅の激しさは天才の証拠でもあろうが，創作に対する情熱と平行して，この様な行動に対するはげしい憑かれ方も異

(1) *The Chimes* (2) *The Haunted Man*

常であった。後には朗読会 (Readings) が演劇に代るが，遂にはその為生命までも賭す結果となった。

ともあれその様にして始められた素人演劇に，上述の Ben Jonson のものや，Fletcher の *The Elder Brothers*, Shakespeare の *The Merry Wives of Windsor* 等を出し物に，そのまま慈善興行として上演され始めた。一般の貧民や転落女性救済の為のものと同時に，莫大な負債に苦んでいた L. Hunt 救済の為に，或は Shakespeare House 管理人の給料捻出の為等々個人的な念願を果す事もできて，政治の欠陥を少しでも補う事と併せて一挙両得の役を果した様である。

イタリーから帰った1845年にはこれと並行して全精力を *Daily News* に注いだが，翌1846年折角創刊してもそれが計画通りに行かなくなると早々にスイスに渡り愈々 *Dombey and Son* に取かかっている。五月から十一月まで留まって書き続け，それからパリに三ケ月，Victor Hugo, Dumas, Gautier 等々と交わって47年一月に帰英後も *Dombey and Son* を書続け，同時に Miss Coutts の慈善事業の世話や L. Hunt の為の慈善興行なども忙しかった。*Dombey and Son* の完成した1848年はほとんどすべてを各地での素人芝居の慈善興行に費している。秋になってやっと *The Haunted Man* の筆を取り始めた位である。歌手として名をなした姉の Fanny が結核で死んだり，1849年には父も続いて病気に倒れる等個人的な不幸も続いたが，この年早々から *David Copperfield* に取かかっている。しかもこれが完成しない間に *Daily News* での失敗を生かして，今度は自分が資本金の半分を確保して週刊雑誌 *Household Words* (1) を始めている。Conductor の名で年収 £500 が確保されると同時に，文学の世界では果し得なかった Radical としての立場から

(1) 1850年三月創刊，59年まで続いた。

社会批判，政治批判等を十二分に行う事ができる様になった。*Dombey and Son* と *David Copperfield* という二作品によって文学的名声を不動にすると同時に，経済的にも社会的にも安心して活躍できる地盤が確立された訳である。三十八才で豊穣の年令，完成の年令に達したのである。

Dickens の最高傑作は何かという問題は容易に決め難い。*Martin Chuzzlewit* を挙げる者もあるし，*Great Expectations* を挙げる者も多い。「愛読書としては *Pickwick Papers, Oliver Twist, Nicholas Nickleby, A Tale of Two Cities* などが選ばれ，とりわけ *Pickwick* の愛読者が多い」(1)けれどもそれは誰にも真似を許さぬ若い Dickens の文学が持つ潑剌たる生命力を喜ぶからであって，それがそのまま芸術的な意味で傑作であるかどうかは断定し難い。その意味では *Martin Chuzzlewit* や *Great Expectations* に劣らず *Dombey and Son* と *David Copperfield* とを候補にあげる事に異議を唱える人はいないであろう。前者には *Bleak House* や *Little Dorrit* 等後期の作品が次第に翳を深めて行くその暗さが既に現れ始めて居り，後者は自伝的要素が中心となって構成されているという違いがあっても，最初に述べた様に，部分と全体が有機的に結び合わされた芸術品という意味では何れも最も油の乗り切った作品と呼んでよい。

大々的に貿易会社を経営する Dombey 氏は長男の Paulが生れるとすぐに妻に死なれた。事業の後継者たるべき Paul に対する期待が大きすぎて，却て子供の成長を妨げてこれまた殺す結果となった。娘の Florence だけが生き残るがどうしても愛する事ができない。それどころか Paul が死んで Florence が生き残ったという事実が恨めしく，却て嫉妬を

(1) 山本忠雄：*David Copperfield* (研究社) Introduction

さえ感じさせるので Florence は冷酷なまでに疎外されて育つ。会社に働く立派な青年 Walter Gay と娘とが恋すると父はわざとこの青年を West Indies に派遣して仲を割く。途中で船が難破したという情報が伝えられ，青年も絶望視される。Dombey 氏は二度目の結婚もするが相手が期待通りの服従を見せない為に互に不幸に陥る。それどころか Dombey 氏は逆に妻に復讐された形で，部下の Carker 氏と駆落ちされる。Carker 氏は逃げる途中で Dombey 氏に発見され，汽車の前に落ちて死ぬが，Dombey 氏の方も会社が破産して無一物となり，生きて帰国した Walter と結婚した娘に最後に救われるというのが物語である。

この小説で最初に注目を惹くのは Fagin, Ralph Nickleby, Mr. Quilp 等前面で活躍していた grotesque な悪魔が背後に押しやられているという事である。

Dombey 氏は一見この上なく冷酷で高慢な悪者に見えるが，心根は決して悪人ではなかった。いつ破産させられるかも分らぬ自由競争の経済社会を，立派に泳ぎ渡る為には鉄の如く無情な Dombey 氏になる事を強いられるというのが真実であろう。この社会では金が絶対であり，人間も社会機構自体もすべてが金に隷属しなければならない。それどころか The earth was made for Dombey and Son to trade in, and the sun and moon were made to give them light.(1) という主客顚倒が何の不思議もなく行われるのである。妻は家具と異る所なく，娘は邪魔物でそこらに散らばった紙屑同然である。事業を継ぐべき息子だけが不可欠の人間となる。

The house will once again, Mrs. Dombey, be not only in name but in fact Dombey and Son; Dombey and Son! (2)

これでやっと安心だと生誕にほくそ笑む不敵な商人の魂胆

(1) *D.S.*, I (2) *ibid.*

ができ上る。金力絶対の思想に人間の pride を加えれば，まるで数学の公式の様に Dombey 氏が生れる。そしてその様な Dombey 氏である事をやめた時自分の会社が破産し事業に失敗するというのは単なる皮肉ではない。

第二の妻 Edith も高慢薄情で男性を蛇の如く憎む悪女に違いないが，金ですべてが解決できる社会ではさして怪むに足りない。美貌と貞操を売る以上は夫の富を分け持ち，社会的な地位を与えられる資格が買い取られるというのが道理である。結婚はだからその様な商取引上の一種の契約である。それにも拘らず，自分を無視し，道具視し，一方的服従を強いる夫には復讐しなければならなくなるのである。支配人の Carker との駆落ちの契約は道義に反するかも知れないが，これとても実は相手の Carker を欺き，その高慢と狡猾に対して復讐する為の手段であった。夫に愛情の片鱗もない事を見届けた Carker が，結婚式の日以来自分に執拗に見せ続けて来た下劣な態度と誘惑的な物腰を最後の瞬間にあざけり笑ってやる積りであった。

Carker 氏にしても悪いというより実際は弱い面の多い人間であった。金が最上のものであるからには，主人の金を胡魔化して私腹を肥らせる事も情況さえ許せば敢て辞さなくてもよい筈である。美貌で不遇な人妻に同情的になるのも自然の理と言ってよい。

悪人と名づけ得ない訳ではないが，必ずしも簡単にはそう名づける事のできない悪人，悪であって悪でない，低迷した姿に於ける悪の姿を描きあげた意味で，この作品は，従来見られなかった新しい作品となっている。雰囲気の中に低迷するという意味では従来の健康で力強い悪魔ではなく，全く別物の悪が登場する訳である。そして詮じつめて悪の実体を解体してみると，Dombey and Son という一つの機構が自ら備えている悪の様相，広くは金力権力を絶対と見做す社会が必

然的に生み落した悪の様相という，個人を超えて，より根元的な問題に到達するのでなければ解決の糸口を見つけ得ない問題になるのである。悪人は追跡して殺せばよいという勧善懲悪の理がここでは通用しない。結局はその様な社会を憎み，これを槍玉にあげたとしても，それですぐ様どうのこうのという結論へ導き出せる問題でもない。汽車を呪い，(1) 機械文明への無反省な礼讃(2)を嘆いてみても，結局は文学の世界ではそれだけに終らねばならぬ問題である。そこに行当って Dickens 自身が戸惑い低迷せざるを得なかった問題でもあったであろう。解決の方法こそ違え，夏目漱石が「門」や「彼岸過ぎまで」等で行き悩んだ問題と軌を一にする。... vices are sometimes only virtues carried to excess！(3) という底をついた懐疑にもその事が端的にうかがわれる。

しかしたとえどうにも処置できない問題ではありながらも，漱石の様に門の前に行き悩んで佇む事をしないで，その悪の様相を描きあげた意欲的な Dickens の文学は高く評価されねばならない。金の虜になった人間と，命がけで人間であろうとする人間とが夫々克明に追求されて一つの倫理を打建て得ているからである。Dickens に見られる散文精神の一つの典型である。

Florence は冷酷な父に一度でよいから愛撫され，やさしい言葉をかけてほしいと思うし，娘の本能として父を愛してあげたいとも希うが，Paul が死んでからの父は殊更娘を避けて自室に閉じこもったまま夜を更かす。淋しさに堪えかねて毎晩夜更けにそっと父の室に近づいて中の様子に聞耳を立てるが恐しくてドアを開く事ができない。しかしその様な肉親の情をこの父に求める方がむしろ誤っている。He had never conceived an aversion to her: it had not been

(1) *D.S.*, VI, XX (2) *ibid.*, XV, XXXIII, XXXIV
(3) *ibid.*, III

worth his while or in his humour.[1] というのが Domdey 氏の偽らざる気持である。だから同じ屋根の下に暮しながら一年以上も言葉をかけて貰えない。或夜更け父の居間のドアがあいているのを発見して我を忘れて飛込むなり，'Papa! Papa! speak to me, dear Papa![2] と泣きすがるが，燃える彼女の心は父の冷厳な眼に射すくめられた様に凍てついて了う。瞬間，Paul が死ぬ前より父が変って来た事に本能的に気がつくからである。

Did he see before him the successful rival of his son, in health and life? Did he look upon his own successful rival in that son's affection? Did a mad jealousy and withered pride, poison sweet remembrances that should have endeared and made her precious to him? Could it be possible that it was gall to him to look upon her in her beauty and her promise: thinking of his infant boy![3]

生き残った自分を恨み嫉妬しているのではないかという反射的なひらめきは，意識や思考以前のものとして Florence が本能的に嗅ぎつける真実であると同時に，Mr. Dombey 自身も sub-conscious な状態でふと娘の姿に嗅ぎつける真実と言ってよい。

この前娘を見たのはまだ Paul が生きていた頃の事である。五才になった Paul は姉に異常なまでの愛着を示すので父を驚かせた。驚かせた (was quite amazed)[4] 事は事実であるが，果して乳母よりも父よりも姉を喜ぶ息子を見て，Dombey 氏は既に嫉妬を感じたかどうか Dickens は極めて慎重であった。

After they had left the room together, he thought he heard a soft voice singing; and remembering that

(1) *D.S.*, LVIII (2) *ibid.*, XVIII (3) *ibid.* (4) *ibid.*, VIII

Paul had said his sister sung to him, he had the curiosity to open the door and listen, and look after them. She was toiling up the great, wide, vacant staircase, with him in her arms; his head was lying on her shoulder, one of his arms thrown negligently round her neck. So they went, toiling up; she singing all the way, and Paul sometimes crooning out a feeble accompaniment. Mr. Dombey looked after them until they reached the top of the staircase — not without halting to rest by the way — and passed out of his sight; and then he still stood gazing upwards, until the dull rays of the moon, glimmering in a melancholy manner through the dim skylight, sent him back to his own room.(1)

やっと弟を抱きあげて慈母の様に歌を口ずさみながら階段を骨折って上って行く姿は Dombey 氏の眼底に何物かを強く植えつけたに違いない。だから今「Papa! Papa!」と泣きつく Florence に「疲れているのだからお寝み」と古傷にふれられるのを恐れでもするかの様に追い出すと，明りを戸口に持出して同じ階段を上って行く姿を見送るのである。

Still covering her face, she sobbed, and answered 'Good night, dear papa,' and silently ascended...

The last time he had watched her, from the same place, winding up those stairs, she had had her brother in her arms. It did not move his heart towards her now, it steeled it: but he went into his room, and locked his door, and sat down in his chair, and cried for his lost boy.(2)

今では肉親といえばこの娘一人であるにも拘らず，息子が

(1) *D.S.*, VIII (2) *ibid.*, XVIII

死んだ事で遽かに娘によりかかるほどこの父は生易しい人間ではない。息子の死がその心を益々冷く鋼の様な固さに氷らせるのである。ふとすると崩れそうになって，子供を抱きすくめたくなりそうな人間的な危険性と，逆に嫉妬の為これを呪い殺したくなりそうな悪魔的な危険性との岐路に立って Dombey 氏は大揺れしながら刻々悲劇的な相を厚くするのである。

死んだ Paul は 'Papa, what's money?...It isn't cruel, is it?'(1) と無邪気ではあるが象徴的な表現で非情な父と対置されているが，姉の Florence の純情と結び合わされてこの小説で抒情的な役割を果す力は強い。死ぬる Paul の哀れさと，生き残った Florence の孤独には *The Old Curiosity Shop* に見られる感傷過多の現象は見られない。金の残酷さと併せて「海」の象徴するものも大きい。これは後に *Little Dorrit* や *A Tale of Two Cities* で更に繰返し強調されるが，運命，生命力，真理等を象徴してたとえば死という主題の陥り易い感傷性からこれを救う役割も大きい。

病弱な Paul がふと目を覚ますので看病していた Florence (Floy) がどうしたのかと聞く。

'The sea, Floy, what is it that it keeps on saying? ... they are always saying something.'(2)

このテーマは最後まで繰返される(3)が，海を通して母を想い自分もやがて其処へ行く事を本能的に予感する幼児の純真さを描いても妙を得ている。

... Don't you think you would rather die on a moonlight night when the sky was quite clear, and the wind blowing, as it did last night? ... Not blowing, at least, but sounding in the air like the sea sounding

(1) *D.S.*, VIII (2) *ibid.*
(3) *ibid.*, XII, XIV, LVII, LVIII XVI, XVIII, XLVIII, LIII

in the shells. It was a beautiful night. When I had listened to the water for a long time, I got up and looked out. There was a boat over there, in the full light of the moon; a boat with a sail. ...A boat with a sail in the full light of the moon. The sail like an arm, all silver. It seemed to beckon me to come!(1)

やがて死を目前にテムズ河が海へ自分を連れ去る (It is bearing me away, I think!)(2) (... the swift river bears us to the ocean!)(3)という幻想となるが，この海はその死後も姉の幻想(4)となって繰返される。そして次第に意識化され，自分の生活自体が海の音となって繰返されている(5)という意識にまで発展する。

All is going on as it was wont. The waves are hoarse with repetition of their mystery; the dust lies piled upon the shore; the sea-birds soar and hover; the winds and clouds go forth upon their trackless flight; the white arms beckon, in the moonlight, to the invisible country far away.(6)

三回も繰返されるこの歌う調子の文章は，Florence の孤独や，又これを超越した人生の非情や神祕を深刻化する意図を持つものと言えよう。彼女にとってはその海は愛情の波でもあったが，父や周囲の者から完全に疎外された時，投げ出されて岸に打上げられた孤独者 (the sole survivor on a lonely shore from the wreck of a great vessel)(7) の実感に迫られる。何処かで生き永らえなければならぬと無意識的に生を求めて家を最後に逃れる決心をした時の実感である。生命でもあったこの海は Florence の中に常に鳴り響き彼女

(1) *D.S.*, XII (2) *ibid.*, XVI (3) *ibid.*
(4) *ibid.*, XVIII, XXIV, XXXI (5) *D.S.*, XLI (因みにこの章の title は *New Voices in the Waves* となっている。)
(6) *ibid.*, XLI (7) *ibid.*, XLVIII

を最後の栄光に導く。

... the voices in the waves are always whispering to Florence, in their ceaseless murmuring, of love —— of love, eternal and illimitable, not bounded by the confines of this world, or by the end of time, but ranging still, beyond the sea, beyond the sky, to the invisible country far away! (1)

A Tale of Two Cities に於ても，生命の海，愛情の海として象徴化されるが，この小説で象徴された愛情も Dickens が最も丹精をこめてその神祕に迫ろうとした主題の一つである事は疑う余地がない。

この様な格調高い抒情的な流れに対して，同時にこれまでに見られたグロテスクな善人，グロテスクな悪人，も多く現れて散文的な材料にも事欠かない。Mrs. Brown, Susan Nipper, Mrs. Pipchin, Mrs. Wickam 等 Mrs. Gamp まがいの女達も多いし，Sol Gills, Walter Gay, Captain Cuttle, Major Bagstock, Bunsby, Polly Toodle, Mr. Toots 等々の善玉が夫々賑かに入り乱れてこれまでの作品に劣らず Dickens 的な散文世界を構成しているのである。逆に云えばその様な散文世界に Dombey 氏等の代表する懐疑の影を深く祕めた悪の様相と，格調高い海の抒情性とが調和よく調え合わされてこの傑作ができていると称する事ができるであろう。

Dombey and Son が，金の奴隷となる事によって人間がどの様な悲劇を生むものであるか，又それと対照して愛情がどれほど尊いものであるかという問題をテーマとして生れたものである事は明かであるが，次の *David Copperfield* が何を中心テーマとして生れたものであるかは容易に断定し難い。一人の惨めな少年の成長を描いたこの作品が，それほど

(1) *D.S.*, LVII

Dickens の手を離れてすっきりした芸術的な作品となっている証拠でもある。

この問題に関する Chesterton の次の様な解釈は興味深い。

... in this mixed and heated mood of anger and ambition, vanity and doubt, a new and great design was born. He loved to be romantic, yet he desired to be real. How if he wrote of a thing that was real and showed that it was romantic? He loved real life; but he also loved his own way. How if he wrote his own real life, but wrote it in his own way? (1)

Dickens に人並はずれた ambition や vanity があった事は想像に難くないが，たとえば，父が投獄され，自分は Warren's Blacking で働かねばならなかった暗い過去は殊更他人に洩す事を警戒した。vanity と云えば vanity とも言えようが，余りにも成功しすぎて発表の機会を失ったという事情も考え合わされよう。しかし *David Copperfield* でも度々繰返される様に，悲惨な生活から受けた屈辱（humiliation）に対する憤りは，直接 Chesterton の言う怒りとは結びつかないにしても社会政治に対する Radical としての憤りとなって深い所で結び合わされているものであろう。又直接怒りとなって現れないまでも人生や結婚や人類の運命等に対する懐疑が次第に暗さを加えつつあった。*Dombey and Son* による成功は大いに虚栄心を満足させ，益々野心を燃えさせたに違いないが，同時に怒りや懐疑はそのまま深さを加えつつあった筈である。後期の作品と考え合せる時，怒りと懐疑は一層強められ，野望と虚栄は名声の上でも又年令的にも下降線を辿って来るが，謂わばこれら四つ巴が結集され，調和を保った形ででき上ったのが *David Copperfield* であった

(1) *Charles Dickens.*, VIII

とする解釈も可能である。

しかも Dickens の野心や虚栄を理想的な形で満足させる上からも，自分の「真実」を土台にしようとした必然性を Chesterton は逆説的な方法ではあるがいみじくも指摘している。ゲーテの「詩と真実」の論法を借用するなら，詩人であろうとする態度 (to be romantic) と真実を語ろうとする態度 (to be real) を両立する為には自伝の形式を取る以外に方法がなかったからである。そして事実 Dickens はその事に成功している事も Chesterton は逆説的な表現方法でつけ加えている。It is not only both realistic and romantic; it is realistic because it is romantic.(1)

ありのまゝの経験や行動は断片的でこれをいかに忠実に集積しても不完全な物語の錯綜以外のものではない。然る可く分類し，これにふさわしい頭と尻尾を加える事によって，はじめて事実は真実となるのである。この事実を真実に高めるものが芸術であるとする Chesterton の考え方を最も満足させるものがこの作品であった訳でもあろう。

E. Johnson の様に，幼時の苦々しい記憶が斉す重圧から解放される為にこの作品を書いたとする解釈も可能である。たしかに *The Haunted Man* などにも過去の記憶の重圧に堪えかねた科学者を主題とし，これからの解放をひたすら希っているが，しかし結論はむしろその重圧を重圧と解しないで，これを許し慈もうとする大乗的な態度こそ重要な心構えである事を説く事で終っている。その様な意味では，もし E. Johnson の解釈が可能であるならば，過去からの解放というより，逆に過去への許容を積極的に行ったとする解釈も同じく可能であろう。過去の重圧に悩まされる悲劇の主人公に見立てて，憑かれた男 (haunted man) と見做す態度も充分許されると同時に，よし結果的には破れたとしても積極的

(1) *Charles Dickens*, VIII

な建設の過程を堂々と踏み上ろうとした征服の鬼にも似た逞しさを併せ持つ事は充分認められてよい筈である。作家的な円熟が，人にも隠さねばならなかった暗い過去を愈々征服するだけの自信をつけさせたと解して何の不都合もない。

David が生れた時父は既に亡く，間もなく Murdstone という男が新しい父となって現れるという物語の発端こそ違うが，その後の成長過程に於ける骨子となる事実は Dickens のそれとほとんど変らない。学校に一時やられるが母が亡くなるとロンドンに出されて Murdstone and Grinby's の酒倉で働く。下宿した先が Mr. Micawber 一家で，好人物で楽天家であり経済能力の全くない Mr. Micawber は作者の父を再現したものである。しがない労働に堪えかねて David は Dover に住むと伝え聞いている伯母 Betsey Trotwood を訪ねてロンドンを逃れるが，伯母は親切に David を学校に入れてくれたので暫く幸福な学校時代に恵まれた。しかし伯母の投資した事業が失敗するので David は Spenlow and Jorkins の法律事務所へ入って，Doctors' Common（民法会館）を中心に煩雑な訴訟事件や不合理な法律制度を見聞させられる。速記術を学んで議会の討論を記事にしたり，作品に筆を染めたりして次第に作家として認められ，経済的にも安定して来る。Spenlow の娘 Dora と恋して結婚生活に入ったが 'child wife' Dora との結婚は失敗に終った。Dora の死後，Dover に滞在した頃下宿していた先の Wickfield の娘 Agnes と結婚して幸福な生活に入るというのがその骨子である。Dora は初恋の女 Maria Beadnell であると言われ，Agnes は死んだ Mary Hogarth で Nell の再来と言われる。

この様な骨子に，たとえば残酷な Murdstone や Agnes の父に詐欺を働く Uriah Heep, 不良青年 Steerforth とそ

の恋人 Rosa Dartle 等の悪玉に，Mr. Micawber をはじめ女中の Peggotty やその兄，半狂人 Mr. Dick，倫落の女 Martha 等が入乱れてこの物語を構成している。どの小説にもまして悪の追求が脊面に押しやられている為に明るく，David の波乱の半生を忠実に描き上げようとする芸術的意図を中心として貫かれている事はこの小説の特長で，作品系列の上で独自の位置を保つ理由となっている。

これに関聯して特筆すべき事は，主観的な自分の経験が充分に客観化されているという事であり，Chesterton の表現を敷衍して言えば，事実が完全に詩化されているという事であろう。たとえば幼時の追憶が次の様な文章ではじまる。'I Observe' と題する第二章の冒頭である。

The first object that assume a distinct presence before me, as I look far back, into the blank of my infancy, are my mother with her pretty hair and youthful shape, and Peggotty, with no shape at all, and eyes so dark that they seemed to darken their whole neighbourhood in her face, and cheeks and arms so hard and red that I wondered the birds didn't peck her in preference to apples.

透視画法で見透した幼時の一番奥深い所に，母と女中の Peggottyが立っている。くっきりと見えるのは美しく若々しい母，その向うにぼんやりとしているのが Peggotty で眼のあたりがやたらに黒く，頬と腕とがやたらに堅くて真赤な事だけがはっきりしている。そう言えば小鳥は林檎をついばむ代りに Peggotty の頬でも腕でも何故ついばまないのか不思議に思ったものだ…。透視画法という方法を適用する事自体が事実を整理してこれに頭を加え尾をつける事に他ならない。追憶の鮮明な部分に夢幻のように霞のかかった部分を実に巧みに交錯させてどこまでが Dickens の実感であり，何

処までが創造であるのかの区別を見極めさせないまでに事実が想像力のるつぼで昇華されていると言ってよい。

If Falstaff is the greatest comic character in literature, Mr. Micawber is the greatest but one.(1) という Maugham の批評を俟つまでもなく，身近かな父の映像を完全に客観化し，芸術化した Mr. Micawber の例もその代表と言ってよい。

たとえば同じ喜劇性と言っても Weller 父子について言える事は彼等が Pickwick の世界に安住しきれず，そうでなくても最初から脆弱であったその構成の枠を破ってあたかもこれを無視するかの如くその楽天性，喜劇性の暴威を振うという事である。実はそこに却て荒削りではあるが *The Pickwick Papers* の生命力も考えられるのであって，ありったけの創造力を天真爛漫，満喫しているこの作家の若き日の姿が考えられる。喜劇性に対するその創造力があり余って，構想力がこれに追いつき得なかった或るもどかしさが感じられるほどである。これに反して Mr. Micawber は *David Copperfield* の中で自己に課せられた任務を実に過不足なく果すと同時に，自らに与えられた生命力を微塵も損する事なく享受し尽しているのである。fiction の枠の中にぴったり当嵌った役割を演じて些かの破綻も見せないのと同時に，彼がその枠の中で動き始めると自らその構成自体も彼の行動の方向に導かれる観さえ呈して来る。謂わば人物と構成との微妙な交錯と調和が Mr. Micawber の場合には見られるのである。

ましてや Mr. Swiveller に見られる破綻などは見られない。野放図でとてつもなく威勢のいい青年が，*The Old Curiosity Shop* の枠にしばられて次第に常識的な青年に萎縮して来る変化は，現実には充分あり得る事実であるし，又小説のテーマともなり得るには違いないが，凡そ Dickens

(1) S. Maugham: *The Novels and Their Authors* (1954), VI

的な喜劇人物の生き方とは縁遠いものであった。

Tom Weller が身近かに 'sorrow,' 'adversity,' 'distress' と具体的に表現した現実世界は Mr. Micawber によれば乙に取済ました 'vicissitudes'(1) という言葉で抽象されるが，見かけは立派でも，内容は結局 pecuniary liability, pecuniary involvement, pecuniary difficulties, pecuniary embarassment 等々にすぎず，それも原因と言えば本人が見栄坊である上に経済観念をほとんど持合わせていないからにすぎない。それを 'vicissitude' と観ずる所に Mr. Micawber の見掛倒しが始まる訳であり，そんな達観した素振りの表現はしてみるものの，底を叩けば ... setting all the good of the world against the evil, it is a very decent and respectable sort of world after all.(2) という楽天観が安坐して居り，それもいつかはいい事がある (Something will turn up.)(3) という雲を摑む様な空頼みに裏づけられているに過ぎない。見かけは堂々としているが内実はまさに風前の燈の様な存在である。職を何回変えてみても一向に肝腎の何かは起きないのである。

David が独りぼっち ロンドンに 届けられるなり，酒瓶にレッテルを貼ったりキルクを詰める仕事を教えて貰っていると Micawber 氏がはじめて現れる。Murdstone 氏の依頼で拙宅に下宿して貰う事になったが，はじめてのロンドンだから道に迷ってはいけないので仕事の済む頃再び案内に来ましょう，云々の挨拶をする。

Under the impression that your peregrinations in this metropolis have not as yet been extensive, and that you might have some difficulty in penetrating the arcana of the Modern Babylon in the direction of the

(1) *D. C.*, XXXVI (2) *ibid.*, XXIX
(3) *ibid.*, XII, XVII, XXVII, XXVIII, XXXVI, LII, LIV

City Road...[1]

威風あたりを圧する高飛車な調子で畳みかけられてはDavidはもとより周囲の大人も煙に巻かれたに違いないが，度肝をぬかれてキョトンと見据える少年にわざと技巧を尽して知識人ぶる中にうかがわれる人間 Micawber 氏の喜劇性は既に充分体現されている。

その様な虚栄と空威張と紙一重の所で好人物そのものの Micawber 氏が存在する。それも家族は放って置き，家族以外の者の為なら水火も辞せない親切ぶりである。...he is a most untiring man when he works for other people.[2] と言われるほどで，debtor's prison に繋がれても自分の事は棚上げで他の囚人の釈放運動に狂奔し，[3] 騙されているとは露知らず悪人 Uriah Heep の為に献身の努力を捧げる。[4]

同時に正義観に強く勇敢な事に関しても人後に落ちない。Uriah Heep に欺かれていた事に気づくや否や，その陰謀を暴露する為にはすべてを投出して獅子奮迅の活躍をする。その為に「再び投獄されようと，妻子が餓死し，窮乏のどん底に身を曝して死ぬとも」英雄 Nelson の如く自分が「英国と，故郷と，美の為に」(For England, home, and Beauty)[5] 尽した事が認めて貰えさえすれば欣然として辞さない人間である。ましてやその Heep の悪謀を列挙する間に，例えば—

This was bad enough; but, as the philosophic Dane observes, with that universal applicability which distinguishes the illustrious ornament of the Elizabethan Era, worse remains behind![6]

等と引用されては，上掲の S. J. Arnold[7] の *The Death of*

---

(1) *D. C.*, XI, peregrinations in this metropolis（首都での遍歴）という表現は Irving からの借用らしい。cf. *Sketch Book* I, 151

(2) *ibid.*, LIV (3) *ibid.*, XI (4) *ibid.*, XXXIX

(5) *ibid.*, LII (6) *ibid.*, LII (7) (1774—1852)

Nelson の詩句は元より Shakespeare までもが彼の為に用意されていたかの如き観を呈して，顔色なからしめられている。

それでいて又この上なく臆病で気弱でもある。借金取に追われると鼠の如く小心になり，すぐさま‘razor’‘knife’等と口走り，一寸した事にも陳腐な涙が迸り(1)‘flood of tears’(2)が連発されるが，それが急転直下，カラリと晴れ渡る変り身の鮮かさによって救われる。今迄泣崩れていたかと思うと，急に高歌哄笑，踊ってみたり，得意のパンチ酒製造に打興じてみたり，紳士よろしく帽子を斜に口笛まじりに瓢々と散歩に出かけるのである。

臆病，正義感，無責任，勇敢，虚栄，親切等々相矛盾する性格を雑然と一身に集めて，僅かに変り身の早さで世の中を生き延びている楽天家である。しかし時折見せるその心情の美しさは，その様な矛盾を矛盾のまま，人間 Micawber を最も裸の形で捉えたものと言えよう。

David がやがて妻となるべき Agnes の安否を尋ねた時の事である。

‘... My dear Copperfield, she is the only starry spot in a miserable existence. My respect for that young lady, my admiration of her character, my devotion to her for her love and truth, and goodness !... Take me,’ said Mr. Micawber, ‘down a turning, for, upon my soul, in my present state of mind I am not equal to this !’

We wheeled him off into a narrow street, where he took out his pocket-handkerchief, and stood with his back to a wall.(3)

Agnes の「愛情と誠実と善良さ」を想い浮べただけで感極まって泣かざるを得なくなるのである。しかもその場で涙

(1) *D. C.*, XII (2) *ibid.*, XILV (3) *ibid.*, XLIX

を浮べるだけで済すとか，話題をそらして誤魔化すなどという大人の技術は弁えていない。生理作用と同じく涙が流れそうになった以上は流すのでなければどうにも処置できない。子供の泣くという習慣が社会的な訓練や教育を受けないでそのまま成人になるまで残っているというのが Micawber 氏の涙であろう。小用を達するが如く，ちょっと暗い所をと案内を乞わねばならぬほど，それほど本能的，生理的な形で泣くという作用が捉えられている。たしかに鼻持ちならぬ演技と一笑に附す事もできようが，これほど自然で純粋な演技はないという事も事実である。陳腐であるべき行動に些かの誇張や感情過多も見られず，純粋な形で芸術化されているからであろう。牢獄に訪ねた David と相擁して泣くシーン(1) をはじめ，その様な古典的雰囲気を泣くという行動が醸している例は少くない。むしろ泣く事は陳腐であるとする吾々の考え方自体が Mr. Micawber の前では誤っているようである。Something will turn up. と何かを空頼みするのでなければ真実生きて行けない儚いこの人生では，刻々の些事が，実は凡人には測り得ぬ重大性を持つ事も反省させられざるを得ない。The die is cast — all is over.(2) という認識は Mr. Micawber の如くいかに些細な不如意についても持つべきで，これを誇張であると解するのはむしろ凡人の不見識と怠惰慾のせいかもしれない。

The result is destruction. The bolt is impending, and the tree must fall.(3)

...hope has sunk beneath the horizon, and the undersigned is Crushed.(4)

...my brightest visions are for ever dispelled... my peace is shattered and my power of enjoyment

(1) *D.C.*, XI (2) *ibid.*, XVII, XXVIII
(3) *ibid.*, XVII (4) *ibid.*, XXVIII

destroyed ... my heart is no longer in the right place ... and I no more walk erect before my fellow-man. The canker is in the flower. The cup is bitter to the brim. The worm is at his work, and will soon dispose of his victim. The sooner the better.(1)

等々真にすぐれた識者の持つ哲学的な認識を常識人の浅才で曇らされる事は Mr. Micawber にとっては寸時もなかったといってよい。これにまさる哲学者はいないとも言えよう。それだけに又 Something will turn up. という期待が叶えられそうな気配でもすれば，常人の喜び様等超越した恍惚境に忽ち連込まれるのも当然といってよい。

... the cloud has passed from the dreary scene, and the God of Day is once more high upon the mountain tops.(2)

'It has been my lot,' he observed, 'to meet, in the diversified panorama of human existence, with an occasional oasis, but never with one so green, so gushing, as the present!' (3)

The cloud is past from my mind.(4)

... the time is come when the past should be buried in oblivion.(5)

その様な哲人 Mr. Micawber にとっては，職を求めて不安な状態でロンドンから僅かカンタベリへ移住する事は一大事件であり，逆にしっかりした見透しのつく移住である限りオーストラリアへの移住は全くの些細事にすぎなかったのも当然である。時間空間の観念は Mr. Micawber によってまさしく哲学的に把握されていたからである。喜劇人 Micawber 氏はそのまま真の哲学者でもあった訳である。

(1) *D. C.*, XLIX (2) *ibid.*, XXXVII (3) *ibid.*, XLIX
(4) *ibid.*, LII (5) *ibid.*, LIV

世の‘vicissitude’に対して，これを知識として持合わしながら，現実にはこれに毫も禍わされる事なく超然と恬淡として生き得た Weller 父子は嘶に見られる不可思議な生命力に溢れているが，現実にその‘vicissitude’に足をさらわれながらアプアプと浮きつ沈みつしながら不思議に生き永らえる Mr. Micawber には，Weller 父子とは全く異質な生命力が感じられる。法律などの手の届かない伝説的な‘vitality’を持っていた Weller 父子に対して，Mr. Micawber は最初から最後まで徹底的に苦められる現実世界の住人であった。オーストラリア渡航の船上にまで再三官憲は彼を逮捕に押寄せるが，しかしそれでも奇妙に彼はその虎口を逃れて生き得るのである。彼の場合も結論的には Weller 父子と同じく，法律など無視して永生をかち得たと称し得るかも知れないが，彼の場合恵まれているのは伝説的な生命力ではなく，喜怒哀楽の諸情を最大の振幅を以て経験しながら生き永らえている事である。この上なく愚かな生き方であると同時にこの上なく賢明な生き方，この上なく散文的でありながらこの上なく詩的な生命力と呼んでよく，その意味であくまでもヒューマニスティックな喜劇的人間像となっているのである。

夫に似て Mrs. Micawber も極めてすぐれた弁舌に恵まれているが，その逐一を比較すればその散文性，誇張性，排他性等は余りにも明白で，世上一般の女性像の戯画（caricature）としてはすぐれているとしても，それを更に深化して，人間性そのものの真実を浮彫りにできるまでの芸術性は具えていない。創作上では *The Old Curiosity Shop* に於て既に妻と別居する Mr. Quilp を描いた後でもあり，それより更に根本的には現実の母や妻に対して，父をそのまま写したと言われる Mr. Micawber に見せた無限の愛情と，併せて純粋な客観性とを女性に対しては持合わす事のできなかった Dickens の不幸の一例をここでも吾々の眼前に提出された形

である。

恍惚癖，誇張癖，催涙癖，舞台意識等 Dick Swiveller の人間像を特長づける多くの点で，Mr. Micawber との類似を求める事は極めて容易である。極端に言えば，若き Sam Weller が成長して Dick Swiveller になり，更に長じて Mr. Micawber ができたと考える事も容易である。自己表現の為の最上の手段として Mr. Micawber が書簡（'epistolary communication'）(1) の形式を発見したのと軌を同じくして，その前段階として，Dick Swiveller は天井を睨めながら独白を演ずる方法を発見している。書簡を通じて Mr. Micawber が遺憾なく自己表現をなし得た如く，Dick Swiveller は独白の形式によって「骨董屋」の舞台上に最大の演技を残し得ているのである。演技である以上はパントマイム(2)が附随するのも当然である。独り酒を飲む最中も独白の赴く所によっては他人に盃を廻す所作も忘れない。(3) 自分を捨てて他に移った恋人を想って遣瀬なさ果しなく，あれこれと独白を続けるうちにその恋人が既にその新しい相手の前で幻滅の悲哀を感じているであろう事を理由もなく考えて，失恋の遣瀬なさが忽ち安堵と同情に急転する。その底ぬけの楽天性も Micawber 的と言えるであろうが，... by this time, I should say, the iron has entered into her soul. It serves her right.(4) と独白まじりに，鏡のかけらに延びた頬髭を横から写して，これを満足げに横目づかいに覗く所作は，恋に身を焦す青年 Swiveller を表現して余す所がない。

Melting from this stern and obdurate, into the tender and pathetic mood, Mr. Swiveller groaned a little, walked wildly up and down, and even made a show of tearing his hair, which, however, he thought better of,

(1) *D. C.*, XLIX (2) *O. C. S.*, LVII (3) *ibid.*, VII
(4) *ibid.*, LVIII

and wrenched the tassel from his nightcap instead. At ast, undressing himself with a gloomy resolution, he got into bed.(1)

やるせなくて髪をかきむしる所作は，この様な青年にとっては極めて自然であるが，それが痛さを伴うとあっては，ナイトキャップの飾り総を代用品に使う所作となるのも当然と言ってよい。舞台上の道化はここに到って完成されていると称すべきであろう。

先述の様に構成上の多くの破綻は見せながらも，Dick Swiveller は兎も角も Dick Swiveller としてまぎれもなく生き続けて，この様な典型的なすばらしい演技を見せるが，併しこれを Mr. Micawber のそれと比較する時，余りにも瞬間的断片的であると同時に，やはり見逃し得ない事は余りにも戯画的であるという事実である。戯画である以上に人間的であるのが Mr. Micawber であるとするなら，人間的である以上に caricature であるのが Dick Swiveller であると言えよう。ここでも Weller 父子から Mr. Micawber への橋渡しとしての過渡期的な意味で Dick Swiveller の人間像が考えられるが，その様な差異を生んだ理由としては，やはり天才 Dickens にも年齢的な経過が必要であったという事，天国の住人 Weller 父子によって代表される底ぬけの楽天性に裏づけられた喜劇が，次第にその超人的な生命力を喪失しこそすれ，その写実性を増す過程としてはどうしてもその中間に Swiveller 的な中途半端な戯画の段階が必要であったという事等を指摘しなければならぬであろう。文字を通して築き上げられる人間像が持つ不思議な逞しい Weller 父子の生命力は次第に写実性の衣裳を着け加えられる事によって，即ち Swiveller を通じる事によって，Mr. Micawber が完成されて来る。天国と現実世界の奇妙な混淆から生れた畸

(1) *O. C. S.*, LVIII

形児とも称すべき Swiveller を経て，完全な肉と血を備えた現実世界の住人でありながら，片足は常に天国にあって永遠の生命を稟けた Mr. Micawber が誕生すると言ってもよいであろう。現実には不甲斐なく，だらしない父であったに違いないが，この世で最も熟知している筈のその父をこの様な形の虚構（fiction）に仕上げる能力はやはり天才的と呼ぶ以外に解釈の方法はない様である。身近かな好悪の感情の跡方など塵埃も留めない Micawber 氏は事実を真実化した最もすぐれた例の一つであろう。

VIII　ヒューマニズムと社会悪

—— *Bleak House*
—— *Little Dorrit*
—— *Great Expectations*

Dombey and Son が金の斉す害毒を攻撃したのに対して，法（law）を対象にしたのが *Bleak House* であった。法は却て人間を不幸にする（it will make us unhappy）[1] ものではないかというテーマを中心にして，法を操る側の人間が生む悪と，その犠牲になる側の人間の悲惨を，今迄以上に周到で大規模なスケールで追求した作品である。分量も *Dombey and Son, David Copperfield* と等しく最長篇となっている。同時に物語も複雑多岐で雑多の要素を含んでいる点でも代表的である。

財産配分問題で訴訟中の事件 Jarndyce and Jarndyce に巻込まれた未成年者 Richard Carstone とその従妹 Ada Clare は事件が解決しないまま遠縁の後見人 John Jarndyce に引取られて生活しているが，やがて恋に落ちてひそかに結婚した。

Richard は職についても安定せず，事件解決の暁に入るべき財産目当てに無為の生活から次第に堕落し，やがては命を消耗して死ぬ。その時にやっと事件も解決するが蓋を開いてみると永年に亘る訴訟事務の経費に全財産が費されていた。事件を永びかせて高等法院（chancery）の役人達は生活の維持はできても，その為個人の莫大な財産は消滅し，あまつさえその犠牲になる人もある訳である。

(1) *B.H.*, XIV, cf. V

一方莫大な世襲財産を持つ准男爵 Sir L. Dedlock は二十年も年下の美しい夫人を持つが，上流社交界に君臨する夫人は暗い過去を貴族的な取澄ました態度の下に巧みに今日まで隠して来た。しかし Jarndyce and Jarndyce 事件に関聯してその過去が明るみに出る。若い時 Captain Hawdon という男と不義の結婚をして一女をもうけた事である。その男は航海で死んだ筈であったが実はロンドンでしがない代書人をして居り，娘 Esther は Jarndyce に拾われて Ada と一緒に可愛がられて育っていたのである。偶々 Dedlock 家の顧問弁護士 Tulkinghorn が見せてくれた書類に，昔の恋人 Hawdon の筆蹟を発見してすぐ様彼を求めて探しに出て，偶然会った物貰いの掃除人 Jo に案内して貰うが，やっと探し当ててみると昔の夫は餓えて阿片の為に既に息絶えていた。この事を嗅ぎつけた Tulkinghorn は Jo が白痴であった為に逐一を容易に確認できたので夫人を恐喝し始めた。しかし明日こそ Sir Dedlock にあばくと恐喝されたその夜，逆に Tulkinghorn が何者かに殺された。巧妙な探偵 Bucket のお蔭で犯人は以前の夫人の召使であった事が分ったが，夫に昔の秘密が探知された事を知って絶望した夫人も夜陰に乗じて邸を逃出し，夫や Esther 必死の捜索にも拘らず昔の愛人の葬られた墓地で死んでいた。

一方 Esther は老いた John Jarndyce から特別に愛され，遂には結婚を申出られるが，感謝の気持から一度はそれを承諾したものの，Woodcourt という若い医者を愛している事を Jarndyce に気づかれ，Jarndyce の方から辞退されて Woodcourt との幸福な結婚生活に入る。訴訟事件を背景にして Lady Dedlock の悲劇と娘 Esther の恋愛を織りまぜて入組んだ筋となっている。

第一回の訪米中留守番を兼ねて子供の相手をした事から家族と同じ屋根の下で暮す様になった妻 Catherine の妹

Georgina[1] は死んだ Mary に一番似ていたと言われ，Dickens にとっては或る意味では妻の Kate 以上にかけ替えのない存在になっていた。病気がちな Kate に代って身辺の事一切を処置したし，子供達の養護教育についても Kate 以上に有能であり，とりわけ家計の面では安心して一任できた。その献身と愛情は Dickens の死ぬまで続き，妻と別居を始めても Georgina だけは Dickens から離れず，数々のスキャンダルの材料ともなったがよく生涯を Dickens の為に捧げた女性であった。Esther の献身や愛情は *David Copperfield* の Agnes と同様 Georgina が原型とされているが，Esther 自身が 'narrator' となって物語を進める部分，Jarndyce の庇護を受け始めてからの家計の切盛り，恋愛の仲介[2]等には理想化の意識が強く働きすぎて，子供らしさ自然さが失われるという Dickens の理想の女性に共通する弱点が明瞭である。しかしこの小説で演ずる役割が非常に大きい為にそれなりにしっかりと構成された女性像となり得て居り，Nell 或は Little Dorrit についで Dickens の代表的な理想の女性像の一つとなっている。天使の様な美を周囲にふり撒くと同時に Your mother is your disgrace.[3] という運命的な不吉な言葉を背負わされたままで成長し，愛され，愛して行く事がたえず物語のサスペンスを背負わされた形で，彼女の存在を一層印象的にするのである。次第に Dedlock 夫人との関係が暗示され始めてから，ふと二人が出遇って互が異様な感動に打たれ，[4] 又他人からよく似ている事を指摘される様になってひそかに娘の行末を案ずる夫人[5]と，遂に包みきれず森の中で娘に真実を告白する[6]までの天使と罪の子という二重性を負わされた Esther の描写は複雑

(1) Georgina Hogarth (1827–1917) cf. A. Drain: *Georgina Hogarth and the Dickens Circle* (Oxford) (1957)
(2) *B.H.*, XIV (3) *ibid.*, III (4) *ibid.*, XVIII
(5) *ibid.*, XXIX (6) *ibid.*, XXXVI

な構造の中で興味深く追求されて成功した女性像となっている。

複雑さ，或は巧妙に配置された人物という面ではたとえばCarstone もその好例で，訴訟に人生の方向を見失い，医業，法律，軍隊と転々し，懐疑から次第に自暴自棄に，そして遂には恩人の Jarndyce さえ怨み始めて自ら墓穴を掘る。善人が運命的な法律の桎梏に身動きできなくなって，人間的な矛盾と苦悩を深めて行く，その追求の徹底さは，たとえば *Martin Chuzzlewit* 等に見られる偶然的な事件の連続と比較して余程深化され必然化されて来ている。死の直前妻に洩す懺悔の言葉—— I have done you many wrongs, my own. I have fallen like a poor stray shadow on your way, I have married you to poverty and trouble, I have scattered your means to the winds...(1)

等に盛られた人生を象徴する深刻な言葉はそのまま法律がCarstone に与えた罪業にも言及するものであり，法律への呪詛と人生への悔恨とが一つの表現に結びつけられて荒涼たる (bleak) 深い内面世界で沈痛なうめき声となって表現されている様である。

生涯 Chancery の餌食となってどうにも身動きできなくなった挙句，半狂乱になって裁判に憑かれ，あらゆる裁判に顔を出さずには生きて行けなくなっている老女 Miss Flite は，小鳥を愛玩しているが，裁判の生む罪悪を小鳥の呼び名にしてせめてもの鬱憤を晴らすよすがとしている。Hope, Joy, Youth, Peace, Life 等の期待を持たせるのはよいが，結局は Dust, Ashes, Waste, Want, Ruin, Despair, Madness, Death(2) 等の結論を得るのが関の山と言うのである。

Captain Hawdon(3) は貧困にうらぶれて阿片に死に，

(1) *B. H.*, LXI　(2) *ibid.*, XIV
(3) *ibid.*, X, XI

Gridley[1] は訴訟の犠牲になって狂乱の死を遂げ，無学文盲の乞食少年 Jo[2] は街にさらばう紙屑の如く無視されて死んで行く。

この Jo を紙屑の如く扱い，他人の弱点につけ込む事しか考えない弁護士 Tulkinghorn[3] が欺いた女に恨み殺されるのは当然としても，たとえば奇矯な古道具商 Mr. Krook の自然発火(spontaneous combustion)[4] という奇妙な死までこの小説には現れる。不吉な死が隅々まで浸透した作品と言ってよい。

その様な重い沈鬱の空気は開巻第一頁の有名なロンドンの霧の描写にも典型的に見られる。

Smoke lowering down from chimney-pots, making a soft black drizzle, with flakes of soot in it as big as full-grown snow-flakes—gone into mourning, one might imagine, for the death of the sun. Dogs, undistinguishable in mire. Horses, scarcely better; splashed to their very blinkers. Foot passengers, jostling one another's umbrellas, in a general infection of ill-temper, and losing their foot-hold at street-corners, where tens of thousands of other foot passengers have been slipping and sliding since the day broke (if this day ever broke), adding new deposits to the crust upon crust of mud, sticking at those points tenaciously to the pavement, and accumulating at compound interest.

Fog everywhere. Fog up the river, where it flows among green aits and meadows; fog down the river,

(1) *B.H.*, XV, XXIV (2) *ibid.*, XXXII, XLVI, XLVII
(3) *ibid.*, XLVIII
(4) *ibid.*, XXXII, 体内の自然発火によって焼け死ぬ現象であるが物議をかもしたらしく，これを認めない抗議に対して Dickens は Preface で様々の実例を挙げて反駁している。

where it rolls defiled among the tiers of shipping, and the waterside pollutions of a great (and dirty) city. Fog on the Essex marshes, fog on the Kentish heights. Fog creeping into the cabooses of collier-brigs; fog lying out on the yards, and hovering in the rigging of great ships; fog drooping on the gunwales of barges and small boats. Fog in the eyes and throats of ancient Greenwich pensioners, wheezing by the firesides of their wards; fog in the stem and bowl of the afternoon pipe of the wrathful skipper, down in his close cabin; fog cruelly pinching the toes and fingers of his shivering little 'prentice boy on deck. Chance people on the bridges peeping over the parapets into a nether sky of fog, with fog all round them, as if they were up in a balloon, and hanging in the misty clouds.

Gas looming through the fog in divers places in the streets, much as the sun may, from the spongy fields, be seen to loom by husbandman and ploughboy. Most of the shops lighted two hours before their time — as the gas seems to know, for it has a haggard and unwilling look.

この様な自然描写は田舎にある Sir Dedlock の豪壮な邸宅 Chesney Wold(1) や The Ghost's Walk(2) の鬼気迫る不気味な描写にも共通するが，とりわけロンドン場末の貧民窟 Tom-all-Alone's(3) の目を蔽いたくなる描写は凄愴である。訴訟の犠牲になった Tom(4) という男が昔は独り住んでいたのであろうが今では見る影もなくなった邸の跡に浮浪人が集る。所有は Chancery に帰しているが煉瓦がボロボロ朽ち

(1) *B. H.*, XL
(2) *ibid.*, XXXVI
(3) *ibid.*, XVI., XVII, XLVI
(4) *ibid.*, XVI

て崩れ，時にはその下敷になって死人さえ出る。荒廃の極に達したロンドンの一劃である。

Darkness rests upon Tom-all-Alone's. Dilating and dilating since the sun went down last night, it has gradually swelled until it fills every void in the place. For a time there were some dungeon lights burning, as the lamp of Life burns in Tom-all-Alone's, heavily, heavily, in the nauseous air, and winking—as that lamp, too, winks in Tom-all-Alone's—at many horrible things. But they are blotted out. The moon has eyed Tom with a dull cold stare, as admitting some puny emulation of herself in his desert region unfit for life and blasted by volcanic fires; but she has passed on, and is gone. The blackest nightmare in the infernal stables grazes on Tom-all-Alone's, and Tom is fast asleep.(1)

夜の闇が生き物の様に肉迫して来ると着々膨脹 (dilate) して空間の隅々にまで浸透する。浮浪人が集って焚く火が吐気を催させる臭気の中で不気味に燃えて周囲のおぞましい情景 (horrible things) にまばたく。ここを照らす月はもはや美しい月ではない。生物の住む事を許さず噴火に荒廃した月が，地上の一劃にもそれが再現されているわいと認めて，物憂く冷く凝視する。やがて月が落ちると不吉な夢魔がここに眠る Tom の亡霊を食み始めるのである。

しかしこの凄愴な廃墟は必ずや人類に復讐するであろう。黙々眠り続ける筈はない。とりわけこの現実を前にして論議するのみで何一つ具体的な処置を行い得ない政治や宗教に対して，風を使者に使って害毒を伝染病の如く蔓延させ obscenity or degradation, ignorance, wickedness, brutality(2) 等すべての悪徳をはびこらせるというのである。現

(1) *B. H.*, XLVI (2) *ibid.*

に Howard もその犠牲になって生命を失い，ここをねぐらとする Jo もその使者の一人で，遂には Charley や Esther までも巻添えを喰ってその美貌を疱瘡[1]の為に失わねばならなくなった。

Oliver Twist で紹介された貧民窟や盗賊の巣窟もこの Tom-all-Alone's とは比較にならない。悪と病毒が生きて人類への復讐の機をねらっている凄愴さを表現し得ているからである。

生きて復讐をねらっているというのは，Dickens 自身の筆力がその描写に完成された形で示されているという事と併せて，Radical としての文学表現が結局ここで尽きるという事でもある。いかに改革を叫び，政治宗教の無能を攻撃しようとも，それが文学表現という形に於てなされる以上は，この様な形で読者に訴える以外に許されぬという事である。

...In the midst of which dust and noise, there is but one thing perfectly clear, to wit, that Tom only may and can, or shall and will, be reclaimed according to somebody's theory but nobody's practice. And in the hopeful meantime, Tom goes to perdition head foremost in his old determined spirit.[2]

修復の見込は理論的にはできても実施が伴わない。国会で騒ぎ立てても結局はこの事だけしか明かにならない。世人はそれでも何とかなるだろうと期待はしているが，Tom の方では愈々意志強固に破滅に向って真しぐら突進むというのが現実である。政治家に憤慨しても表現としてはこの様な諷刺をまじえた呪詛の形を取る以外に方法はなく，或はその実情を訴えて啓蒙を待つ以外に方法がない訳である。金の為に盲目にされ易い人類を嘆き，愛情の尊さを謳歌しようとした *Dombey and Son* の段階と次元的には異る所がない。悲劇

(1) *B. H.*, XXXI, XXXVI　　(2) *ibid.*, XLVI

を嘆いた態度に対してこの小説では，政治や司法の世界に対する悲憤慷慨を徹底した形で掲げたと言えよう。

愚かな世情を諷刺し攻撃する態度もこの作品では徹底している。慈善を売物にしてそれを吹聴する事を得意とする似而非慈善家 Pardiggle 夫妻(1)もそうであるが，アフリカに余剰人口を移民させ，コーヒーを栽培し土人を教化しようとする夢の様な事業にうつつを抜かし，却て家族を悲惨と貧困に陥れる Mrs. Jellyby(2) の悲喜劇はその代表と言ってよい。Chesterton の様に彼女を Dickens 創作の女性中最も芸術的に完成された一人と考える見方も許されるほどである。

法律の影響で，Esther に対する自分の恋心にまで法律的な処置を加えて法文化するのでなければ気のすまぬ書生Guppy(3)や，奥さんの尻に敷かれながら，その事に気づかぬ開業医Badger氏(4)，やかましい奥さんに叱られ通しで，ろくろく物も言えず，せめてもの感情表現を専ら様々の咳払いによって果す法律書類代書人 (law stationer) Mr. Snagsby(5) 等々従来の Dickens 的なグロテスクな人物も依然多いが，しかし彼等の役割はすべて背面に押しやられた形で，刺々しく沈鬱な事件や人物が専ら前面で主導権を握って活躍する。

登場人物として文学史的な意味で忘れる事のできないのは L. Hunt が Mr. Skimpole となって登場する事である。才気煥発，しかも感傷的で楽天的な紳士である。

'Go your several ways in peace! Wear red coats, blue coats, lawn sleeves, put pens behind your ears, wear aprons; go after glory, holiness, commerce, trade, any object you prefer; only — let Harold Skim-

(1) *B. H.*, VIII, XXX
(2) *ibid.*, IV, V, XIX, XXIII, XXX, XXXVIII, L, LXVII
(3) *ibid.*, III, IV, VII, XXXIX, XLIV, LIV, LX
(4) *ibid.*, XIII, XVII, L
(5) *ibid.*, X, XI, XIX, XX, XXV, XXXIII, LIV, LIX

pole live!'(1)

さあ，皆さん何とでも勝手に生きなさるがよい，偉くなろうが金持になろうが何なりと勝手になりなさい。ただ私だけは忘れずに生かせて下さいよ。というのがその身上である。これにまさる楽天思想はないであろう。迷惑するのは氏が独立しないで Jarndyce 氏に何も彼も負いかぶさって生きている事である。金と時間の観念は全くの零で，文学，音楽，絵画等芸術の名のつくものに関しては天才的であり乍ら特に金に関しては見境がつかず，絶えず借金に追い廻され，時には Micawber 氏と同じく牢獄にも入っては Jarndyce 氏に迷惑をかけるのである。自らも言う様に世間の事は一切分らないのだから皆さんが私を生かせてくれるのは当然である，という暢気な徹底した論法も可能になる訳である。

Skimpole 氏が現れるとすぐ様 L. Hunt である事が読者に探知され，この偉大な先輩に対する迷惑や思惑から Forster はじめ忠告する者も多く名前の Leonald を Harold に変えたり，挿絵の人相を変えたり，その性格自体も途中から余程変化させた形跡が明かである。

その様な思惑はしかし結果的には悪かった。性格の変化が芸術的な意味での一貫性を失った事がその最大の理由であるが，同時に Dickens の個人感情を非常に窮屈なものにしたらしく，性格を変えて L. Hunt らしくない人物にすればするほど，Hunt に対して抱いていた尊敬や思慕の念が曲解され歪められた形で受取られるという矛盾があった。世間知らずで嬰児の様に明るい楽天家が次第に陰険さを加え，エゴイストになり，最後には折角 Esther が病む Jo を家に連帰ったのにうかつにその逃亡(2)の加勢などして一同に迷惑をかける手足まといの存在になるが，その様な欠点の明かな Skimpole 氏と実在の L. Hunt と Dickens との関係が様々の臆

(1) *B. H.*, VI, cf, XLIII　　(2) *ibid.*, XXXI

測を生むのである。

二人の交際期間は Forster とのそれにも劣らず，文壇の第一人者であった Hunt から既に無名の頃から様々の影響[1]を受けていた事を自らも認め，貧困を耳にしては拠金募集の為の素人芝居を行ったほどの尊敬を捧げた間柄で，自分だけでなく万人から尊敬を受けた本人 (admired original)[2] を戯画の材料にした事を特にその死に当って強く悔いている。結局は良い面だけが L. Hunt を模倣したもので，悪い面は全然別人であった訳であるが，世間からの誤解はまぬがれず，L. Hunt の側でも Dickens の側でも大きな迷惑事となると同時に，芸術的なマイナスという意味でこの作品全体への影響も少くなかった。

中期の *Bleak House, Little Dorrit, Great Expectations* の三作品は芸術的な意味で何れ甲乙のつけ難い傑作である。迸る生命力が，明暗調和を保った物語の中に結晶したのが *Dombey and Son* であり *David Copperfield* であるとすれば，その明るさ或は生命力の輝きが爾後次第に影を帯びていぶし銀の光沢を作品毎に増して来ている事が指摘されよう。しかしその様な変化は芸術的価値の問題とは別問題である。構成に関しては同じ完璧さを持ちながら *Our Mutual Friend*[3] になるとその暗さは余りにも沈鬱で，ミステリーを巧妙に展開する事が第一眼目となり，それだけに所謂る肉づけに対する眼目が薄れて来ている事も指摘できよう。しかし作品の価値判断は読者による面も強く，Dostoevsky 的な暗い粘液性の好ましい人にとっては *Our Mutual Friend* を最高傑作と呼ぶ事も可能であろうし，最後の未完作品 *The*

(1) E. Johnson: *Dickens*, vol. 1, III, 3
(2) *Collected Papers*: II, 14–7 *All the Year Round*, "*Leigh Hunt, a Remonstrance*" (Nov. 1859)
(3) 1864–5

Mystery of Edwin Drood[1] は身の毛もよだつ不気味さとミステリーとしての興味の為にそれだけ重要視される事も充分可能な事である。

その様な晩年の二作品に較べて *Bleak House, Little Dorrit, Great Expectations* 等はまだつきつめた暗さにまでは到って居らず，それなりに円熟した健康さも保たれていてより広い読者を得る条件となっている。とりわけ *Great Expectations* では *David Copperfield* で見せた具象化，客観化が完璧な形で展開されている意味で，よりすぐれた芸術が完成されていると見る事もできるし，事実フランス等では最大の読者を得ている様である。

Little Dorrit も劣らず傑作である。社会批評家的な意図が巧妙な物語の構成の中に吸収されている事もその理由の一つに挙げられるであろう。その事は *Hard Times*[2] と比較すれば最もはっきり言える事で，批判的な意図が強すぎて小説の構成は犠牲となり，二次的にしか考えられていないのと対蹠的である。有名な繁文褥礼省 (Circumlocution Office) への怒りをこめた諷刺や，お金の虜となる父 Dorrit の悲劇もこの小説では程よく調和を保ってその所を得ているからである。理想の女性が相も変らず紋切型で人間性に欠ける点の多い事は事実であるが，Little Dorrit は Esther 以上に主要人物として丹念に写実的に描きあげられている事も一つの理由で，必ずしも完璧ではないまでも，感傷を裸の形で露呈した Nell を経て Florence Dombey, Agnes, Ada Clare 等に散見された Mary Hogarth がより完成された形で Dorrit に客観化されている事は事実である。あれほど熱烈に恋した初恋の Beadnell にはこの小説を書き始めた1854年のはじめ二十数年ぶりに会っていた。商人の妻として二人の娘の母親となっている Beadnell であったが，この再会は

(1) 1870　(2) 1854 分冊月刊 *Little Dorrit* の前年に当る。

Dickens に致命的な打撃 (fatal blow)[1] を与えた。美醜の問題以前に，理想の恋人がしがない一箇の女性になり下って満足している様を発見した時の幻滅は想像に余るほど痛々しいものであったが，その事がいち早くこの小説にも取上げられて Flora という女性に客観化されている。

幻滅を斉す人生のどうしようもない暗澹さは次の *Great Expectations* で最も典型的な形で表現されるが，この小説でも人生の孤独や非情，生命の儚さ等と結び合わされて強い表現を得ている。政治の愚劣，世間の薄情，人生の非情等という問題は，個人の愚劣さ，生命の空虚，孤独等と決して無関係のものではなく，これらの問題が一貫した物語に裏腹にない合わされて調和よく流れていると言えよう。

Circumlocution Office という官庁はあらゆる部局の総元締めをする役所で，苦情を訴える為にも，新しい事業を始めるにも，或は裁判の異議を訴えるにも，すべて個人が何かを行おうとする時には必ずこの役所を経なければならないが，書類の手続きが煩瑣なばかりで結局結論が出ない仕組みになっている。Chancery で裁判が永引くのと同類である。理由は簡単で国家的見地から How Not To Do It という事がここではモットーとなっているからである。下部の部局から要求が出てもこれを揉み消すのが最上の方法である。駈け出しの政治家は行動的であるが，本物の政治家は決してそんな事をしない。How Not To Do It を最高理念としているからである。

Dorrit 氏はお金を融資した相手が失敗した為に罪を着せられてもう二十数年間 Marshalsea の牢獄に住んでいる。その様な不合理は許されぬとしても現実にはあり得るというのが二十世紀の今日でも真実である。最後は正邪がはっきりする事は信用できるとしても *Bleak House* の場合と同様，ど

(1) *L. D.*, Bk. I, XIII

の様にも永引かされ，経済的にも普通の財力ではついて行けないのが現実である。*Bleak House* でその様な制度が生む悲劇を描いたという事は，それだけその様な社会悪を憎みこれを攻撃しようとする意図が Dickens に明かであった証拠にもなるであろうが，*Hard Times* の経験もあってか *Little Dorrit* ではその様な悲劇的な面が更に薄れて，人生の実態を達観しようとする態度が明かである。たしかに Circumlocution Office の機構に便乗して個人の権勢を増す事しか考えない政治家達も大いに攻撃さるべきであるし，又裏側に廻って姑息な手段で甘い汁を吸う個人も憎んで余りがあるであろう。しかしその何れもどの様に憎み槍玉にあげたとしても文学の世界で解決は何処にあるというのであろうか。今迄 Dickens 自身が生命を賭して戦って来た問題に違いないが，そしてそれは最後まで続く筈の謂わば Dickens の土根性でもあるが，その表現態度は可なり変化を見せて来ているのである。*Little Dorrit* ではその様な社会悪，個人悪を攻撃すると言うより，それを通して人生を観じ，人生の意味を考えようとする態度に移っている事がそれである。積極性が薄れて幻滅という面の人生の様相が Dickens に重くのしかかって来る様になっている事実と，芸術的な客観化の意図や技巧が益々徹底して来ているという二つの事実が並行して考えられるであろう。Flora の客観化と同じ事は牢獄についても指摘できる事で，この小説ほど完全な牢獄の描写はない。描きあげられた牢獄はそのまま人生が牢獄ではないかと考えさせるほどの象徴性と徹底さで描かれているのである。

Little Dorrit はその様な犠牲になった父の子として獄中で生れた娘である。恥多く貧しい身の上にも拘らず，母の亡きあと兄や姉にまして家族の中心となって働き，家計を支え父のよき伴侶として働くが，偶々長く埋れていた遺産相続が父の名義になっている事が発見されて出獄が許される。出獄

した父はお金を持つと急に別人となり，高慢で人情を解せず愚かしい人間に堕して死んで行く。Little Dorrit は幼時から親切にしてくれた Arthur Clennam と結ばれて幸福になるというのがその梗概である。

Great Expectations で Miss Havisham として完成される不気味な型の女性が，その前段階としてこの小説では Arthur の母 Mrs. Clennam となって現れる。夫の死後は半身不随にも拘らず支那貿易をはじめ大きな事業を継ぐ腕利きであるが，Dorrit 一家の受けるべき遺産をもみ消しにして自分のものとしている腹黒く陰険そのものの女性である。Arthur は自分の子供の如く装うているが，亡夫が不義の女に生ませた子供であり，その子供をも含めて男性一般への復讐を念じて生きて来た女である。この夫人と共謀の召使の Flintwinch 夫妻の兇悪と不気味さ，その奸計をあばいて一儲けしようとする大罪人 Rigaud 等，罪と悪の世界が恐しいミステリーの緯糸で貫かれてこの物語を幅広いものとしている事も指摘されねばならない。

Bleak House 第一頁のロンドンの描写はその暗さを増しこそすれ，明るくなりそうな可能性など全然認められない。

It was a Sunday evening in London, gloomy, close and stale. Maddening church bells of all degrees of dissonance, sharp and flat, cracked and clear, fast and slow, made the brick-and-mortar echoes hideous. Melancholy streets in a penitential garb of soot, steeped the souls of the people who were condemned to look at them out of windows, in dire despondency. In every thoroughfare, up almost every alley, and down almost every turning, some doleful bell was throbbing, jerking, tolling, as if the Plague were in the city and the dead-carts were going round...(1)

(1) *L. D.*, Bk. I, III

この様な 'dismal scene'[1] に人間の 'hollow vanities'[2] が跳梁するのが現実世界である。この末世的な修羅場の中で悪魔の如き Mrs. Clennam は益々爪を研ぎすます。...her being beyond the reach of the seasons, seemed but a fit sequence to her being beyond the reach of all changing emotions.[3]

人間感情はもとより，季節とさえ断絶した所で生きる悪魔にふさわしく，徹底した意味の非情化が行われる。冷厳凄愴な顔は「無表情という表情」[4] しか持っていない。怨骨髄に徹した以上は死しても報いる (...if you were to come into this darkened room to look upon me lying dead, my body should bleed...)[5] という蛇の如き呪いは Miss Havisham に劣らない。その様な悪魔の住まう地上では路傍の雑草が足音におののき，風が泣くのである。夜の平原を急ぐ罪人 Rigaud の描写である。

...he looked as if the clouds were hurrying from him, as if the wail of the wind and the shuddering of the grass were directed against him, as if the low mysterious plashing of the water murmured at him, as if the fitful autumn night were disturbed by him.[6]

この様な人生との断絶を考えさせる人物は悪人だけではない。

Mrs. Clennam と共謀して凶悪事を働く召使 Flintwinch の妻 Affery[7] がその凶悪事に対する恐怖と，妻であり乍らその凶悪事に参加させて貰えない焦燥の為強度の神経衰弱にかかって不気味な夢遊病者として孤独の影を深めて行く描写は心理的な面でも成功して一際印象的である。

---

(1) *L.D.*, Bk. I. III　(2), (3) *ibid.*　(4) *ibid.*, V
(5) *ibid.*　(6) *ibid.*, XI　(7) *ibid.*, Bk. I. III-V, XV, XXIX, XXX Bk. II. X, XVII, XXIII, XXX, XXXI

父の兄 Frederick Dorrit は弟の巻添を喰って同じ運命に甘じるが，これに何の抵抗も示さず，‘an inevitable certainty’(1) として人間の誇りも虚栄も希望もあらゆるものをかなぐり捨てて無感情，無意志の完全な囚人としての生活に徹している。Micawber によく似た弟は空威張りしたり絶望したり，‘lament and despair’(2) を繰返す生活を続けているが，この兄は俗世間のものと言えば，昔習ったクラリオネット一つを監獄に持込んでいる。日々衰えて行く命とクラリオネットが生きている唯一の証拠となっている男である。

...in private life, where there was no part for the clarionet, he had no part at all.(3)

更にその孤独の影を深めているのは，養老院に住む老人 Nandyである。着せて貰っているコートもハットもすべての衣裳までが非情そのもので彼からソッポを向き，彼の方でもいつまでたってもぎこちなく‘a certain unaccustomed air’(4) を漂わせている。

今日もしょぼしょぼと小さな痩せたこの老人が人目を避けて歩いて行く。

It was Old Nandy's birthday, and they let him out. He said nothing about its being his birthday, or they might have kept him in; for such old men should not be born.(5)

「今日は誕生日だ」等と言わうものなら，「お前に限ってそんな事が」と信じて貰えないというのはどういう事であろうか。

これは Oliver Twist が餓えて“Please, sir, I want some more.”(6) と椀を差出した時，断じてその発言の内容を信じて貰えなかった何物かの非情と共通する。人間が人間として

(1) *L. D.*, Bk. I. VII–IX (2) *ibid.*, XIX (3) *ibid.*, XX
(4) *ibid.*, XXXI (5) *ibid.*, XXXI (6) *O. T.*, II

通用させて貰えない非情の極致と言えよう。

これらと対蹠的に温い人種も勿論跡を絶たない。偽善的な金持の Casby に雇われて家賃の取立てをしなければならぬ Pancks 氏の温い人情味, Casby の娘 Flora の, ひと度話し始めたら止る事を知らないおしゃべり, 或は赤貧洗う様な左官 Plornish 夫妻等の構成する世界は夫々この小説に幅と深さを加えている。牢番の息子 Young John Chivery は詩才に恵まれ, 青年らしい感懐が事毎に墓碑銘となって現れる。Little Dorrit との恋の成功を夢みると数十年先きの墓碑銘(1)が現われ, 或は失恋を恐れては自殺の墓碑銘(2)となって現われるが, 愈々 Dorrit が Arthur と結ばれる事を知った時の打撃は致命的であった。

STRANGER!
RESPECT THE TOMB OF
JOHN CHIVERY, JUNIOR
WHO DIED AT AN ADVANCED AGE
NOT NECESSARY TO MENTION.
HE ENCOUNTERED HIS RIVAL IN A DISTRESSED STATE,
AND FELT INCLINED
TO HAVE A ROUND WITH HIM;
BUT, FOR THE SAKE OF THE LOVED ONE,
CONQUERED THOSE FEELINGS OF BITTERNESS,
AND BECAME
MAGNANIMOUS.(3)

稚気がかもすユーモアさえ感じられるが, この様な感情処理の方法はこの青年を非常に個性的なものにしている。しかも人生の悲痛 (bitterness) を克服して寛大高潔な (magnanimous) 生き方をしようとする態度は Dickens 自身の理念でもあった様である。人生を達観しようとする態度はこの小説

(1) *L. D.*, Bk. I. XVIII　(2) *ibid.*　(3) *ibid.*, Bk. II. XXVII

の方々に見られ，人生は燃えしきる焔が衰え，‘ashes’となり‘dust’となって消え去る様にはかないもの(1)にすぎないのではないかという Arthur の想い，或は雑草の様に茂り，刈られ，葬られる(2)という Mrs. Clennam の感懐，或は *Dombey and Son* に於ても触れた様に，やがて永生に連る河となって人生は流れるという考え方(3)等も同じ Dickens の態度を表明するものであろう。Little Dorrit の半生も結局‘active resignation’(4) を基盤として展開されたものであるという観方も一つのテーマとなっている様である。一口に達観と言っても様々の態度が考えられる筈で，それを求めての様々の探索がこの小説を生む一つの要素となっている事も指摘されねばならない。

Chesterton は *Great Expectations* (5) を人生の午後にかかった Dickens の作品と呼んでいるが，意味する所のものは多い。午後と言えば黄昏にみられる力の衰亡は予見できても直接には円熟の極致として見られる意味もあるであろう。しかし円熟はあっても既に力強さは峠を越している事は事実である。有頂天の初期，油の乗り切った中期を経てここに円熟が見られるという意味にも解する事ができる。その意味で最も欠点のない作品とも言えるし，代表作の名を冠する事もできる。*David Copperfield* を書いて既に十年，名声も確立され，先々年はじめた朗読公演は自分が時代の英雄としての崇拝を一身に集めている事実を直接教えてくれるし，幼時の夢であった Gad's Hill の大邸宅も既に四十四才で手に入れていた。世俗的な意味での立身出世の夢は最高度に実現されていた訳である。*David Copperfield* によって成功を希

(1) *L. D.* Bk. I. XIII (2) *ibid.*, XV (3) *ibid.*, XVI, XXII, Bk. II. X. XXVII (4) *ibid.*, Bk. II. XXXIII
(5) (1860-1) Introduction to *G. E.*

う若い野心をそのまま客観的に結晶させる事に成功した挙句，再びこれを客観化しようとしたのがこの作品であるが，成功は成功でありながら，十年経過して振返った時の成功の意味は凡そ正反対に近いものとして提示されていた。

繰返される客観化によって detachment はより徹底して来るが，それに伴って失われるものも少くなかった様である。たとえば Dickens 自身の憎悪の感情がむき出しにうかがわれた Uriah Heep や Mr. Murdstone 等の人物は姿を見せないが，同時に生命力の絶対性を謳歌する Mr. Micawber の清新潑剌さも消えている。長短相補うとも考えられるが，欠点がないという意味ではやはりこの小説の方がすぐれている。

欠点と言えば Dickens ほど欠点を臆せず露呈して来た作家は珍しい。それほど楽天的でもあり自信も強かった訳であろうが，それにも拘らず結局は Shakespeare につぐ文学生命を持っているという面から考えると，それを償うだけの長所を持っていたという事にもなる。

André Maurois はじめ多くの評者が挙げた欠点を総合すると次の様に要約できるであろう。

(1) 小説の構成を欠くという事。とりわけ *Pickwick Papers* について言えるし，又初期の *Oliver Twist*, *The Old Curiosity Shop* 等についても言える事であるが，既に指摘して来た様に一作毎にこれが改められて来た事は事実であるし，Dickens 自身も特にこの問題には神経を使ったらしく，遂には構成の大家という評言さえ得る様になって来る。中期では *Bleak House* も代表的であるが *Great Expectations* もそれに劣らず，更に次の *Our Mutual Friend* (1) 等いわゆるミステリーの傾向が加わるにつれてその構成は水も洩さぬ完璧さを持つに到っている。

(1) (1864-5)

(2) 人物が類型的であるという事。

(3) 作者の観念が固定しているという事。

これらは作者の楽天思想とも共通して考えられねばならぬ問題であろうが，これらが欠点としてマイナスとなる面と，プラスしている面との功罪はどの様に判断すべきであろうか。

文学史的な流れから言えばDickens以降の作品は，つい最近まで，anti-Dickensian の流れであったと解する事もできる。既に Trollope, Thackeray 等も意識的な反抗を試みている。人間は決して性格的に固定しているものではなく，微妙な心理の動きにふとした変化を見せる，その機微を穿ったのがTrollopeと言えようし，様々の環境が絵模様の様に千差万別の変化を人間に及ぼす面白さを鳥瞰図にして見せたのがThackeray であると称してよい。それに続く自然主義作家もこれらの傾向を継ぐもので，できるだけ性格等という決定論を避ける事によってありのままの姿で人間を把握しようとする態度に他ならない。R. L. Stevenson, H.James, Conrad, Meredith への転回がそれであった。二十世紀の精神分析を中心とする人間把握の態度は，根本的には性格の否定と，科学的な心理の把握という問題が出発点となっていると見てよい。二十世紀の今日もその様な科学に立脚する客観的なものへの追求は益々拍車をかけられて様々の実験が試みられているが，同時にこれだけの歴史の流れを経た今日言える事は，人間が固定したものであり，従って類型的でもあるという事実は，人間は刻々に変化流動するものであるという命題と裏腹に真実であるという事である。

そして固定した性格を描く為には，その特長を取出し，これを拡大して見せるのが最も有効な方法の一つである。その意味で写真が立派な芸術になり得ると同様，戯画（caricature）も立派な芸術になり得るのである。そしてこの戯画だけでは満足できず，社会批判の意図なども含めて，Dickens

は変化する面から人間を把えようとして写実性を取入れ，様々の実験を試みたがすべてが失敗に終り，結局は写実性だけが残った。そして *Dombey* の成功に見られる様に，変化ではなく固定した本質的な性格の発見，という過程に新生面を開いて来た訳である。*Great Expectations* はその方法の完成とも見られるもので，虚栄や空頼み等後天的な弱点によって曇らされていた人間の本能を次第々々に明かにしようとしたものである。人間性格が固定して居り，その底には更に普遍的な人間性（humanity）が万人に固定しているという信念がこれを支える中心概念となっている事は言うまでもない。

この事は女性についても言える事で Mrs. Gamp, Mrs. Dedlock, Miss Havisham その他固定観念を代表する凡百の女性を創造する上では成功しながら，遂に理想の女性像に到っては最後まで不成功に終った事はむしろ奇異にさえ感じられる。

Dickens が妻と離婚したのは1858年四十六才の時であるが，少くとも経験の上からいえば結婚生活に入った女性は，母にせよ妻にせよ幻滅以外には Dickens に与えなかった事は不幸であった。理想の女は Dickens の場合，恋愛の対象であるか，或は自分の庇護の下に献身的な愛情を捧げた Mary と Georgina という義妹に限られていた。運命的なものと併せて Dickens のすべてを征服しなければ承知しない意志力が結婚生活を不幸にした事も考えられるし，母への不快が女性一般に及ぼされた事も考えられる。結婚生活二十一年間に子供は十人生れたが，結婚生活といえば出産と子供の問題に終始するだけで，妻との愛情についての建設的な発展はもとより，他の女性との交際などの余裕は全く考えられなかった事情も考えられる。成功だけを眼目としてその為にすべてを結集した獅子奮迅の生活期間であった。Beadnell, Mary, Georgina 以外に愛情の対象となったのは離婚の前

年，素人芝居で知りそめた Ellen L. Ternan[1] がはじめてであったと言ってよい。Miss Coutts, Mrs. Carlyle 等尊敬に値する女性との交際はあったがそれ以外は Beadnell から Ternan までの三十年近い期間は女性との愛情問題について完全なブランクとも考えられる。理想の女性は結婚とは無関係な純潔な女でなければならぬという理念的な問題もあるが，同時に Dickens が実際に愛し得たのもその様な女性についての極く限られた経験にすぎなかった。Ternan も Dickens の第三女と同年という若さであった。

その様な年端もゆかない乙女を理想像として完成しようと思えば思うだけ，それがむしろ滑稽になるのは当然すぎる理でもある。自分が完全な虜となっている恋愛の対象にせよ，自分に完全な献身を捧げる乙女にせよ，それ自体が既に半ば曲げられた虚偽の女性であるからである。少女小説の主題にはなり得ても本格的な人間探求の対象とはなり得ない。その意味で現実の女性ではなく，純潔な乙女にしか理想の女を発見できなかった Dickens の不幸が考えられる。

しかし根本的にその様な片端の女性しか描けなかった Dickens であったにしても，やはり作品毎に写実的な肉づけの労作が周到になってそれなりの成功を見せた事は事実である。牢獄と賃仕事から解放されて父と共にイタリーを旅してはじめて「美の発見」を経験する Little Dorrit[2] の喜びやその事が持つ深い意味は彼女の内的変化を首肯させるに充分な材料となっている。*Great Expectations* に現れる Estella はその名前にも Ellen Ternan が宿されていると言われるほどこの新しい恋人の要素が加わっているという意味で別の興味の対象になるが，映像そのものとしてもやはり確実な性格を与えられてそれまでの滑稽なまでのデクの捧ではなくなっているのも事実である。

(1) 1839–1914　　(2) *L. D.*, Bk. II. XI

(4) 感傷性 (sentimentality) 或は感動性(sensationalism) に流れると極端に走る事。

恐らく Dickens の弱点としてこれ以上のものはないであろう。Mary の死に, Nell の死に男泣きに泣いた Dickens がそのまま作品の中の表現となって極端なまで感傷的となり, 感激してはすぐ様韻文調になって奔流する勢で読者に押しつけられる。この事は特に初期の作品については屢々大きな欠点として指摘されて来た。Huxley に 'vulgar' だと決めつけられたのもこの直情径行の傾向であった。後期になるにつれてその角が取れて可なり蕪雑さはなくなってはいるが, 次の様な表現は依然跡を絶たない。

The rain fell heavily on the roof, and pattered on the ground, and dripped among the evergreens, and the leafless branches of the trees. The rain fell heavily, drearily. It was a night of tears.(1)

いかにもセンチであるし感情過多 (sensationalism) の名にふさわしく場当りに大向うを張ってこれ見よがしの態度が露骨である。「雨は沈欝に物憂く降った。涙の夜であった」等という口調は嘗ての活動写真の弁士の表現であり, 或は舞台の上での科白と言ってよい。

その小説を読んだ事のある人なら誰しも Dickens の舞台意識を容易に発見できる。本質的に小説家的手法というより劇作家のそれと言ってよい。Dickens 自身が絶えず威儀を正して観衆に対している。上掲の引用文と同じ章には次の様な表現が見られる。

'Mrs. Gowan is well, Henry?' said Mrs. Meagles. (Clennam became attentive.)

'My mother is quite well, thank you.' (Clennam became inattentive.) 'I have taken the liberty...(2)

(1) *L. D.*, Bk. I. XVII　(2) *ibid.*

小説と言うより，完全な脚本となって三人の登場人物が動いているのである。

(5) メロドラマ的 (melodramatic) という欠点，絞切型という欠点等もこの様な傾向に関聯して指摘できる。そして多少の改良進歩の跡は認められるとしてもそのマンネリズムはむしろ Dickens の体臭となって最後の作品まで強く尾を引くのである。只そのマンネリズムをできるだけマンネリズムとしない様にという努力の跡は明かである。たとえば上掲の The rain fell heavily, drearily. It was a night of rain. 等の文章に，マンネリズムと同時に，激しい感動が凝縮された形で表現されているのを認める事ができる。その激しい感動が，つい動くままに表現される時，誇張ともなり，マンネリズムともなり，或は感情過多の現象となって現れるのであろう。後期になるにつれて文章がむづかしく，肩を張ったいかめしいものになるのもこれと関聯して考えられ得ないであろうか。全く前例のない文学として出現した庶民性の清新さは次第に薄れ，すべての文学が辿らねばならぬ貴族性へのコースを Dickens の文学も運命づけられていた様である。次の様ないかめしい文章は珍くない。

Fledgeby deserved Mr. Alfred Lammle's eulogium. He was the meanest cur existing, with a single pair of legs. And instinct (a word we all clearly understand) going largely on four legs, and reason always on two, meanness on four legs never attains the perfection of meanness on two.(1)

Fledgeby, Lammle 両人共お金を目の前にしては悪魔も顔負け(a match for the Devil)(2) の卑劣な悪者である。人間は理性 (reason) の動物であり，獣は本能 (instinct) の動物であるから，獣が卑劣であるのは当然だが，人間の卑劣な

(1) *Our Mutual Friend,* Bk. II. V (2) *ibid.*

時には理性の動物であるだけに殊更その卑劣さが強調され引立って来る，の謂である。人間の卑劣さに対する刺々しいまでの侮辱怨恨が凝集されているようである。

兎も角，その様な欠点を取上げると恐らく際限がないであろうが，少くとも *Great Expectations* について言える事はそれまで発展して来たいわゆる Dickens 的なものが最も円熟した形で表現され，しかもこれらの欠点が一番目立たないという事である。

この小説は David と同じく両親を早く失って赤貧の環境で育つ Pip 少年の性格の形成過程を辿ったものであるが，David の成長過程に散漫で偶発的な要素が多分に認められるのに対して，Pip のそれは周到に一人の少年が成年するまでにどれだけの教育的要素が必要であるかについて組織的に具体的に考えられている。'uncommoness'(1) を求め紳士になろうとする貧しい少年の虚栄が，冷酷で意地悪い周囲，善意の周囲，無関心な周囲等から様々の陶冶を受けて育成される過程を跡づけたものである。その様な社会的影響にこの小説の鍵とも云うべき流刑囚 Magwitch と花嫁衣裳で男に捨てられたままの半狂乱の老女 Miss Havisham との二人が合流して不気味なミステリーの傾向も最後まで読者を強く摑んで離さない。Mrs. Gamp まがいの魔女は Mrs. Dedlock, Mrs. Flintwinch, Mrs. Sparsit(2) 等を経て Miss Havisham に到って最高度の表現を得ている。凄愴さの極致と言えよう。男性への復讐の鬼と化したその老女に操られる Estella に対する Pip の恋情は，老女の完全な傀儡になり切っている Estella と，それにも拘らず Pip に対して絶対の美を押しつける Estella との矛盾相剋となって Pip を徹底的に苦めるのである。そしてその恋情の発展(3) を跡づけても，寸分の隙

(1) *G. E.*, IX, X　(2) *Hard Times*　(3) *G. E.*, XXXIII, XXXVIII

も見せない。Miss Havisham に対して男性では Pumblechook,[1] Jaggers,[2] Drummle [3] 等が徹底して悪意，嫉妬，残酷を代表しているし，逆に善意を代表するものとしては，幼時助けた脱獄囚 Magwitch，義兄の鍛冶屋 Joe，ロンドンの真只中に完全に孤立した城を構えて俗世と家庭とを隔絶して住む Wemmick 親子[4]等々その人物にも事欠かない。

屋主の分らぬ遺産（expectations）を得意とし，高慢となり無知への軽蔑となって人間性から逸脱するが，ひたすら紳士を夢みる Pip は，結論的には幻滅以外の何物にも報いられなかったが，その事が自分の非を悟らせ 'simplicity and fidelity'[5] にまさるものがこの世にない事を知らせるのである。無知文盲の Joe を何とか紳士らしい身分に引上げたならばという希いは Pip の野望を縮小した形で繰返し展開されるが，その様な希いや考え方の愚かしさが次の様な Joe 自身の言葉となっている。美しい服を着て，ロンドンに出て勉強し，出世しよう等という考え方を否定した言葉である。

...one man's a blacksmith, and one's a whitesmith, and one's a goldsmith, and one's a coppersmith. Diwisions among such must come, and must be met as they come. You and me is not two figures to be together in London; nor yet anywheres else but what is private, and beknown, and understood among friends. It ain't that I am proud, but that I want to be right, as you shall never see me no more in these clothes. I'm wrong in these clothes. I'm wrong out of the forge, the kitchen, or off th' meshes. You won't find half so much fault

(1) *G.E.*, IV-IX, XII, XIII, XV, XXXV, LVIII (2) *ibid.*, XI, XX, XXI, XXVI, XXIX, XXXVI (3) *ibid.*, XXIII, XXV, XXXVIII, XLIII, XLVII (4) *ibid.*, XX, XXI, XXIV-XXVI, XXXII, XXXVI, XXXVII, XLV (5) *ibid.*, XXXIX

in me if you think of me in my forge dress, with my hammer in my hand, or even my pipe...[1]

本来が村鍛冶として今日に到った人間である。義弟の Pip は遺産を当てこんで紳士修業をするが，自分には自分の道がある。小い時からとりわけ仲が良く互にかばい合って来た間柄は間柄として，生き方自体とは別問題である。折角よそ行きの服を着せられてロンドンに Pip に会いに来るが，田舎者の無知や不作法のために散々 Pip を怒らせ，軽蔑さえ受ける。しかし悪いのはむしろ Pip で，自分にこんな服を着せるのがいけないのである。服を着せる等という考え方自体が間違いである。自分が正しく立派な生き方をする為には，汚れた作業服でふいごの前に座らねばならぬという思想である。

David Copperfield の Mr. Peggotty は純朴な愛情に貫かれていたが，Joe は最も端的により広い意味でのヒューマニズムを代表する。無知であっても，純朴で誠意のある人間をそれなりに認めようとする態度は Dickens の最も中心的な拠り所で，既に *Sketches* 以来の文学活動はその信仰を中心に展開されたと言っても過言でないが，Joe はその完成された代表である。万人が紳士になる資格を持つという平等思想は，民主主義，共産主義を問わず夫々の根本思想となっているが，同時に，人間百人には百通りの生き方が認められねばならぬという個人尊重の思想もヒューマニズムに不可欠の条件である。烏を唯一の遊び相手として放浪し，星を取りたいと希う白痴の Barnaby Rudge を学校へでも入れようものならすぐ様死んで了うであろう。ロンドンの場末に紙屑同然放り出されている間は餓えながらも結構生きていた Jo[2] も，多くの人手がかかると却て死んだというのは単なる皮肉ではない。

(1) *G. E.*, XXVII (2) *Bleak House*

Joe に嫁いでいた Pip の姉が死んでから，二度目の妻になる田舎娘 Biddy もその事をよく知っていた。

'He may be too proud to let any one take him out of a place that he is competent to fill, and fills well and with respect.'(1)

村鍛冶などやめてもっと出世したらよいのにという Pip の考え方をたしなめた言葉である。鍛冶は自分でなければできぬだろうという誇りに貫かれて生きる Joe の生活は尊厳でさえある。

現実には Pip の紳士になろうとする情熱は Dickens のそれに他ならない。そしてここでは立身出世を夢みて奮闘に奮闘を重ねて来た生涯を回顧しての一つの清算が行われている訳である。

さりとて成功に胸ふくらませ野心のままに動く事が悪い訳はない筈である。Dickens にとっては奮闘の生涯がむしろ運命の如く不可避のものであった。後悔されるのは，成功につれて高慢になり，偏見を持ち，嫉妬深くなる，その様な errors(2) を犯した事であった。人生あやまちに満ち，その罪を身近かな者にせめて理解して貰う (ask for their compassion)(3) 事，ふと死を予想した瞬間その事が究極的な希いとなって Pip の脳裏をかすめるのである。結局は鍛冶屋である事と，紳士として立身出世するという事とには何一つ本質的な差異がないのではないか。期する所が大きければ大きいだけそれに伴う幻滅も大きいというのが人生の真実である。紳士になればなるだけそれに伴う不幸も増大するのである。Pip が得たのも... how wretched I was, and how the ship in which I had sailed was gone to pieces.(4) という幻滅以外のものではなかった。残る問題というのは将来を誠実に生きるか否か，過去の罪を理解し許してくれる相手が得られる

(1) *G. E.*, XIX (2) *ibid.*, LIII (3) *ibid.* (4) *ibid.*, XXXIX

か否か，ただそれだけである。その中心思想は Dickens が生涯繰返えした思想で *David Copperfield* でも見られた「単純な愛情と真実」(simple love and truth) が結局は「悪と不幸」(any evil and misfortune)[1] より強いという楽天観の繰返えしに違いないとしても，後期に現れるその現れ方は決して以前の様に単純なものではなく，絶望，孤独，等様々の暗い影を背負いこんだ楽天観であった。

(1) *D. C.*, XXXV

IX Dickens の抵抗，勝利，敗北

— *Hard Times*
— *A Tale of Two Cities*
— *Our Mutual Friend*
— *The Mystery of Edwin Drood*

「二都物語」はフランス革命を描いて再び *Barnaby Rudge* と同種類の事件を主体とする物語に還り，内容的な人間性格の追求が二次的になっているという意味で大衆小説と目され易いが，決して常識的な意味での大衆小説に終っている訳ではない。*Great Expectations* の二年前に書かれただけに，この作品も充分円熟したものでもあり，フランス革命という大事件を Dickens ならではの神技にも比すべき筆力でまざまざと再現すると同時に，*Great Expectations* 以上に結論的な人生観が端的な形で示されて多くの興味深い問題を提供してくれる。

革命が展開する大絵巻という意味で，この物語と共通するものに *Hard Times* (1) の労働争議があるが，「二都物語」を遡る五年前 *Bleak House* と *Little Dorrit* との間に書かれたこの小説は，全体の作品系列からも余程偏した概念的な作品となっていて奇異をさえ感じさせる。最も Dickens らしくない作品でもあり，最も不成功の作品と言えよう。

事実と統計以外には何物も信じる事のできない物質文明の落し子 Gradgrind は，自分の主義に基いて娘の Louisa と息子の Tom に情操的な面を一切排除した実際的教育を与える。やがてその娘を三十も年長の地方の大事業家 Bounderby 氏と結婚させるが娘は簡単に承諾して嫁ぐ。教育が彼女

(1) 1854

を冷く何事にも無関心な女にしたのと，この世で唯一の愛情の対象である弟が Bounderby の許で働いているのでその栄達を考えての承諾であった。しかしその不幸な結婚生活を利用して Louisa に取入ろうとした男の為に生活が破壊されて父親の所へ帰らねばならず，息子は Bounderby 銀行の大金を盗んで外国へ逃亡する。結局 Gradgrind の思想が生んだ悲劇が物語の中心になっているのであるが，これと列んで Bounderby の紡織工場に働く労働者 Stephen Blackpool の悲劇がある。十八年前結婚した妻は兇暴で酒をあおる悪女であるが，住所不定のまま経済的な理由から離婚もできず，ひそかに貧しい女工 Rachel を恋しながら苦しむ。大規模な労働争議が行われた時も，その理由には賛成できても直接争議行動には加わる事ができない為組合から除外され，雇主の Bounderby からは組合に賛成した科で馘首される。他の地方に職を求めて放浪するが Bounderby 銀行の大金の盗難の嫌疑が自分にかかっている事を聞いて引返す途中，廃坑に落ちて死ぬのである。世は泥沼である ('Tis a muddle.)(1) というこの男の厭世的な思想と I ha' lived hard and sad.(2) という言葉は 'hard times' の内容を最もよく表現したものであろう。

世が汚濁と混迷の 'muddle' であり，物質文明自体が究極的には悪であるという考え方は，この物語が展開される Coketown という町の描写にもとりわけ鮮かである。腐蝕した Tom's-all-Alone の描写以上に徹底して居り，ここでは太陽までもが悪の根元となる。この町自体が物質文明を結集した悪 (evil)(3) の象徴である為に，ここを照す太陽までもがそれに染り，悪の目となって下界を見下ろしているというのである。

社会悪が純粋な形で表現されたという意味では B. Shaw な

(1) *H. T.*, Bk. I. XI (2) *ibid.* (3) *ibid.*, Bk. II. I

どの賛成を得た事も首肯できる。 Dickens が「Karl Marx, Carlyle, Ruskin, Morris, Carpenter となって現代の病根たる文明に立ちはだかり，恐るべきは無秩序でなく，現代の秩序そのものであり，盗み人殺しをしている張本人は罪人ではなく資本家である事を宣言した」(1) 作品である事を指摘している。

勿論この様な考えも可能であろうが，小説としてはそれだけに観念的になっている。その上必ずしもその様な激しい憤懣をこめた態度だけで一貫されている訳ではなく，一方ではかなり消極的な，中庸を守ろうとする態度も明かである。あれほど具体的に金銭の害毒を考え，Circumlocution Office を通して政治の堕落と無能を突こうとした *Little Dorrit* でさえ，最初に Dickens が最も望んだ題名は *Nobody's Fault*(2) という題であった。世情人心を 'nobody's fault' と眺める態度の中に当時の Dickens の消極的な心象が明かである。

反逆的な抵抗の意義は高く評価しながら，小説としては不成功に終った理由として Ruskin(3) は Bounderby が 'dramatic monster' となり，Blackpool が 'dramatic perfection' となっている為に，「現実的な」性格の追求が見られぬ事を指摘しているのは正しい。乙女に理想の女性像を求めたのと同じ轍がこの *Hard Times* では男性に適用されたと言ってもよい。社会悪を代表する Mr. Dombey, Dedlock 夫妻，Mr. Dorrit 等に見られた執拗なまでの性格探求が姿を消して物質主義，統計万能の精神がそのまま概念的な形で人間化され，或はその犠牲という観念だけが Blackpool となり Louisa，或は Tom となって動いている。端役の Mrs. Sparsit を除いては僅かに Gradgrind の後悔改悛の過程に人間的なものが認められる程度である。 Tom は大金

(1) Introduction to *H. T.* (2) Forster, III, IV
(3) (1819–1900) *Unto This Last* (1852), 130

を盗んだにも拘らず周囲の者からかえって庇われながら海外に逃亡する等という矛盾は甚だしい。お金を搾取する事しか知らない Bounderby は憎んで余りあるとしても，その不浄の金を盗んでよいという理由にはならない。Tom は盗んだ罪を計画的に Blackpool に転嫁しようとするが，Blackpool の悲劇性を強調する意図があったにしてもやはり倫理的な矛盾は甚だしい。

Blackpool は性格描写としては失敗しているとしても，観念的には Dickens の分身と考えられる面が強く，*Great Expectations*，或は次の *A Tale of Two Cities* 等と共に晩年の Dickens の思想を物語る材料を多く持っている。

結論的には敗北という思想に帰一して考える事ができる。法律に敗れて再婚もできず恋もできない。偶々 Blackpool は結婚後十八年というが，*Hard Times* 執筆の年も Dickensの結婚十八年目であったという事実は偶然にすぎないであろうか。離婚四年前の事である。小説の中で Blackpool は Trade Union(1) からも，雇主からも見離される。何処かに拠点を見つけて立直るのではないかと最初から読者に期待を持たせ続けながら結局は泥沼に足をさらわれたまま I ha' lived hard and sad. という悲劇的な感懐しか残さないのである。

罷業観についてはこの小説に見られるものが最も集約されて *On Strike* (2) という論文となって見られる。*Hard Times* に描かれた罷業を，実際に見聞した時の感想文であるが，労働者の秩序，正義観など肯定できる面と，外部からの応援演説など賛成できない面とを取上げて論じ，道義的な賛成 (moral approval) を得られるものでありながら ... But the political conclusion is not that the strike is right. という結論を得ているのである。道義的に賛成できるものが何故政治的に賛成できないのか。この論理自体が 'muddle' の中

(1) *H. T.*, Bk. II. IV (2) *Household Words* (Feb. 11, 1854)

に落込んでいる観が強い。*The Old Curiosity Shop* では労働問題が起す暴徒の情景がまざまざと再現され，*Barnaby Rudge* に到っては暴徒と共に Dickens 自身がその暴動に狂奔している観を呈するまでの凄味を発揮し得た。暴動が暴動である限り許す事はできないが，政治が無知蒙昧である限り防ぎ様がないではないかと言わんばかりの憤懣をこめた同情的態度であった。若き Radical が先頭に颯爽と立った感じである。

しかし *Hard Times* でも，ましてや *On Strike* でも嘗ての颯爽たる向う意気は見られない。労使両面に足をさらわれ，この様な国家的な悩み (a great national affliction) は帰する所 'political economy' に人間味を回復する以外に解決のない事を訴えるのである。

勿論この様な人間性を主体としようとする中庸の態度を非とする理由はない。ただ意気揚々と先頭に立って旗をふりかざした態度から，この様なむしろ消極的な理想主義への変移，或はこれを後退の名で呼んでよいかも知れないが，この変移の中に Dickens がここでも一つの敗北を喫したという事実が考えられる。Radical として勇ましく Bumble 氏を倒し，Sikes を殺し，Squeers を葬った Dickens が，やがてその事の限界を知って一歩後退せざるを得なかったのではないかという事である。個人悪に対する攻撃から，社会悪へ眼を転じた時，既にこの敗北は決定していたと言ってよい。本来ここに小説家の運命が，たとえば Carlyle 等と違った意味での運命が待っていた様である。元来人間性格以外にはこれを徹底して把握洞察する能力に欠ける所があったにしても，同時にその不徹底さは実は小説を書く事自体に始まっていた訳である。Dickens にとっては個人悪に対する正義以外の正義観を小説の中に持ちこんで，これに成功しようなどという期待そのものが誤であった。個人悪を殺す事に成功し得たか

らといって，社会悪がそれほど容易に葬り得る筈はなかった。

政治問題に対する観察や洞察が上すべりであった事も否定できない。上すべりであったから小説家となったのか，逆に小説家であったから上すべりとなったのか，この様な形式的な考え方はその何れもが適用できるが，本来が Rousseau 流の「考えるより感じる」型の人間であった。哲学的な深い思考洞察などできなかったのは，例えば「二都物語」の中で，大学教育(1)についての Dickens の理解程度からも容易に推測される。生涯アカデミックな雰囲気など凡そ無縁の人であった様である。だから政治問題についてもその根本的な原理にまでメスを突込んでその禍根を俎上に乗せる事はできなかった。フランス革命にせよ Chartism 運動にせよ，その事ができたのは Carlyle である。その *Chartism* (1839) には政治の非と，暴動に走る大衆の非とが夫々客観的に克明に跡づけられている。その理論性があってこそ政治への正しい批判抵抗が生れる訳であり，暴動の必然性についての判断理解も可能な訳であろう。その意味では Dickens は政治の非を本能的に嗅ぎつける事のできる直感力を持ち，それを取上げて問題にこそしたが，その具体的な解決については無力状態であったと云えよう。根元をつかないで，表面的な現象のみを追っていたのでは，作者自身が社会悪を対象としていたとしても，読者への訴え方としてはその悪が個人悪に還元されるのが自然である。元々その社会悪の実態を根柢的に把握し得ていないのであるから，読者が真実葬らねばならぬと決意するのは，その社会悪自体ではなく，それの手先きとなった個人に対してである事も当然であろう。社会悪への矛先が最後になって個人悪へかわされるという矛盾である。

社会悪の実態を文学的表現にまで高め得た一つの典型は

(1) Cf. Stryver and Sydney Carton at Shrewsbury (Bk. II, V) and C. Darnay at Cambridge (Bk. II. X)

Carlyle の「フランス革命史」であろう。たとえば先述の *Chartism* 等にあってはその理論性が中心となっているのに対して，「革命史」では生きた現実の中にうごめく人間——支配階級と被支配階級と，それも同じ支配階級といっても，政治そのものの虚体と，それを取り持つ人間と，逆に政治を行う人間と，その人間に操られてできる政治という力と，被支配階級でいえば，政治への抵抗が自然に生む暴動とそれに乗ぜられる人間と，人間の抵抗が意識の総体として生む暴動と，それら微妙な力の相互関係が，人間の抵抗意識の産物として，同時に自然の力が生む自然現象的産物として，革命という恐るべき事実を生むに到る必然性が vivid に描き尽されている。社会悪の大規模な文学的表現という意味では世界文学にも Carlyle にまさるものを見出す事は容易でないであろうが，その様な一つの典型を取出してこれを Dickens に当嵌めて考える事は不当である。*Hard Times* を契機に Dickens が Radical から 'sullen socialism' に転向したと呼んだ Macaulay(1) の言葉はあまりにも有名で，この小説に対する一つのレッテルを決定づけたきらいはあるが，イズムの名で徹底した考え方は突きつめられては居らず，敢てイズムを用いるならば H. Pearson(2) の 'rampant anarchism' という呼名の方がむしろふさわしい様である。

「二都物語」はストライキ，暴動を極端に拡大した革命，それも人類が持った史上最大のフランス革命を中心に，ロンドン，パリ二都に展開される暴動と恋愛を描いたものであるが，革命に対する態度は *Hard Times* の Blackpool に見られたそれと全く違わない。暴動の描写は文字による表現力を最高度に発揮したもので Dickens 文学の一つの頂点を示すものには違いないが，「悪魔よ万歳」(long live the Devil)(3) の憑かれた考え方に盲目的に追いやられる大衆の必然性を明

(1) 1800–59 (2) *Dickens* (1949), XIII (3) *T. T. C.*, V

かにして，その恐るべき現実を如実に再現すると共に，その暴動に対して批判的な見解が強く現わされている。革命が最高潮に達している部分(1)からその批判的な言葉を拾ってみても，たとえば madness, blind frenzy, passion, desolation, terror, wild beasts, devilry, butchery mob 等という価値評価の伴う用語によって，それが生む恐怖を強調しこれを避けようとする意図がはっきり見受けられる。亡命していた Charles Darnay は故国の急を聞いて英国に留り得ず帰国するが，彼がこの革命に見出したのは余りにも明かな悪の様相であった。 ...bad aims were being worked out by bad instruments.(2)という認識である。この悪の世界に 'mercy' と 'humanity' を取戻す事，その信念がこの青年を帰国させるのである。も早や Newgate(3) 監獄の焼打に見られた純粋なすさまじさは求められない。事々に批判的になり，或は絶望の余韻がつきまとうのである。

Dombey and Son から明瞭に現れ始めた海のイメヂはこの物語でも繰返される。生命が河と流れて海につらなり，死んだ母が舟に乗って Dombey 少年を迎えに来てくれた永劫の海 (eternal seas)(4)はこの物語では，革命となり，怒った海(a whirlpool of boiling waters)(5) となって人類に押し寄せ，人間を席巻し地上をさながらの修羅場と化す。

The sea of black and threatening waters, and of destructive upheaving of wave against wave, whose depths were yet unfathomed and whose forces were yet unknown. The remorseless sea of turbulently swaying shapes, voices of vengeance, and faces hardened in the furnaces of suffering until the touch of pity could make

(1) *T. T. C.*, Bk. II. XXII-XXIV (2) *ibid.*, Bk. II. XXIV
(3) *Barnaby Rudge*, LXIV (4) *Little Dorrit*, Bk. I. XXVIII
(5) *T. T. C.*, Bk. II. XXI

no mark on them.(1)

革命を契機として Dickens はここでも不知 (unknown) 不測 (unfathomed) の存在を確認している様である。人力を越えた何物か絶対に近いものの存在である。

あらん限りの力をふりしぼって立身出世を考えた若き日の Dickens の自信に満ちた文学の何処にも存在しなかった海である。宗教家はこれを神と呼ぶかも知れない。Carlyle は「英雄」と呼ぶかも知れない。その様な自己を越えた存在の前では，自ら革命の旗手としてその先頭に立つとか，或はこれを防止しようとか，その様な個人の行動を考える前に，先ず静かに「耳を傾け」(2) その海の実態をじっと凝視しようとする態度が既に明かである。望外と云ってよいほどの世間的栄達は果し得たが，やはりそれに比例する敗北の色も濃かった。Gummidge 婆さん(3)の口癖を借りれば，「万事が自分の思いに逆行して，見捨てられた孤独な人間」の翳を深めて行ったのであろう。しかし Carlyle が自ら悲劇の主人公を演じて絶望的な翳を深めて行ったのに対して，Dickens には文学が最後の拠り所となり得ている様である。

たとえば「二都物語」で恋人の犠牲となってギロチン (guillotine) の露と消えた Sydney Carton の死を通じて，S. Blackpool の場合も同じであるが，実は本能的に自らのよみがえり (resurrection) を期しているのではないであろうか。

S. Carton が，死を決意した瞬間から最後の瞬間まで執拗に繰返される 'I am the Resurrection.' (我はよみがえりなり) の信念は，実はそのまま Dickens の信仰であった様である。敗北は常に死につらなり，その敗北を通してのみよみがえりは可能であるからである。労働運動に倒れた S. Blackpool や，フランス革命に散った S. Carton や，その様な敗

(1) *T. T. C.*, Bk. II. XXI
(2) *ibid.*, Bk. II. VI
(3) *D. C.*, III, VII, X, etc.

北を重ね，よみがえりを重ねるうちに Dickens の得た人生への達観は，死の直前ふと Carton の脳裏をかすめた，将来のパリの姿が最も美しく象徴している様である。

I see... long ranks of the new oppressors who have risen on the destruction of the old, perishing by this retributive instrument, before it shall cease out of its present use. I see a beautiful city and a brilliant people rising from this abyss, and, in their struggles to be truly free, in their triumphs and defeats, through long long years to come, I see the evil of this time and of the previous time of which this is the natural birth, gradually making expiation for itself and wearing out.(1)

ここにある内容的な単語を拾ってみよう。破壊 (destruction)，奈落の底 (abyss)，闘争 (struggle)，勝利 (triumph)，敗北 (defeat)，悪 (evil) 等の概念が暗示する実態そのものが Dickens の人生の内容であろう。

Pip が死を予想した時，「人生あやまち (errors) に満ちたり」とふと脳裏をかすめた思想がここでは大規模に本格的に追求されている。自由を求めて戦うが勝てば同時に必ず負ける。勝利が勝利である限り敗北も必然である。破壊の報酬は破壊であり，悪の報酬は悪である。歴史と云えば既に誤解となる様な歴史以前の歴史，人生以前の人生，といった深さが凝集され暗示されている。時折，流れる河として，押し寄せる海として，自分を包み自分を越えた運命の如き何物かの存在を実感して来た Dickens ではあったが，既に今度はその存在自体の側から人生の歴史を静かに眺めている様である。後向きの眼とか前向きの眼とかいった対立の次元を越えた高い叡智の眼で人生の真実に迫っている様である。そして Dickens の目に映じたのは，廃墟の中から再び美しい市

(1) *T. T. C.*, Bk. III. XV

が，美しい人々がすくすくと立上って行く姿であった。徹底した敗北感のみが生む事のできる悟入以外のものではないであろう。

1858年 W. Collins(1) や Forster に与えた手紙には次の様なせっぱつまった表現が見られる。

The domestic unhappiness remains so strong upon me that I can't write, and (waking) can't rest, one minute... (2)

I must do something, or I shall wear my heart away... (3)

Nothing can put them right, until we are all dead and buried and risen... (4)

死んで再生を！ と希う考え方は単に Carton の行き当りばったりの思想ではなかった。離婚を前にした Dickens の実感でもあった。その前年素人演劇に出演を依頼した事から知った Ellen Ternan との風評や誤解が原因で妻と正面衝突して 1858 年五月正式に離婚した。二十二年間の結婚生活への清算であった。

同年はじめから一方では自作の朗読公演を本格的に始め，予想外の人気と収入を得ていたが，筆を取り得ない Dickens にとっては家庭生活の清算を，離婚と朗読という二つの方向にその吐口を求めねばならなかった。*A Christmas Carol*, *The Chimes* をはじめ Paul Dombey の死の場面，Mrs. Gamp 等が好んで朗読の材料に選ばれたが *The Old Curi-*

(1) William Wilkie Collins (1824-89) *Household Words* への投稿で Dickens に知られ，その素人演劇に加わり，或は脚本を書きイタリア旅行に同行する等寵愛を受けたので Forster の嫉妬さえ買った。英国最初の探偵小説の名を得た *The Woman in White* (1860) も *All the Year Round* に掲載して貰ったものである。

(2) *Let.*, III (3), (4) *ibid.*

osity Shop で世を興奮の坩堝に投げこんだ Dickens は再び朗読によってイギリス，アメリカの各地を興奮の坩堝に投げこんだ。対象は同じであったにせよ，文字によって世界を征服した Dickens が今度は朗読によって，声というより演劇によって再び征服を完遂したと言えるであろう。文学が演劇にそのまま通じる所に Dickens の文学の実質が考えられる。文字が同時に聴覚化される点に Dickens 文学の長所も短所もすべてが胚胎されているのであろう。

世人を興奮させる以上に Dickens がその都度朗読に精魂を傾け尽した事はいうまでもない。そして遂には死の直接原因ともなった。南北戦争に妨げられてアメリカへの朗読旅行は延び延びになったが，1867年末から翌年にかけて，アメリカでも七十六回の朗読を終え，帰英後も更に百回が予定されていたが遂に七十四回で倒れた。既にアメリカへ行く前から心臓障害や左脚の痛み，視力の減退などの徴候が現れていたが朗読がこれに拍車をかけて，激しい頭痛，左半身の不随，左腕の疼痛などを訴えながら崩れる様に倒れた。若い時からの無謀な徒歩旅行や痛風（gout）も原因に数えられるが，結婚に敗北し，残った全精力を朗読に注ぎ尽して倒れたと表現する方がふさわしい。十人の子供のうち，生れた翌年死んだ末女を除けば離婚の時には全部が健康であった。子供達の将来の為に経済的な安泰を希う親の気持は離婚後はとりわけ察するに余りがあるが，朗読は単にその様な金の為だけの仕事ではなかった。ここでも憑かれた様に舞台に狂奔する鬼となって自ら生命を絶ったとさえ極言できる面がある。アメリカへ行く前には *Our Mutual Friend* を書き，帰英後も未完の *The Mystery of Edwin Drood* に手を着けたが，これらの作品を通しても，たとえばこの天才がガラガラと崩壊する音がじかに聞き取れると表現すれば誇張になるであろうか。

Our Mutual Friend では再び金銭対人間の問題が繰返される。人間の相互関係（mutuality）が結局はすべてを解決する鍵になるというテーマである。

'dustman' というのは塵埃の運搬人を意味すると同時に，以前は市当局と契約して塵埃の整理一切を引受ける企業で，成功者も少くなかった。儲ける為には方法は問題でなかった。John Harmon の父もその一人で莫大な産をなしたが，息子とのいざこざで息子を南アフリカに追放し，もし自分の定めた女性と結婚するならその遺産を息子に与えるし，そうでなければ永年仕えた下僕の Boffin 夫妻に与えるという遺書を残して死んだ。Harmon は帰国したが，無条件に結婚する訳にも行かず，相手の女性が財産目当てに結婚してくれるのも好まず，変名でその女性を確めようとした。偶々その計画を知った男が Harmon と服を取替えた上で Harmon の金目当てに殺そうとしてテムズ河に投げた。幸い Harmon は助かったが，逆に相手の男が盗んだ金の配分で相棒と喧嘩して水死体となって上った。服をたしかめると Harmon のものであったので Harmon が死んだ事になった。

しかし Harmon は助かって John Rokesmith と変名してまんまと相手の女性 Bella Wilfer の家に下宿し，遺産を相続した Boffin の執事としての仕事につく事に成功した。Bella は Boffin の養女となり，お金万能の高慢な女性になって行く。にも拘らず Rokesmith の方で Bella に恋し始め，求愛して却て軽蔑を受ける。やがて Mrs. Boffin の慧眼が Rokesmith が Harmon と同一人である事を見破り，Boffin 夫妻はひそかに恋愛を成就させようと企む。Boffin 氏自ら吝嗇家になった風を装い Harmon に難癖をつけて解雇するが，これを見てはじめて Bella は金の斉す悪に目が覚め，Rokesmith を追って結婚する。実は Harmon 本人であった事もはじめて明かにされるが，同時に Boffin の財産を横領

しようとしている片眼の悪人 Silas Wegg の計画も挫かれて Harmon と Boffin は合理的に財産を配分するというのが本筋である。

Rokesmith と Harmon が同一人ではないかと読者に暗示されるのはやっと第一巻の終りで，以後三巻を通してその詳細が次第に明るみに出されて来るのである。Mrs. Boffin の慧眼がやがて同一人である事を見ぬくが，それ以後も Bella との結婚までは巧みに Rokesmith で通す。莫大な財産を持つ Harmon である事が分ってする結婚は意味ないからである。テムズ河畔のやくざ Riderhood を中心とする謎は不可解で，Harmon 殺害の計画もその家で行われ，Harmon 殺害者に賞金がかけられると，罪人は死体引揚人 Hexam だと密告するが，Hexam は身のあかしを立て得ぬ前に溺死する為に犯人は益々迷宮入りする。偶々その Hexam の娘 Lizzie に恋する二人の男のいざこざに介入して金儲けを企む為に最後は殺されるが，その時やっと真相が明かになる仕組である。不可解な殺人事件に加うるに結婚詐欺 (1) あり，詐欺結婚 (2) あり，完全な吝嗇家になって了ったのではないかと思わせる Boffin 氏の行動(3)や，悪事に共謀しているかの如く見せて共謀せず，追いつめられた Lizzie を助けては誰一人知らぬ所へ隠すユダヤ人 Riah 等々全篇は謎に包まれて完全なミステリーとなっている。

人間の性格がどの様に変り，どの様な行動を取るかという問題よりも，事件がどの様に進展するかが第一条件である点，やはり文学的なマイナスも大きいが，構成の面では恐らくこれ以上に完成されたものはないと言ってよい。興味深い性格人が出ない代りに，読者は絶えず奇怪なミステリーに駆られて最後までスリリングな雰囲気に引きずられて行くのである。

(1) *O. M. F.*, Bk. III. I (2) *ibid.*, Bk. I. X
(3) *ibid.*, Bk. III. V, VI, XV

Dickens が手塩にかけて世に送った Collins のたとえば *The Woman in White* 等の方法とは対蹠的である。謎が謎を生んで最後までサスペンスを持続する Dickens の方法に対して，Collins は最初に謎のありたけを提示し，これを解きほぐす面白さが中心となる。Chesterton から C. Doyle 等の探偵小説の伝統も Collins を継ぐもので，この面でもやはり Dickens の特有のものが考えられる。若い日にも見えた執拗な意志力と写実力がここでもこの方法を決定する条件となっていると考える事ができる。周到さと言い，構成力と言い，謎を解決しながら同時に新しい謎を生んで行く欲ばった方法も Dickens ならでは考え得ないものであろう。併せて逞しい表現力がこれに伴わねばならぬ事は言うまでもない。死を描き，陰謀を描き，血闘を描く生彩に富む筆力は少しの衰えも見せていない。

しかしこの作品で明かな事は笑がいつの間にか消えている事である。あれほど健啖と笑を貪った Dickens の文学が，暗いテムズ河畔の荒涼に置き換えられている。僅かに女房の尻に敷かれた Bella の父親は笑を生むが，むしろ妙にいじけた作り笑いに近い。風に帽子を取られて追いかけた Pickwick 氏は天真爛漫の笑(1)を生んで人間最高の喜劇を演じたが，次の描写には帽子は追えど，その片鱗さえ見られない。

...Bella put her arms round his neck and tenderly kissed him on the high-road, passionately telling him he was the best of fathers... At every one of her adjectives she redoubled her kisses, and finally kissed his hat off, and then laughed immoderately when the wind took it and he ran after it.(2)

愈々 Bella が Rokesmith と結婚してその父親と三人でのお祝いから帰途についた時の描写が次の様な表現で終る。

(1) *P. P.*, IV (2) *O. M. F.*, Bk. III. IV

So, she leaning on her husband's arm, they turned homeward by a rosy path which the gracious sun struck out for them in its setting. And oh, there are days in this life, worth life and worth death. And oh, what a bright old song it is, that oh, 'tis love, 'tis love, 'tis love, that makes the world go round! (1)

一生懸命感激しようと力んでいるのは Dickens だけで読者は感動の一片さえ味い得ない。既に完全なマンネリズムに堕していると言ってよい。笑と共にこの様な内容の盛上りに極端な枯渇状態を見せる場面は少くない。

これに対して荒涼たるテムズ河畔とそれにまつわる死の描写はすぐれている。開巻第一頁から死体を小舟で探すHexamに始まるのも不吉な予感を与えるが，Harmon の死体と思われるものが引揚げられ，(2) やがてその Hexam が吹雪の中に死体となってあがり，(3) Boffin が養子にしようと期待していた貧民の孤児が餓えて死に，(4) 自分でも理解できない Harmon の死という事実に本人が悩まされ，死直前にまで行きながら不思議に生き永らえる事のできた謎めいた経過が Rokesmith の意識の中で繰返され，(5) やくざの Riderhood が溺死しそうになり，(6) Lizzie を恋する二人の男のうち一人が叩きのめされて水に放り込まれ，(7) 生き残った一人は Riderhood に脅されて争ううちに二人共溺死する。(8) 最初から最後までが死で貫かれて暗い。

死を描き，或は死線を彷徨する意識を描いて夫々にすぐれているが，中でもやくざ Riderhood が，誤って他の汽船に自分の小舟を衝突させて溺死しそうになった時の意識には Dickens の厭世思想が明かにうかがわれる。

(1) *O. M. F.*, Bk. IV. IV
(2) *ibid.*, Bk. I. I
(3) *ibid.*, Bk. I. XIV
(4) *ibid.*, Bk. II. IX
(5) *ibid.*, Bk.. I. XIII
(6) *ibid.*, Bk. III. III
(7) *ibid.*, Bk. IV. VI
(8) *ibid.*, XV

Riderhood ほど悪いやくざはいない。人の弱点をねらってこれに文句をつけてたかり，相手に無実の罪を着せる事を辞さない。Mr. Quilp や Sir. John Chester を描いた時の生新さや力強さや油の乗り切った写実力は既に見られず，概念的な悪人になっているという弱点はあるにしても，この小説では代表的な悪人である。憎まれ通しのこの悪人が溺れて生死の境をさまよう時，ふと看守る一同に生命の尊厳さがひらめく。娘でさえ見離したごろつきである。それにも拘らず生死のもがきを見せる時，死ねばよいがと考えながら傍観していた一同が不思議にも涙を流して回復を祈り始める。屍同然となったこのごろつきが時折見せる生気 'the spark of life'(1) の神秘に打たれるのである。「この世にいても，あの世にいても誰にも涙を流させる事のない筈の Riderhood が，この世とあの世の間でもがく姿は容易に涙を流させた」(2) と Dickens も註釈を加えている。善悪を越えて人間がはかない生命力に還元された時は，その神秘や尊厳さを最も端的に把握できる瞬間であろう。具体的な描写は色褪せているにしても，人間をこの様な極端に於て見極めようとする態度には一つの結論的なものがねらわれている。

しかも Dickens はそのまま続けて言う。

He is struggling to come back. Now he is almost here, now he is far away again. Now he is struggling harder to get back. And yet, — like us all, every day of our lives when we wake — he is instinctively unwilling to be restored to the consciousness of this existence, and would be left dormant if he could.(3)

生命の尊厳というヒューマニズムの根本原理と裏腹に，生命は失敗であるという後悔や厭世思想が共存しているのである。結婚は不可避であると同時に，すべきではなく，紳士に

(1) *O. M. F.*, Bk. III. III (2) *ibid.* (3) *ibid.*

なりたいという野望は同時にそれに伴う絶望を孕み，勝利はそのまま敗北である等という二元的な思想と共通する厭世観である。生命は尊ばれねばならないが，同時に生命を後悔する思想でもある。Dickens は毎朝目覚めた時我々すべては，ああ目ざめなければよかったのにと後悔するというが，これは必ずしも普遍的な妥当性を持っているとは言えず，当時の Dickens 自身の偽らない告白と言えよう。

孤独感も作品毎に強められている。養老院の仕着せを着せられた Nandy 老人 (1) が，人間だとでも主張しようものなら，叩きのめされるか，そんな馬鹿げた事があるものかと頭から否定されて，どうしても人間だという事を信用して貰えないもどかしいまでの孤独は，*A Tale of Two Cities* に到って一つの頂点を突く。

地を這う霧が悪霊 (evil spirit) (2) となって人間を襲うドーヴァ街道の闇路を突いて走る馬車とそれに乗った三人の孤絶の描写も有名な場面であるが，最愛の者と考えていた相手からさえも実は孤絶しているのではないかという絶望に近い懐疑を述べた第三章はとりわけ印象深い。

A wonderful fact to reflect upon, that every human creature is constituted to be that profound secret and mystery to every other... ではじまるこの章では，海原の中心に 'eternal frost' があるのも知らず，太陽の光が波の表で遊ぶのを愉んでいた自分の無知 (ignorance) を悔い——

No more can I turn the leaves of this dear book that I loved, and vainly hope in time to read it all.

と一人称の表現で人生への絶望を表明している。愛しているつもりで相手の心を一枚々々めくりながら読んでいると信じてはいたものの，結局は虚偽のものであったし，将来はやがて真実が読めるのではないかという期待もも早や持てなく

(1) *L. D.*, XXXI (2) *T. T. C.*, II

なった絶望の告白である。離婚直後の事でもあり，一入別れた妻に言及している事と想い合わされて印象深い。

Our Mutual Friend ではのこぎりの軌る音を立てながら吹きつける早春の風を描いて次の様な表現をしている。

The wind sawed, and the sawdust whirled. The shrubs wrung their many hands, bemoaning that they had been overpersuaded by the sun to bud; the young leaves pined; the sparrows repented of their early marriage, like men and women; the colours of the rainbow were discernible, not in floral spring, but in the faces of the people whom it nibbled and pinched. And ever the wind sawed, and the sawdust whirled.(1)

木の若芽が太陽にそそのかされて発芽した事を嘆くのは生を呪う思想であり，結婚を悔いる男女の如く，飛びかう燕までもが結婚を悔いるという思想は余りにも暗い。五十二才とは思えぬ暗澹と言わねばならない。Rokesmith に変名した Harmon は Boffin 夫妻と Bella 一家相互 (mutual) の友であり，Boffin は必ずしもこの友に折角受継いだ財産を手渡すべく努力しなくてもよい筈であり，Bella も無一文の Rokesmith に結婚すべきではないかも知れないのに，その愛情一筋に目覚めて結婚する，という金銭に対する夫々の愛情の勝利をテーマとした小説である事は確かであるとしても，その様な理想主義的な理念の裏には，この様な暗い厭世観が根強くひそんでいる。結婚はおろか，互に最初から相手を欺く為に結婚した Lammle 夫妻(2) は夫々完全に孤絶した存在である。貧しい死体引揚人 Hexam の娘 Lizzie は最後に幸福な結婚に恵まれはするが終始孤独であった。二人の男に恋される原因もその孤独な生活への同情が出発点であった。

(1) *O. M. F.*, Bk. I., XII (2) *ibid.*, Bk. I. X, XI: Bk. II. V, XVI: Bk. III, V, XII; Bk. IV. VIII

Lizzie has as much thought as the best. Too much, perhaps, without teaching. I used to call the fire at home her books, for she was always full of fancies — sometimes quite wise fancies, considering — when she sat looking at it.(1)

これは弟が姉を評する言葉であるが，終夜働く父を待って彼女は焚火(2)を見つめる。その焚火が教師となってくれるという関係もその孤独性を強める。貧民救済院を極度に呪い，養老院 (almshouse) で死なねばよいがという恐怖に憑かれ，その様な政治的な拘束から逃れる為にのみ生きているかの如き Mrs. Higden(3)は秋風に散らばう枯葉の様に孤独である。その他あらゆる登場人物が多かれ少なかれ孤独の影を宿して動くこの小説では，人間は孤独であり，それ故にこそせめて最後に拠り所として我々相互の友達関係に縋らねばならなくされているという窮地にまで追い込まれている様である。

最後の未完小説 *The Mystery of Edwin Drood* も全体の調子は全く *Our Mutual Friend* と変らない。(4) 再び Rochester(5)が舞台となるが，幼時の新鮮な陽光は一切射さず，すべてに 'hoarse'(6) という形容詞がつけられて，伽藍がいかめしく屹立する暗い場所となっている。ロンドン場末の阿片窟(6)も舞台となるが，これ亦暗くて不吉で汚濁に溢れている。Edwin Drood と Rosa Bud は親同志の決めた許婚である。親は既になくロンドンで勉学中の Drood が成年に達す

(1) *O. M. F.*, Bk. II. I (2) 焚火をみつめる事は Dickens の好んだ習慣であったらしく，*The Old Curiosity Shop* で燃える石炭の焔に物語の数々を読み取る哀れな労働者 (XL) が紹介されて以来繰返えし多くの小説に出て来る。

(3) *O. M. F.*, Bk. I. XVI, Bk. II. IX, X, XIV, Bk. III. VIII

(4) Oxford 版で 278 頁であるから普通の作品の分量から言えば約三分の一で，*Our Mutual Friend* の例から言えばやっと謎の事件が端緒についた段階で終っている訳である。

(5) *E. D.*, I, III, XII, XIV (6) *ibid.*, III

ると同時に結婚する事になっているが，Rosa は Cloisterham (Rochester) に寄宿して学校に居り，Drood の叔父がこの地で教会の楽士 (precentor) をしているので Drood は時折訪ねて逢瀬をたのしむ。しかし愈々結婚を目前にしてみると Drood と Rosa は形式的な結婚の無意味さを知って合意の上で約束を破棄する。しかしその晩，これを Drood の叔父 Jasper に報告する前に Drood がいなくなる。Jasper は Rosa に音楽を教えているが，甥の許婚者に非常識なまでの激しい愛情を感じていた。事態はこの状態で終るが，Jasper は阿片窟に出入りする二重性格者である事や，Jasper に劣らず Rosa に恋する青年 Neville の存在，他国者 Datchery の出現に加えて競売人兼市長の Sapsea，石工 Durdles 等が入乱れて物語は混沌のまま放り出された形である。

Dickens がこの小説に何を描こうとしたか，どの様な結末を予定していたか，についての臆測[1]は Forster 以来様々に行われて映画化までされているが，Drood が殺されたとすれば Jasper が犯人であったかどうか，突然登場した Datchery は Drood かその他既出の人物の偽装なのかどうか，の二点に焦点はしぼられているが，本質的には *Our Mutual Friend* をそのまま受継ぐ文学である点に根拠を置きさえすれば，どの様な臆測も許されて然るべきで，決定的な結論を探す事はむしろ遊戯に堕するきらいさえ生む。

Jasper に見られる狂的な激しさを持つ恋愛は，既に *Our Mutual Friend* で Lizzie に対する Headstone の恋愛[2]となって，より明瞭にうかがわれる事で，明かに E. Brontë の *Wuthering Heights* (1847) からの影響が認められるが，こ

(1) J. C. Walters: *The Complete Mystery of Edwin Drood* (1912) W. R. Nicoll: *The Problem of Edwin Drood* (1912) などをはじめ夥しい数にのぼる推理小説，研究書がある。*The Dickensian* (Dec. 1954) は最も新しい文献の一つであろう。

(2) *O. M. F.*, Bk. II. XI, XV

の小説でも結果的には甥の許婚者を奪う事になるとしても，倫理を無視して恋せざるを得ない必然性に駆られる男の真実を Jasper の中に見ている。

Rosa, even when my dear boy was affianced to you, I loved you madly ; even when I thought his happiness in having you for his wife was certain, I loved you madly ; even when I strove to make him more ardently devoted to you, I loved you madly; even when he gave me the picture of your lovely face so carelessly traduced by him, which I feigned to hang always in my sight for his sake, but worshipped in torment for years, I loved you madly ; in the distasteful work of the day, in the wakeful misery of the night, girded by sordid realities, or wandering through Paradises and Hells of visions into which I rushed, carrying your image in my arms, I loved you madly.(1)

これは更に繰返されて 'My love for you is above all other love, and my truth to you is above all other truth.'(2)

となり，更に 'I love you, love you, love you ! If you were to cast me off now — but you will not — you would never be rid of me. No one should come between us. I would pursue you to the death.'(3)

と激しさを加える。狂的なまでに執拗な意志力はそのまま Dickens 自身のものであろう。と同時に Drood と Rosa は親が約束し，本人同志でもその気で今日迄来たが，果してそのまま結婚してよいのか，結婚する事が死んだ人に対しても，又自分達に対しても真実 (truth to the living and the dead)(4) を貫く所以であるか否かという倫理的課題も残して

(1) *E. D.*, XIX (2), (3) *ibid.* (4) *ibid.*, XIII

いる。愛してはいるが結婚の必然性にそれが結びつかぬ以上はやはり結婚は避けるべきであるという命題である。二人共合意の上で婚約を解消するが，他に相手があった訳ではない。Rasa は Jasper にあれほど愛されながら，はげしい本能的な反撥さえ感じているのである。この矛盾や混沌は恐らくそのまま Dickens の現実であろう。Jasper は「愛は智である」('Love is the highest wisdom ever known upon this earth.')(1) という理想主義的な理念さえ掲げて強く生きようとするが，その信条が貫かれて一つの勝利を獲たとしても結局それが何になるであろうか。愛情は，最後のものであるとする理念は尾ひれをつけて，たとえば *Our Mutual Friend* という物語に完結したとしても，それとは別に人生の孤独や敗北や絶望が実質的には強く残されているというのが真実である。その意味では *Mystery of Edwin Drood* が謎のまま未完に終ったという事実の方が Dickens の最後を飾るにより真実ではなかったであろうか。Jasper の Rosa への焼き尽さんばかりの恋情は Ellen Ternan に対する Dickens の真情でもあったであろうが，しかし同時に Dickens 自身が結婚に破れたという事実も厳として存在しているのである。愛せざるを得ない必然性と，愛すべきでないという人間倫理の世界で Jasper の前掲の引用文から借用すれば，天国と地獄 (Paradises and Hells) を右往左往しながら生きる生き方が，Ternan の出現によってより印象強くされる晩年のみでなく，五十八年に亘る Dickens 生涯の課題でもあった様である。何一つの解決のつかなかった人生とも言えよう。ここでも S. Carton の言葉を再び想起するなら，天国に到り得たと思う瞬間が地獄にある瞬間に他ならず，地獄にいるという認識が，そのまま天国にある幸福の認識に他ならないと言ってよい。

(1) *E. D.*, X

市長夫人 Mrs. Sapsea の墓碑銘には次の様な人を嗤った文字が刻まれている。

STRANGER, PAUSE
And ask thyself the Question,
CANST THOU DO LIKEWISE?
If Not,
WITH A BLUSH RETIRE.(1)

競売人兼市長である夫をうやまった夫人の美徳を讃えて刻まれたものであるが，これをそのまま Dickens に当嵌めて考えよう。悪戦苦闘の生涯を通じて成功の高みに上れば上るだけ敗北の深みに足をさらわれる現実を身を以て体験し，これをそのまま文学とした Dickens の偉大さの前では，我々も亦「赤面して引退る」以外にない様である。

(1) *E. D.*, IV

Bibliography

Text としては Oxford 版 (The New Oxford Illustrated Dickens) (1948–56) を中心に Chapman and Hall 版 (1911) を用いた。

参考文献は手許にあるものを年代順に列べたが，ディケンズ研究を新しく志す人の便宜の為，特に重要と思われるものに * を附した。

John Forster: *The Life of Charles Dickens* * (Chapman and Hall, 1872)

: *The Letters of Charles Dickens* * (ibid., 1880)

H. Taine: *History of English Literature* (Vol. IV, Bk. V, Ch. I) (1874)

G. Pierce and W. Wheeler: *The Dickens Dictionary* (Chapman and Hall, 1878)

A. Ward: *Dickens* * (Macmillan, 1882)

T. Trollope: *What I Remember* (Bentley, 1887)

T. Pemberton: *Charles Dickens and the Stage* (Redway, 1888)

F. Kitton: *Charles Dickens by Pen and Pencil* (Sabin, Dexter, 1889–90)

G. Gissing: *Charles Dickens* * (Gresham, 1898)

J. Hughes: *Dickens as an Educator* (Appleton, 1900)

L. Cazamian: *Le roman social en Angleterre (1830–50)* (1904)

邦訳に石田，白田共訳「イギリスの社会小説」（研究社 1958）がある。

P. Fitzgerald: *The Life of Charles Dickens as Revealed in His Writings* (Chatto & Windus, 1905)

E. Pugh: *Charles Dickens : The Apostle of the People* (New Age Press, 1908)

R. Lehmann: *Charles Dickens as Editor* (Smith Elder, 1912)

: *Memories of Charles Dickens* (Arrowsmith, 1913)

C. Welsh: *Character Portraits from Dickens* (Chatto & Windus, 1908)

B. Shaw: *Introduction to Hard Times* (Waverley, 1912)

F. Smith: *In Dickens's London* (Charles Scribner's Sons, 1914)

G. K. Chesterton : *Criticisms and Appreciations of the Works of Charles Dickens** (J. M. Dent, 1911)

: *Charles Dickens** (Dodd, Mead, 1913)

W. Crotch: *Charles Dickens: Social Reformer* (Chapman and Hall, 1913)

Sir W. Nicoll: *Dickens's Own Story** (Chapman and Hall, 1923)

A. Quiller-Couch: *Charles Dickens and other Victorians** (Cambridge, 1925)

W. Dexter: *The England of Dickens* (Palmer, 1925)

A. Philip. S. Gadd : *A Dickens Dictionary* (Simpkin Marshall, 1928)

R. Straus: *Charles Dickens** (Grosset & Dunlap, 1928)

E. Payne: *The Charity of Charles Dickens* (Bibliophile Society, 1929)

W. Holdsworth: *Charles Dickens as a Legal Historian* (Yale Univ., 1929)

E. Legouis & L. Cazamian: *A History of English Literature* (1930)

C. Osborne: *Letters of Charles Dickens to the Baroness Burdett-Coutts* (John Murray, 1931)

A. Huxley: *Vulgarity in Literature* (Chatto and Windus, 1930)

O. Sitwell: *Dickens* (Chatto and Windus, 1932)

B. Darwin: *Dickens* (Duckworth, 1933)

Hatton and Cleaver: *A Bibliography of the Periodical Works of Charles Dickens* (Chapman and Hall, 1933)

寺西武夫:「ディケンズ」(研究社評伝叢書 1934)

A. Maurois: *Dickens** (Harper, 1935)
邦訳に岩崎良三訳「ディケンズの芸術」(1941) がある。

T. Wright: *The Life of Charles Dickens* (Jenkins, 1935)

G. Santayana: *Works*, Vol. II. '*Dickens*' (Scribner, 1936)

W. Miller and E. Strange: *A Centenary Bibliography of the Pickwick Papers* (Argonaut, 1936)

H. House: *The Dickens World** (Oxford, 1941)

G. Ray: *The Letters and Private Papers of William Makepeace Thackeray* (Harvard, 1945-6)

D. Pope-Hennessy: *Charles Dickens* (Howell, 1946)

E. Wilson: *The Wound and the Bow** (Oxford, 1947)

H. Pearson: *Dickens. His Character, Comedy, and Career* (Harper, 1949)

T. Yamamoto: *Growth and System of the Language of Dickens* (Osaka, 1950)

J. Lindsay: *Charles Dickens: A Biographical and Critical Study* (Dakers, 1950)

J. Symons: *Charles Dickens* (Arthur Barker, 1951)
山本忠雄:「ディケンズの英語」(研究社 1951)
E. Johnson: *Charles Dickens. His Tragedy and Triumph* (Simon and Schuster, 1952)
A. B. Nisbet: *Dickens and Ellen Ternan* (Berkeley, 1952)
M. Harrison: *Charles Dickens, A Sentimental Journey in search of an Unvarnished Portrait* (Cassell, 1953)
K. J. Fielding: *Charles Dickens** (Longmans, 1953)
海老池俊治:「ディケンズ」(研究社評伝叢書 1955)
G. Ford: *Dickens and His Readers** (Princeton Univ., 1955)
W. Addison: *In the Steps of Charles Dickens* (Rich and Cowan, 1955)
M. Praz: *The Hero in Eclipse in Victorian Fiction* (Oxford, 1956)
Butt and Tillotson: *Dickens at Work* (Methuen, 1957)
A. Drain: *Georgina Hogarth and the Dickens Circle* (Oxford, 1957)
J. Hillis Miller: *Charles Dickens, the World of his Novels* (Harvard, 1958)
宮崎孝一:「ディケンズ小説論」(研究社 1959)
M. Engel: *The Maturity of Dickens* (Harvard, 1959)

その他季刊誌 *Dickensian* (Dickens Fellowship) (1905年月刊として創刊, 1919年以降季刊) がある。

INDEX

Addison, J., 16-20, 26, 31.
Agnes, 93, 154, 159, 168, 177.
Ainsworth, W.H., 45-6.
Allen, Arabella, 51, 54.
Allen, Mr., 54-5.
All the Year Round, 206.
American Notes, 134.
anarchism, 202.
Andersen, H.C., 111-2.
Anti-Corn-Law-Agitation, 71.
anti-Dickensian Literature, 186.
Arabian Nights, 26.
Aristotle, 102.
Arnold, M., 67.
Arnold, S.J., 158.
Astley's, 43.
Athenaeum Club, 83.
Austen, J., 25, 123.

Badger, 174.
Bagstock, Major, 151.
Banshee, 105.
Bantam, 59.
Barbara, 100.
Bardell, Mrs., 51.
Barnaby Rudge, 93, 96-7, 117-8, 193, 196, 200, 203fn.
Bath, 51, 59.
Battle of Life, The, 139, 140.
beadle, 75, 77, 81.
Beadnell, Maria, 31, 92-3, 154, 177, 187-8.
Bee, The, 19, 26.
Beethoven, L. van, 41, 141.
Bentley, Richard, 46, 94-7, 135, 139.
Bentley's Miscellany, 46, 95-7.
Berkshire, 72.
Bible, The, 128-30.
Biddy, 194.
Bill, 15.
Blackpool, Stephen, 197-9, 202, 204.
Blake, W., 115.
Bleak House, 74, 117, 121, 143, 166, 176-80, 185, 196.
Bloomsbury Christening, The, 32-6, 38.
Boarding House, The, 32-3, 38.
Boffin, Mr., 208-9, 211, 214.
Boffin, Mrs., 208-9, 214.
Boswell, J., 24.
Bounderby, 196-9.
Boz, 10, 64.
Brass, Sally, 100, 108, 116.
Brass, Sampson, 77, 100, 108, 116.
Bristol, 54.
British Museum, 31.
British Press, 28.
Broadstairs, 83.
Brontë, Emily, 216.
Brown, Mrs., 151.
Brownlow, Mr., 67-8.
Browning, R., 83, 115-6, 136.
Bucket, 167.
Budden, 11-3.
Bumble, Mr., 74-81, 116, 200.
Bunsby, 151.
Bunyan, J., 16.
burlesque, 135.
Bury St. Edmunds, 51.
Bud, Rosa, 215-8.
Byron, Lord, 101.

calomel, 54.
Canterbury, 161.
caricaturization, 63, 113, 125, 162, 164, 186.
Carker, 144-5, 149.
Carlyle, T., 69, 198, 200, 204.
Carlyle, Mrs., 188.
Carpenter, 198.
Carston, Richard, 166, 169, 218.

Carton, Sydney, 201fn, 204-6.
Casby, 183.
Castle of Otranto, The, 24.
catharsis, 106, 109.
Catherine, wife of C. Dickens, 92, 167-8.
Cattermole, G., 108.
Cazamian, L., 9.
Chancery, 166, 169, 171, 178.
Chapman & Hall, 47, 94, 96-8.
Characters, 19, 35, 39, 45.
Charley, 173.
Chartism Movement, 201-2.
Chatham, 26-8, 48.
Chesney Wold, 171.
Chester, Sir John, 118-9, 121, 124, 212.
Chesterton, G.K., 50, 62, 76, 152-3, 155, 174, 184, 210.
Chillip, Mr., 74.
Chimes, The, 117, 139, 141fn, 206.
Chivery, Young John, 183.
Christ, Jesus, 124, 128, 131.
Christmas, 166.
Christmas Book, Thackeray's, 139.
Christmas Books, 137, 139, 141, 166.
Christmas Carol, A, 37, 117, 139, 206.
Chuffy, 122.
Chuzzlewit, Jonas, 121, 123-4, 133.
Chuzzlewit, Martin, 87, 117-8, 120.
Circumlocution Office, 177-9, 198.
Citizen of the World, The, 26, 64.
City Night-Piece, A, 20.
Clare, Ada, 166-7, 177.
Clennam, Arthur, 180, 183-4, 189.
Clennam, Mrs., 180-1.
Coleridge, S.T., 50.
Coffee-shop, 40-1.
Collins, W., 123, 206, 210.
Conductor, 142.
Conrad, J., 186.
Consistory Court, 30.
Corn Exchange, 99.
Corn Law, 71, 138.
Coutts, Miss Burdett, 131, 138, 142, 188.
Covent Garden, 18, 29.
Cowper, W., 161.
Cricket on the Heath, The, 117, 139, 141.
Criminal Courts, 29.
Cruickshank, G., 10.
crumpet, 57.
Cuttle, Captain, 151.

Daily Chronicle, 139fn.
Daily News, 91, 139, 141-2.
Darnay, Charles, 201fn, 203.
Dartle, Rosa, 155.
Datchery, 216.
David, 154-5, 157-60, 191.
David Copperfield, 26, 61, 74, 90, 93, 116-7, 136-7, 142-3, 151-2, 156, 166, 168, 176-7, 184, 193, 195.
Death of Nelson, The, 158.
Dedlock, Lady, 167-8, 187, 191, 198.
Dedlock, Sir L., 167, 171, 198.
Defoe, D., 7, 17.
Dichtung und Wahrheit, 153.
Dick, Mr., 155.
Dingley Dell, 51.
Dinner at Poplar Walk, A, 11.
Doctors' Common, 29, 30, 74, 154.
Dombey, Paul, 143, 146-7, 149, 203, 206.
Dombey & Son, 65-6, 93, 116-7, 121, 135-6, 138, 142-5, 151-2, 166, 173, 176, 184, 187, 203,
Dombey, Mr., 121, 135, 143-8, 151, 198.
Don Quixote, 26, 50.
Dora, 89, 154.

Dorrit (father), 177-8, 198.
Dorrit, Frederick, 182.
Dorrit, Little, 183-4, 188.
Dostoevsky, F., 115, 136.
Dotheboy Hall, 48, 84.
Doyle, C., 210.
Drain, A., 168fn.
Drood, Edwin, 215-7.
Drummle, 192.
Drury Lane, 29.
Dumas, A., 142.
Dumps, Mr. Nicodemus, 34-6, 38.
Durdle, 216.
Dying Clown, The, 47.

Easthope, Sir John, 46, 95.
Eatanswill, 51.
Eden Land Corporation, 120.
Edith, 145, 149.
Edward, Miss, 109.
Egoist, The, 136.
Elder Brothers, The, 142.
Eliot, G., 136.
Ellis & Blackmore, 29.
epistolary communication, 163.
Estella, 188, 191.
Esther, 167-8, 173-5, 177.
Evening Chronicle, 45.
Every Man in His Humour, 141.
Exeter, 91.

Fagin, 67, 72, 75, 79, 81, 84, 116, 144.
Falstaff, 48, 156.
Fanny, 142.
farce, 29.
farmer, 72-3, 77.
Fatal Revenge, or the Family of Montorio, The, 24.
fiction, 156, 165.
Fielding, H., 16, 19.
Fledgeby, 190.
Fleet Prison, 52.
Fletcher, 142.
Flite, Miss, 169.
Flintwinch, Mr. & Mrs., 180-1, 191.
Flora, 178-9, 183.
Florence, 93, 143-4, 146-50, 177.
Forster, J., 26, 28, 46, 91, 100, 106-8, 131fn, 134fn, 139, 175-6, 206.
four-poster, 57.
France, 138, 177.
Frankenstein, or the Modern Prometheus, 24.
French Revolution, 70-1, 196, 201, 204.
French Revolution, Carlyle's, 202.

Gad's Hill, 48, 184.
Gamp, Mrs., 77, 125, 127-33, 135, 151, 187, 191, 206.
Gautier, T., 142.
Gay, Walter, 144, 151.
Genoa, 93.
Ghost's Walk, The, 171.
Gibbon, E., 24.
Gil Blas, 26, 86.
Giles, Mr., 26.
Giles's School, 26.
Gills, Sol, 151.
Goethe, J.W. von, 153.
Goldsmith, O., 19, 20, 22-3, 25-6, 31, 33, 64.
Gordon, Lord, 118, 120.
Gordon Riots, 117, 119.
Gothic romance, 24.
Gowan, Mrs., 189.
Gradgrind, 196-8.
Granger, Edith, 121.
Gray's Inn, 29.
Great Expectations, 61, 117, 136, 143, 166, 176-8, 180, 184-5, 187-8, 191, 196, 199.
Greene, G., 82, 115.
Gridley, 170.
Grimaldi, Mr., 101.
Grip, 119.

grotesque, 151.
Guild Hall, 99.
Gummidge, 204.
Guppy, 174.

hackney-coach, 43-4.
Hamlet, 82, 115, 130.
Hard Times, 64, 66, 89, 117, 121, 177, 179, 191fn, 196, 198-200, 202.
Hardy, T., 136.
Harmon, John, 208-9, 211, 214.
Harold, Leonald, 175.
Harris, Mrs., 127-30.
Haunted Man, The, 139, 141fn, 142, 153.
Havisham, Miss, 180, 187, 191-2.
Hawdon, Captain, 167, 169.
Haymarket, 29.
Headstone, 216.
Heep, Uriah, 116, 154, 158, 185.
Herod, King, 34-5, 37.
Hexam, 209, 211, 214.
Higden, Mrs., 215.
hippopotamus, 50.
History of Charles V, 24.
History of the Decline & Fall of the Roman Empire, 24.
History of Great Britain, 24.
History of Scotland, 24.
Hogarth, Catherine, 46.
Hogarth, George, 46.
Hogarth, Georgina, 168, 187.
Hogarth, Mary, 92-3, 99, 107-8, 154, 168, 177, 187, 189.
Hogarth, W., 10fn.
Holland, Captain, 32.
Horatio Sparkins, 32-3.
Household Words, 142, 199fn, 206fn.
Howard, 173.
Hoyle, 34-5, 37.
Hugh, 119-20.
Hugo, V., 142.
Hume, David, 24.
Hummums, 18.
humour, 90, 183.
Humphry Clinker, 26.
Hunt, L., 82, 142, 174-6.
Huxley, A., 100, 189.
hypocrisy, 123-4, 133.

Iago, 33.
iambus, 108, 110.
Idler, 26.
Insolvent Debtors' Act, 28.
international copyright, 134.
Ipswich, 51, 53, 56.
Irving, W., 158fn.
Italian, The, 24.
itinerant theatre, 40.

Jaggers, 192.
James, H., 186.
Janus, 126.
Jarley, Mrs., 87, 100-4, 109, 113.
Jarndyce, John, 166-9, 175.
Jarndyce & Jarndyce, 166-7.
Jasper, 216-8.
Jeddler, Dr. A., 140.
Jefferey, Lord, 100.
Jellyby, Mrs., 174.
Jingle, Mr., 50-3.
Jo, 167, 170, 173, 175, 193.
Joe, (*B.R.*) 119-20.
Joe, (smith), 192-4.
John, 140.
Johnny, 93.
Johnson, Dr., 16, 24, 26, 40.
Johnson's Dictionary, 16.
Johnson, E., 31, 65, 137, 141, 153.
Jonson, Ben, 141-2.
Joseph Porter, Mrs., 32.
Joyce, J., 115.

Kent, 83.

King Lear, 112.
Kingston, 90.
Kit, 111.
Krook, Mr., 170.

Lammles, Mr. Alfred, 190, 214.
Lammles, Mrs., 214.
Lewis, M. Gregory, 24.
Life of C. Dickens, The, 26, 28.
Life of Samuel Johnson, The, 24.
Little Dorrit, 91, 117, 121, 135, 143, 149, 166, 168, 176-7, 179-80, 196, 198, 203fn, 213fn.
Lives of the Poets, 24.
Lizzie, 209, 214-6.
London Times, 28.
Louisa, 196-8.

Macaulay, T.B., 202.
Macbeth, 115, 135.
Macready, 100.
Macrone, John, 46, 94-6.
Madeline, 84, 86, 89.
Madman's Manuscript, A, 52.
Magwitch, 191-2.
major theatres, 29.
Mann, Mrs., 77-8.
Mantalini, Mr., 85, 90.
Marriage of Heaven & Hell, The, 115.
Marshalsea Prison, 27, 178.
Martha, 155.
Martin, 120, 134-5.
Martin Chuzzlewit, 125, 133-8, 143, 169.
Marton, Mr., 100.
Mary, Queen of Scots, 101.
Mary, 120.
Marx, Karl, 198.
Master Humphrey's Clock, 99.
Maturin, C. Robert, 24.
Maugham, W.S., 156.
Maurois, André, 185.
Meagles, Mrs., 189.
Melmouth the Wanderer, 24.
melodrama, 137, 190.
Mephistopheles, 140.
Meredith, G., 136, 186.
Merry Wives of Windsor, The, 142.
Micawber, Mr., 58, 91, 116, 154-65, 175, 182, 185.
Micawber, Mrs., 90, 162.
Milesian Chief, The, 24.
Minns, Mr., 11-3, 15, 36-7.
Mirror of Parliament, 32.
Monflathers, Miss, 87, 100, 103-4.
Monk, The, 24.
Monks, 68.
Monmouth Street, 42.
Monthly Magazine, 10, 32.
Morning Chronicle, 45-6, 96.
Morris, W., 198.
Mould, Mr., 125.
Mr. Minns & his Cousin, 11, 32-3, 36, 44.
Mrs. Joseph Porter Over the Way, 32.
Murdstone, 116, 154, 157, 185.
Murdstone & Grinby's, 154.
Murray, Mr. L., 101.
mystery, 118, 176-7, 185, 191, 209.
mystery novel, 25.
Mystery of Edwin Drood, The, 117-8, 177, 196, 207, 215, 218.
Mysteries of Udolpho, The, 24.

Nadgett, 122-3.
Nancy, 68, 81-2.
Nandy, 182, 213.
Napoléon, 70.
Nell, 87, 89, 93, 99-101, 103-4, 107-13, 154, 168, 177, 189.
Nelson, V.H., 158.

Neville, 216.
Newgate, 119.
Nicholas, Mrs., 89-90.
Nicholas Nickleby, 48, 65, 83-91, 96, 98, 106, 118, 134-5, 143.
Nickleby, Ralph, 48, 84-5, 116, 121-2, 144.
Nicoll, W.R., 216fn.
Nietzsche, F., 115.
Nipper, Susan, 151.
Nobody's Fault, 198.

O'Connell, Daniel, 100.
Old Curiosity Shop, The, 56, 61, 64, 87, 98-9, 117, 149, 156, 162, 185, 200, 206, 215fn.
Oliver Twist, 48, 64-6, 73, 77, 83-5, 92, 96-8, 106, 143, 173, 182, 185.
omnibus, 43.
On Strike, 199-200.
Othello, 33.
Our Mutual Friend, 93, 117-8, 176, 185, 190, 196, 207-8, 209fn, 211fn, 212fn, 214-6, 218.
Our Parish, 19, 35, 45.

Packlemerton, Jasper, 101.
Panks, Mr., 183.
pantomime, 36, 163.
Pardiggle, Mr. & Mrs., 174.
parody, 101.
Pawnbroker's Shop, 40.
Pearson, H., 202.
Pecksniff, Mr., 77, 120-4, 133.
pedestrian, 41.
Peggotty, 155.
Peggotty, Mr., 193.
Pentonville, 34-5.
Peregrine Pickle, 26.
Perkins's Ball, Mrs., 139.
pessimism, 211-2, 214.
picaresque novel, 56, 86, 87, 109, 112.
Pickwick Club, 50.
Pickwick Mr., 57, 210.
Pickwick Papers, The, 46-7, 49-50, 62-3, 65, 74, 77, 83-4, 92, 94-5, 98, 106, 125, 143, 156, 185.
Pilgrim's Progress, 129.
Pinch, Tom, 133.
Pip, 191-4, 205.
Pipchin, Mrs., 151.
Plornish, Mr. & Mrs., 183.
poor's r tes, 73.
Porter, Mrs. J., 33.
Portsea, 26.
Portsmouth, 87.
Pott, Mr., 135.
Pride & Prejudice, 25, 123.
Prig, Mrs., 127-8.
Private Theatres, 29.
private theater, 29.
Pumblechook, 192.
Punch, 100.

Quilp, Mr., 77, 98, 100, 105-6, 108, 113, 116, 125, 131, 144, 162, 212.
Quilp, Mrs., 109.

Rachel, 197.
Radcliffe, Mrs. Ann, 24, 31.
Radical, 65-7, 142, 152, 173, 200, 202.
Readings, 142.
Redlow, 140.
Reform Bill, 32, 71.
Reporters' Gallery, 10.
Riah, 209.
Richardson, S., 16, 31.
Riderhood, 211-2.
Rigaud, 180-1.
Ring & the Book, The, 116.
Robertson, William, 24.
Robinson Crusoe, 26.
Rochester, 50.
Roderick Random, 26, 86.

Rodger, Sir, 16.
Rokesmith, John, 208-11, 214.
Romance of the Forest, The, 24.
Rose, Miss, 81.
Rousseau, J.J., 201.
Rudge, Barnaby, 119-120.
Rudge, Mrs., 119-120.
Ruskin, J., 198.

Sabbath Bill, 66.
Sapsea, 216.
Sapsea, Mrs., 219.
Sawyer, Bob, 54-5, 74.
Scenes, 19, 22, 35, 39, 45.
school of terror, 24.
Scott, Tom, 105-6, 113.
Scott, W., 25.
Scrooge, 139.
sensationalism, 189.
Sense & Sensibility, 25.
sentiment, novel of, 109, 112.
sentimentality, 189.
Sentimental Journey, 16.
Seymour, Robert, 47, 94.
Shabby-genteel People, 39, 41.
Shakespeare, W., 31, 33, 65, 87-8, 124, 130, 142, 159, 185.
Shakespeare House, 142.
Shelley, Mary W., 24.
Shelley, Percy B., 24.
Sheridan, R.B., 11-2.
shorthand writer, 30.
Show, B., 197.
Sicilian Romance, A, 24.
Sikes, Bill, 68, 76, 81, 84, 116, 200.
Sketch Book, Irving's, 158fn.
Sketches by Boz, 7, 9, 23, 26, 45-6, 53, 65, 74, 86, 88, 94, 96, 98, 118, 193.
Skimpole, Mr., 174-5.
Smangle, Mr., 57.
Smike, Mr., 84.
Smollett, T.G., 16, 19.
Snagsby, Mr., 174.
Snodgrass, Mr., 49, 51, 56.
socialism, sullen, 202.
soliloquy, 115.
Sparsit, Mrs., 191, 198.
Spectator, 16-7, 26.
Speenhamland System, 72.
Spenlow & Jorkins, 154.
Squeers, W., 48, 77, 84-5, 103, 107, 116, 121, 200.
Stagg, 119.
Steele, Sir Richard, 16, 19, 26.
Steerforth, 154.
Sterne, L., 16.
Stevenson, R.L., 186.
Stiggins, Mr., 62, 74.
St. James's Theatre, 141.
Stryver, 201fn.
Sunday Under Three Heads, 65.
Susan, 61-2.
Swift, J., 16.
Swiss, 138, 42.
Swiveller, Mr., 55, 100, 108, 156, 163-5.
symbolism, 137.

Tale of Two Cities, A, 117-8, 120, 143, 149, 151, 196, 199, 202, 203fn, 204, 205fn, 213.
Tales, 19, 35, 45.
Tales of the Genii, 26.
Tapley, Mark, 120-1, 133.
Tappertit, 119-20.
Tatler, 16, 26.
Ternan, Ellen T., 188, 206, 218.
Terrific Register, The, 28.
terror novel. 25.
Thackeray, W.M., 83, 139, 186.
Tibbs, 64.
Tigg, 121-2.
Tillotson, K., 137.
Times, The, 139.
Todgers, Mrs., 133.
Tom, 171-3.
Tom. (Gradgrind's son), 196, 198-9.

Tom-all-Alone's, 171, 173, 197.
Tom Jones, 26.
Toodle, Polly, 151.
Toots, Mr., 151.
Tower of London, The, **45.**
Trade Union, 199.
Trent, Frederick, 100.
triumvirate, 49.
Trollopc, A., 186.
Trotwood, Betsey, 154.
True Sun, 10, 32.
Tulkinghorn, 167, 170.
Tupman, Mr., 49, 56.
Twickenham, 83.
Twist, Oliver, 67-8, 70, **75,** 79-80.

Uncommercial Traveller, **48.**

Varden, Dolly, 93.
variety, 103, 137.
Veck, Toby, 140.
Vicar of Wakefield, The, **26.**

Wagg, Silas, 209.
Walpole, W., 24.
Walters, J.C., 216fn.
Wardle, Mr., **51.**
Warren's Blacking, 152.
Waterloo, 70.
Watt, James, 71.
Waverley Novels, 25.
waxwork, 100, 103.
Weller, (father & son), 50, 52, 58, 63, 93, 157, 162, 164.
Weller, Sam, 51, 56, 58, 60-1, 94, 133, 135, 156, 162-3.
Weller, Tony, 58-61.
Wellington House Academy, 28.
Wemmick, 192.
wentilation gossamer, 59.
Wickam, Mrs., 151.
Wickfield, 154.
Wild Irish Boy, The, 24.
Wilfer, Bella, 208-10, 214.
Willy, 110.
Winkle, Mr. 49-51, 56.
witticism, 12.
Woman in White, The, 206fn, 210.
Woodcourt, 167.
Wordsworth, W., 8, 9.
workhouse, 69, 72-3, 77.
Wuthering Heights, 216.

Yorkshire, 76, 84, 87.

ディケンズの文学　（著者との協定により検印を廃止します）

昭和 35 年 4 月 5 日　初版印刷
昭和 35 年 4 月 10 日　初版発行

定価 420円

著　者　田辺昌美
発行者　南雲清太郎
印刷者　西村允孝

発行所　東京都千代田区西神田 2 の29
振替口座・東京 46863 番
株式会社 南雲堂

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　（小倉製本）